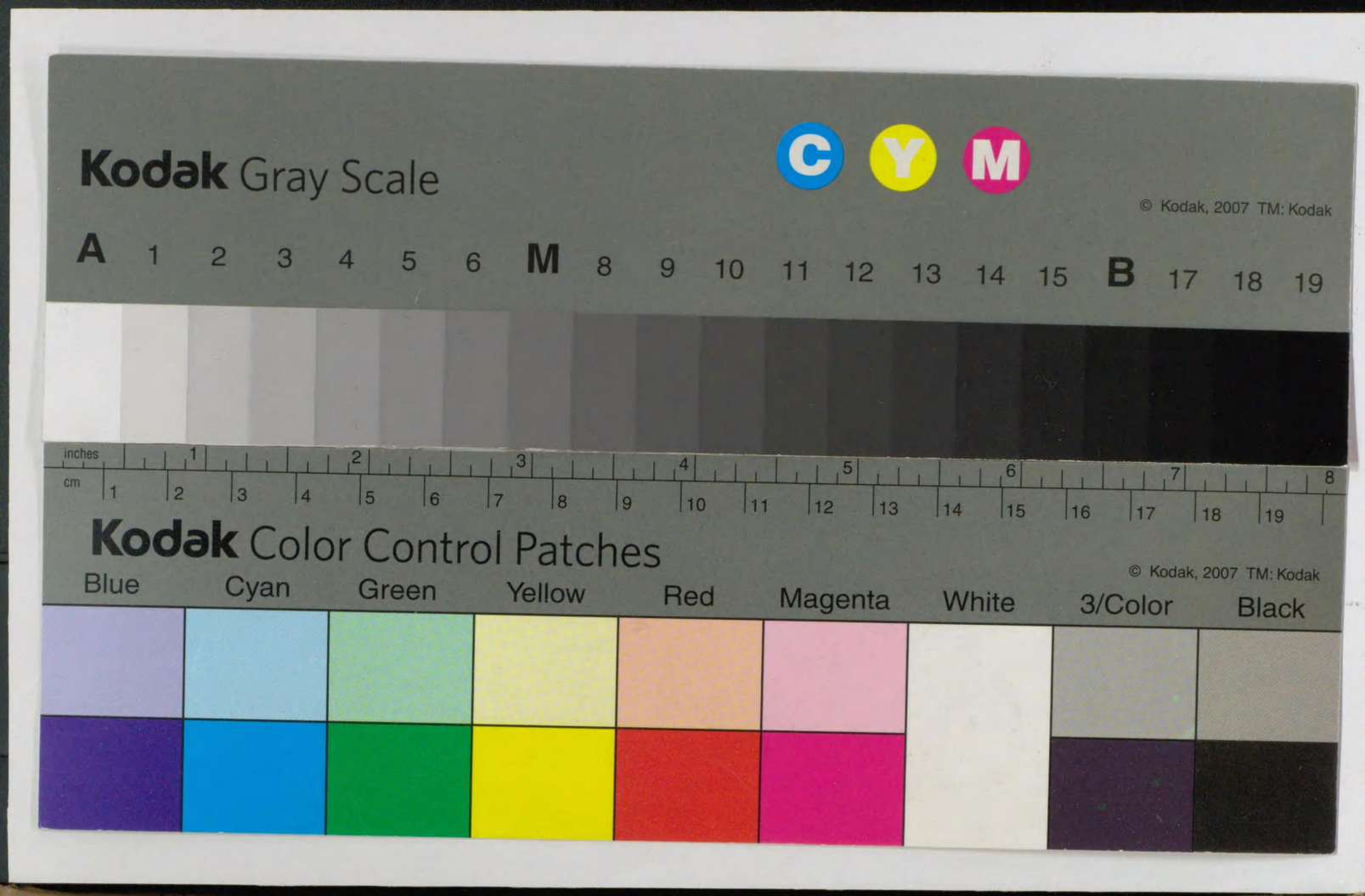

554
174

554-174
12005015098 91

24. 10. 21

西洋歷史講義 上卷

文學士 河野元三著

東京 金利芳流堂

昭和二年 帝國圖書館藏

554~174

緒言

一、本書は中等程度の學校で西洋歴史を學修して居る人達及び更に其研究を進めやうとする人達の參考となり伴侶とならんことを期する。

一、然れば本書には普通の教科書で判るやうなところは略説して特に注意を要するやうなところを詳説してゐる。

一、歴史の教科書や歴史の本を讀んだだけではホントの歴史は領解し難いことがあり興味も起らないと思ふから自分の出來る限り種々な方面からそれ等の缺點を補ふために諸大家の著書より引用したものが尠くない。文學的作品などの歴史の領解を助けると思つたものも自分の知つた

限り擧げて置いた。

一、本文中に歐洲文字を挿入するのは煩はしいと思つたので卷末に索引としてそれ等の文字を列べて置いた。普通の索引とはやゝ體裁を異にしてゐるのはそのためである。

昭和二年四月

著者識

西洋歷史講義 上卷

目次

第一章　古代東方諸國民……一——三九

第一節　エヂプト……一——一三

(一)ニール河…定期氾濫……一——三

(二)政治…メネス…フフ…アーメス…トトメス…ラメス二世……三——六

(三)大建造物…ピラミド…スフィンクス…オベリスク……六——九

(四)宗教及學術の發達…多神教…ミイラ…書寫の法…古代エヂプト人の生活)……九——一三

第二節　バビロニヤ(カルデヤ)……一四——一九

(一)メソポタミヤ…カルデヤ……一四——一五
(二)ハムラビ王…バビロン…ハムラビ王…(石柱法の内容)…一四——一七
(三)楔形文字……一七
(四)宗教及文明…宗教…天文數學……一七——一九
第三節　ヘブライ・フェニキヤ……二〇——二八
(一)シリヤ……二〇
(二)ヘブライ…アブラハム…ヤコブ　モーゼ……二〇——二一
(三)ユダヤ教…一神…師士…サウル…ダヴィデ…ソロモン…二一——二三
(四)フェニキヤ…フェニキヤ…シドン　ティル……二三——二七
(五)アルファベット…フェニキヤ人の音符文字……二七——二八
第四節　アッシリヤ……二九——三二
(一)アッシリヤ…アッシリヤ…古代東方諸國統一…ティグラトピレサル…サルゴン二世…アスルバニバル…ニヌア……二九——三一

(二)新バビロニヤ…ナボポラサル…ネブカドネザル…バビロン城……三一——三二
第五節　ペルシヤ……三三——三九
(一)ペルシヤ…キロス…(リディヤ…スキタ族)…カンビセス…ダリオス…(ベヒストゥンの碑)……三三——三八
(二)ザラトゥストラ教…ザラトゥストラ……三七——三九
第二章　ギリシヤ……四〇——八三
第一節　ギリシヤ人の發展……四〇——四八
(一)國土と住民…先住民の文化…(アルゴス…ミケーネ)…ドーリヤ族…イオニヤ族……四〇——四四
(二)國民の團結…ギリシヤ人…神事同盟…(デルフィ)…國民的祝祭…(オリンピヤ)……四四——四八

第二節　スパルタとアテネ……四九——五五
(一)リコルゴスの立法…社會…教育…政體……四九——五〇
(二)ペロポネソス同盟……五〇
(三)アテネの民政…アルコン…ドラコ…(ドラコの血法)…ソロン…クリステネス…(オストラキズムス)……五一——五五
第三節　ペルシヤ戰役……五六——六〇
(一)東西最初の衝突…イオニヤの亂…第一回の征討軍…第三回の征討軍…テミストクレス…プラテーエー……五六——五九
(二)アテネの全盛…デロス同盟…キモン……五九——六〇
第四節　ギリシヤの學藝……六一——七六
(一)ペリクレス時代…民主政完成…アテネ裝飾…(アクロポリス)…ピレウス港修築…學藝奬勵……六一——六四
(二)學藝の黃金時代…總原因……六四
(三)神話と傳說…神話…英雄傳說……六五——六七
(四)哲學…ミレトス派…ソフィスト派…ソクラテス…プラトン…アリストテレス……六八——七〇
(五)文學…ホメロス…(トロヤ)…ヘシオドス…エースキロス…ソフォークレス…エウリピデス…アリストファネス…ヘロドトス…トゥキディデス……七〇——七四
(六)美術…建築　彫刻　(ポセイドン)……七四——七六
第五節　ギリシヤの內訌……七七——八三
(一)ペロポネソス戰役…アテネ・スパルタの反目…戰役第一期…戰役第二期……七七——七九
(二)スパルタの專橫…一萬人の退却…アンタルキダス條約……七九——八一
(三)テーベの覇業…テーベ…エパミノンダス…レウクトラ

…マンティネーヤ…(古代ギリシャ人の生活)……八一——八三

第三章　東西文明の融合……八五——九三

第一節　アレクサンドル大王……八五——九三

(一)マケドニヤの興隆…フィリップ二世…(ファランクス)…デモステネス　ケーロネーヤ……八五——八六

(二)大王の遠征…父王の遺圖…征路　大帝國　死後の天下……八七——九〇

(三)アレクサンドリヤの文化…哲學　幾何學　美術……九〇——九二

第四章　ローマ……九四——一四三

第一節　ローマの興起……九四——一〇四

(一)ローマ都…ラティウム　七丘市…社會…王…王政……九四——九七

(二)貴族平民の爭…護民官　十二表法典…リキニウス法……九七——一〇二

(三)イタリヤの征服　サムニテ戰爭…ピロス戰爭……一〇二——一〇三

(四)半島の經營…ムニキピヤ…コロニエー…ソキイー　軍用道路……一〇三——一〇四

第二節　地中海沿岸の覇者……一〇五——一二〇

(一)ポエニ戰役…カルタゴ…第一回戰役…第二回戰役…第三回戰役……一〇五——一〇八

(二)その他の地方…イリリヤ地方…ガリヤ地方…シリヤ地方…マケドニヤ…ギリシャ…ペルガモン……一〇八——一一〇

第三節　ケーザルの業……一一一——一二〇

(一)貧富兩黨の爭…グラックス兄弟…マリウスとスルラ…ポンペイウスとケーザル……一一一——一一三

(二)第一回三頭政治…三頭…ケーザルの威名　ポンペイウスとの爭……一一三——一一六

(三)ケーザルの事蹟…ケーザルの死…數學の才…(ユリウス

曆)…文學の才…土木の施設……一一六—一二〇

第四節　帝政の盛期……一二一—一二八

(一)アウグストゥスの治績…アウグストゥス…行政組織…學藝の奬勵…遊民の救助…ゲルマニヤ拓境…トイトブルグ…一二一—一二三

(二)帝政の最盛期…ネロ…ヴェスパジヤヌス…トラヤヌス…ハドリヤヌス…マルクス=アウレリウス……一二三—一二六

(三)キリスト教の西傳…イエス……一二六—一二八

第五節　帝國の衰弱……一二九—一三三

(一)衰弱の原因…東隣の强國…軍隊の跋扈……一二九—一三〇

(二)ディオクレティヤヌスの分治…アウグストゥス…ケーザル…一三〇

(三)コンスタンティヌス帝の統一…遷都…キリスト教公認…ニケーヤ宗教會議……一三〇—一三二

(四)テオドシウス帝の分治…西帝國…東帝國……一三二—一三三

第六節　ローマ文明の特色……一三四—一四二

(一)國民性…實際的…家族制……一三四—一三五

(二)文物…宗教…哲學…文藝…(キケロ…ホラティウス…ヴィルギリウス…オヴィディウス…リヴィウス…タキトゥス…プリニウス…プルタルクス)……一三五—一三八

(三)土木…軍用道路…上下水道…市場…公共建築物…(コリシウム…キルクスマクシムス…浴場…凱旋門…記念柱…萬神殿)…(古代ローマ人の生活)……一三九—一四二

第五章　過渡時代……一四四—一八五

第一節　種族の大移動……一四四—一五二

(一)ゲルマン民族…北ゲルマン族…東ゲルマン族…西ゲルマン族…宗教…社會組織…民族性……一四四—一四六

(二)フンの侵入…フン族…西ゴート…アティラ…大長老レオ…一四六—一四八

(三)諸部の建國…西ゴート王國…ヴンダル王國…オドワケル王國…アングロサクソン王國…フランク王國…東ゴート王國…ランゴバルド王國……一四八—一五二

第二節　東ローマの中興……一五三—一六〇

(一)ユスティニヤヌス帝…帝以前の政治宗教狀態…(ハーギャソフィヤ)…法典の編纂…養蠶法の傳來…外征……一五三—一五八

(二)レオ三世帝…偶像破壞令…ローマの大長老…東西兩教會……一五八—一六〇

第三節　サラセンの興起……一六一—一七二

(一)マホメット以前のアラビヤ…統一缺如…血族的復讐心…カーバ崇拜…マホメット……一六一—一六二

(二)回教の創唱…メディナ…ヘヂラ…(ヘヂラ曆)…コーラン……一六二—一六四

(三)サラセン帝國…カリフ…初期三代…オムマヤ朝…アッバス朝…西カリフ朝……一六四—一六六

(四)サラセンの文化…ササン朝…文學…科學…數學…工藝…航海術…通商…建築術…アルハンブラ)……一六六—一七二

○第四節　チャールス大帝……一七三—一七七

(一)フランク王國…宮宰…チャールス＝マルテル…カロルス朝……一七三—一七四

○(二)チャールス大帝…外征…內治…教育…西ローマ皇帝……一七四—一七六

(三)帝國の分裂…ヴェルダン條約…メールセン條約…東西兩フランク……一七六—一七七

第五節　ノルマンの建國……一七七—一八五

(一)ノルマンの雄飛…雄飛…新大陸最初の發見者……一七八—一八〇

(二)ロシヤの建國…スラヴ…ルーリック…ノブゴロード…キエフ……一八〇—一八一

(三)フランス侵略…バリーの園…ノルマンディー……一八一—一八二
(四)イングランド侵略…アルフレッド大王…クヌード大王…エドワルド…ヘースティングス……一八二—一八四
(五)南イタリヤ侵略…タンクレドの諸子…シチリヤ…サレルノ……一八四—一八五

第六章　封建時代……一八六—二三三

第一節　中古西歐の狀態……一八六—一九二
(一)宗教萬能…神明裁判…神明平和…神罰……一八六—一八七
(二)封建制度…封土…主從の關係…封建的義務……一八七—一八九
(三)武士道…扈從…見習…武士…武士道……一八九—一九〇
(四)封建社會…貴族…農民…商工階級……一九〇—一九二

第二節　神聖ローマ皇帝……一九三—一九六
(一)オットー大帝…ヘンリー一世…オットー一世…神聖ローマ皇帝……一九三—一九四
(二)グレゴリー七世…法皇…(クリューニー律院)…封地權の爭…カノッサ事件……一九四—一九六

第三節　十字軍……一九七—二〇五
(一)起因…本來の目的…クレルモンの會合……一九七—一九八
(二)經過…第一回…第二回…第三回…第四回…第五回…第六・七回…アッカ陷落……一九八—二〇一
(三)影響…封建制度衰頽…人智の發達…市府の勃興…(ハンザ同盟)…教會の失勢…(僧團の發生)……二〇一—二〇五

第四節　百年戰役……二〇六—二〇七
(一)イングランドの發達…ノルマン朝…プランタジネット…デオン王…大憲章…ヘンリー三世……二〇六—二〇九
(二)フランスの發達…ロベール家…カペー朝…三部會……二〇九—二一〇

(三)百年戰役…原因…スロイス…クレシー…プレティニー…アゼンクール…オルレヤン……二一〇—二一三
第五節　中央集權……二一四—二二〇
(一)フランス……常備軍…ブルゴーニュ沒收…ブルターニュ併合……二一四—二一五
(二)イングランド…薔薇戰役…チューードル朝……二一五—二一七
(三)スペイン…アラゴンカスティリヤ合同…グラナダ…宗規裁判…ポルトガル……二一七—二一九
(四)國民文學…フランス…イングランド…スペイン……二一九—二二〇
第六節　東歐の情勢……二二一—二二四
(一)ロシヤの復興…モンゴル侵入…キプチャク汗國…モスクバ大公……二二一—二二二
(二)東ローマ滅亡…オットマントルコ…ティムール…コンスタンティノプル陷落……二二二—二二四
第七節　中歐の形勢……二二五—二三二
(一)帝權の衰微…大空位時代…ハップスブルグ家…黃金文書…二二五—二二六
(二)スウィスの獨立…シウィーツ盟約…新式の兵制…モルガルテン…センパッハ…ネーフェルス……二二六—二二七
(三)イタリヤの情勢…法皇權の衰微…改革の叫…六國並立(ミラノ…ヴェネチヤ…ジェノバ…フィレンチェ…法皇領…ナポリシチリヤ)…(外交術發達)……二二七—二三二
第七章　ルネッサンス時代……二三四—二六八
第一節　文藝の復興……二三四—二五二
(一)文藝復興の起因…大學…煩瑣哲學…(アルベルトゥス＝マグヌス…トマス＝アクィナス…ロージャー＝ベーコン…ドゥンス＝スコトゥス)…人道主義…復興の先驅者…(ダンテ…

ペトラルカ…ボッカチオ）……二三四—二四一
(二)美術の興隆…建築…繪畫（レオナルド…ラファエロ…ミケランゼロ…コレヂオ…ティチヤノ…ティントレット…ヴェロネーゼ…デゥラー…ホルバイン）……二四一—二四七
(三)文藝…マキヤウェリ…アリオスト…タッソー……二四七—二四八
(四)科學及び批判…コーペルニクス…ヴラ……二四八—二五〇
(五)諸種の發明…磁石…火藥…活字印刷術…（時計の名稱）…二五〇—二五二
第二節　地理上の發見……二五三—二六一
(一)東方航路…マルコ＝ポーロ…（金銀島）…ヘンリー航海者王…ディヤス…ダガマ……二五三—二五七
(二)新大陸…コロンブス…バルボア…マゼラン……二五七—二六一
第三節　ポルトガル・スペインの發展……二六一—二六七
(一)東洋に於けるポルトガル…カブラル…アルメイダ…アルノケルケ……二六一—二六三
(二)新大陸に於けるスペイン…コルデス…ピサルロ…（黑奴使用）……二六三—二六七
第八章　宗教改革……二六九—二九四
第一節　改革の端緒……二六九—二七九
(一)教會の腐敗…懺悔の濫用…喜捨の誤解……二六九—二七〇
(二)人智の開發…ロイヒリン…エラスムス……二七一—二七二
(三)罪障消滅札販賣…法皇朝の豪奢…罪障消滅札濫賣……二七二—二七三
(四)ルーテルの抗議…マルティン＝ルーテル…九十五箇條の抗議…破門狀破棄……二七三—二七六
(五)ルーテル派抑壓…ウォルムス國會…ワルトブルグ…諸種の亂……二七六—二七九
第二節　改革の紛議……二八〇—二八七

(一)ドイツの事情…マクシミリヤン一世…チャールス五世……二八〇—二八二
(二)イタリヤの事情…法皇黨・皇帝黨…外國の干渉…イタリヤ戰役……二八二—二八四
(三)新教の處置…スパイエル國會…アウグスブルグ教會…シュマルカルデン同盟…トルコの侵入…ニュールンベルヒ和議…シュマルカルデン戰爭……二八四—二八七

第三節　新教の弘通……二八八—二九〇
(一)アウグルスブルグ宗教會議…宗教和議の決定…缺點……二八八—二八九
(二)スウィスの宗教改革…ツウィングリー…カルヴィン……二八八—二九〇
(三)新教各派弘通區の域…ルーテル派…ツウィングリー派…カルヴィン派……二九〇

第四節　改革の反動……二九一—二九四
(一)舊教徒覺醒…トレント會議…宗規裁判……二九一—二九二
(二)耶蘇會の興起…ロヨラ…組織…手段……二九二—二九四

第九章　オランダの獨立……二九五—三一一

第一節　獨立の事情……二九五—二九八
(一)フィリップ二世…その人物…政策……二九五—二九六
(二)ネーデルランドの國情…商工業盛大…南北特色の相違…政治上の特權…信仰上の寛容……二九六—二九八

第二節　獨立の叛亂……二九九—三一一
(一)フィリップの抑壓…總督政治…乞食黨……二九九
(二)オレンヂ公ウィリヤム…アルバ公…オレンヂ公…バルマ公……三〇〇—三〇一
(三)ユトレヒト同盟…ユトレヒト同盟…ウィリヤム遭難…休戰條約……三〇一—三〇二
(四)國運の隆昌…通商航海の發達…(マンハッタン島)…學術の

興隆…(デカルト…スピノーザ…グロティウス)……三〇二—三一一

第十章　イングランドの興隆……三一二—三二六

第一節　ヘンリー七世……三一二—三一四

(一)王權濫用…皇室廳…献金…カボット……二一二—二一三

(二)結婚政略…マルガレット…アーサー……三一三—三一四

第二節　ヘンリー八世……三一五—三一八

(一)皇后の離婚…カザリン…ウールジー……三一五—三一六

(二)法皇との分離…大權令…イングランド教會…背國教徒…(ロンドン塔)……三一六—三一八

第三節　エリザベス……三一九—三二六

(一)國教確立…エドワルド六世…マリヤ…エリザベス……三一九—三二〇

(二)マリヤステゥワルト事件…マリヤステゥワルト…擁立の陰謀…處刑……三二〇—三二一

(三)無敵艦隊事件…無敵艦隊…イギリス海峽の戰……三二二—三二三

(四)海外發展…ヴァージニヤ…東インド會社……三二三—三二四

(五)文運の隆昌…シェークスピーヤ…ベーコン…バーレー男…三二四—三二六

第十一章　フランス宗教の紛議……三二七—三三八

第一節　ユグノー戰役……三二七—三三一

(一)ギーズ黨跳梁…ユグノー…皇太后カザリン…ギーズ公…ヴッシーの虐殺……三二七—三三〇

(二)聖バルトロミュー祭日の虐殺…新教徒の權勢…虐殺の勅命……三三〇—三三一

第二節　ヘンリー四世……三三二—三三八

(一)內亂鎭定…兩教徒結黨…三人ヘンリー戰爭…ナバラ王ヘンリー…ブールボン朝……三三二—三三四

(二)紛議の決定…改宗…ナント勅令…王の遭難…シュリー公…三三四—三三八

第十二章　三十年戰役……三三九—三五五

第一節　起因……三三九—三四〇

(一)アウグスブルク宗教和議の缺點……三三九

(二)新舊兩教徒の不和…新教徒聯合…舊教徒同盟……三三九—三四〇

第二節　經過……三四一—三四五

(一)ボヘミヤ時期…フレデリキ五世…ワイセベルヒ…プファルツ沒收……三四一—三四二

(二)デンマルク時期…クリスティヤン四世…ワルレンスタイン…リゥベック和議……三四二—三四三

(三)スウェーデン時期…グスタヴス＝アドルフス…ワルレンスタインの再起…リュッチェン……三四三—三四五

(四)スウェーデン＝フランス時期……三四五

第三節　ウェストファリヤ和議……三四六—三五〇

(一)和議の締結…ミュンステル・オスナブリュック…宗教關係…土地關係…帝國關係…時代思想……三四六—三四九

(二)戰爭の影響…人口減少…國力沮喪…商工業萎縮……三四九—三五〇

第四節　新舊兩教國民の對照……三五一—三五五

(一)舊教國民…スペイン…ベルギー……三五一—三五二

(二)新教國民…オランダ…ドイツ……三五二—三五三

(三)グレゴリー曆…曆法改正…ガリレオ……三五三—三五五

第十三章　王權神授說時代……三五六—三九六

第一節　フランスの强盛……三五六—三七四

(一)ブールボン初期…リシュリューの二大政策…マザレン……三五六—三五八

(二)ルイ十四世…コルベール…ルテリエー…ネーデルラン

ドの役…オランダの役…ブルッの役……三五八—三六五
(三)スペイン王位繼位戰役…王位候補問題…交戰…ユトレヒト和議……三六五—三七〇
(四)フランスの文物…宮中驕奢の生活…フランス文學黃金時代…フランス文化の流布……三七〇—三七四
第二節　イングランドの革命……三七五—三九六
(一)ステワルト朝…英蘇人的合同…王權神授說…新舊兩教徒の離叛…チャールスの無議會政治…長期議會…內亂…王の處刑……三七五—三八二
(二)共和政治…護國卿…航海條例…アイルランド抑壓……三八二—三八五
(三)名譽革命…王政復古…チャールス二世…議會の抑制…ヂェームス二世…名譽革命……三八五—三八九
(四)イギリスの發展…權利宣言…國威發揚…イングランド銀行…アンナ女皇…英蘇合同…學藝興隆……三八九—三九四
(五)ハノヴー朝…王位繼承法制定…政黨內閣…僭位者の亂…三九四—三九六
第十四章　善政君主時代……三九四—四三五
第一節　ロシヤの興起……三九七—四一三
(一)ピーター大帝…ミカエル＝ロマーノフ…ピーター…大目標……三九七—四〇〇
(二)北方戰役…起因…經過…ニースタット和議……四〇〇—四〇五
(三)カザリン二世…ピーター三世…ポーランド分割…トルコ戰役…極東發展……四〇五—四一三
第二節　プロシヤの勃興……四一四—四三五
(一)フレデリッキ大王…ブランデンブルグ侯…フレデリッキ一世…フレデリッキ二世……四一四—四一七
(二)オーストリヤ繼承戰役…繼承典範の改正…シレジヤの

占領…アーヘン和議……四一八—四二一
(三)七年戰役…復讐の計畫…七年戰役…フーベルトゥスブルグ和議……四二四—四三一
(四)戰後のプロシヤ…戰後の經營・文學の奬勵……四三一—四三五

第十五章　北米合衆國の獨立……四三六—四五六

第一節　植民地七年戰役……四三六—四四七
(一)インドに於ける兩國…テゥプレックス…クライヴ…インド帝國……四三六—四四〇
(二)新大陸に於ける兩國…兩國植國民地…アカディヤ問題…イギリス領の發達……四四一—四四七

第二節　獨立戰爭……四四八—四五六
(一)原因…印紙條例…茶稅…茶船狼籍……四四八—四五〇
(二)經過…大陸會議…レキシントン…獨立の宣言…列國の同情…ヨークタウン……四五〇—四五三
(三)結果…ヴェルサイユの和議…北米合衆國……四五三—四五四
(四)國情…財政狀態…國體に關する意見……四五四—四五六

年表
索引
地圖

目次終

西洋歴史講義 上卷

河野元三著

第一章　古代東方諸國民

第一節　エヂプト

ヘロドトゥスは云つた、「エヂプトはナイル河の賜である」と。その意味は、この河が毎年(イ)定期の氾濫を爲して、この地方を住みよく暮らしよくさせ、古代エヂプト文明の發達を促したといふにある。

(一)ナイル河

(イ)ナイル河の定期氾濫　この河は、毎年春から夏にかけて、上流地方なる赤道附近の夥しき降雨と、アビシニヤ地方の融雪とのために、水嵩を増し、下流地方なるエヂプトは、夏から秋にかけて、定期の氾濫をする。洪水の後には、兩岸の地は、

上流から搬ばれた沃土で覆はれ、炎熱なる氣候と相待つて、農耕を容易ならしめる。かくの如く、衣食住に便宜が多いため、早くより、スエズ地峽を經て、アジヤ方面からの移住民が來り集つて、人口蕃殖し、文化亦從つて、夙に發達したのである。

此國に、人類の棲息することの出來る土地の出來たのは、ナイル河に因るのであります。若し此のナイル河が無かつたならば、エヂプトは、人類の住はれる國としては、本來存在して居らないのである。即ちアラビヤ砂漠と、西のリビヤ砂漠とが一つになつて、人類の住はれるナイルの流域に、出來なかつたのである。此の河に御承知の通り、中央アフリカの森林沼澤の地から發して、白ナイルとして北流し、其中流に於てアビシニヤの高原から發する青ナイルを合して段々北流し、遂に地中海に注ぐのであります。而して此河の特質は下流に行くに從つて水量が減ずる。即ち其の水が砂漠に段々吸收せらるゝのであつて、其の河に注いで水量を增すやうな川が、中流以下に一つも無いから段々下流に行くほど、水量が減ずる。若し上流に於ける水が、非常に澤山でなかつたら、他のアフリカの砂漠地方に於ける河の如く、中流にして消滅して仕舞ふのであります。それが、水の量が多い爲に、地中海まで到達すると云ふ有樣になつて居る。ナイル河水の分量は、一年の中、半年は毎日增して居り、半年は減じて居つて、一ヶ月と、全く同じ量を保つことは無い。と云ふのは六月下旬頃から段々水量が殖えて來て、九月十月の間に、最も高い水嵩に達し、それから段々減水し始めて、來年の夏至の頃まで、始終減つて行くのである。それで其の氾濫時に上流から肥料を分解して運び出して來、さうしてそれが下流に沈澱して自然に肥沃の土地を形造る。其所に種子を播けば、別に肥料を施さずして、非常に大きな收獲が出來る。是は普通の教科書にも書いてあるが、其の氾濫の際に水の覆ふ部分は、餘ほど狹いものである。……氾濫の際水の覆ふ部分はナイルの河谷の全部ではありませぬ。河谷の全部の幅は、一番廣い所で、日本の十里、狹い所では、五里に過ぎませぬ。甚しき處は、リビヤ・アラビヤの兩砂漠が、直に河に逼つて居る所もあります。併し此の五里乃至十里の河谷と云ふものは、悉く耕作に適する譯ではありませぬ。其の一部分即ちナイルの水の最も氾濫した時分に此に覆はれる土地、若くは其の水の地下に滲入したのを人工で汲上げることの出來る場所だけが、耕作地となるのです。それを一歩出ると、不毛の砂漠になります。さう云ふ譯でありますから、カイロ以南のエヂプトの土地は、至つて幅が狹い、地中海の海岸から今政治上の境になつて居りますリヂーバルファまで、二百何十里もありますが、それ程の長さがありましても其面積は我日本の九州よりも、遙に狹いと云ふことになつて居ります。（村川堅固氏「エヂプト旅行談」）

（二）政治

エヂプトに君臨した王は、ファラオと稱して、日神、ラーの裔として崇められ、世襲專制君主であつた。王の下に階級制度の社會があつて、國民は神官・戰士・平

民等に區別せられた。王の中で有名なのは(イ)メネス(ロ)フフ(ハ)アーメス(ニ)トトメス三世(ホ)ラメス二世である。

(イ)メネス　紀元前五十世紀頃メンフィスを都として王國を建てたエヂプト最古の王である。メンフィスは、今カイロの南にあたる。

(ロ)フフ　紀元前三九〇〇乃至三五〇〇頃に在位した第四王朝の王である。現にギゼーの西に殘存する三個のピラミットのうち最も大なるものは、この王の建造にかゝる。

(ハ)アーメス　紀元前一五八〇頃、起ちてヒクソスを逐ひ、國威を復した第十八王朝の王として、名がある。ヒクソスとは、牧王の義で、紀元前二〇〇〇頃、東方から侵入して、當時(紀元前二八〇〇頃第十一王朝以來)テーベ(今ルクゾール附近)に都してゐた、エヂプトの第十四王朝を征服した民族である。牧王朝は、約四百年間君臨し、その間エヂプトの文化は、寧ろ退歩したが、その時代に、東方諸國との交通が大に開くるに至つたのと、エヂプト人が馬の使用を教へられたのとは、注意すべきことである。

五千年(二十六王朝)

(ニ)トトメス三世　紀元前一四八一乃至一四四九頃在位の第十八王朝の王で、南はエティオピヤを服し、北はシリヤを征して、古代エヂプト最大の版圖を有した。

(ホ)ラメス二世　紀元前一三〇〇乃至一二七〇頃の在位で、エヂプト盛時最後の第十九王朝の王である。前王の時以來、東方の强國ヒタと相爭つたが、王の時これと和し、爾來大に内治に心がけ、國運隆昌で、商工業ともに大に興り、王宮神殿の造營相ついだ。然るに、王の死後、國威次第に傾き、南方からエティオピヤ人の侵入を蒙むつたのをはじめとし、諸外國民族相ついで入寇し、終に紀元前五二五第二十六王朝のプサンマティク三世の時、ペルシヤ王カンビセスに征服せられて後は、全くその獨立を失つた。

ラメス王がヒタに勝つた記念碑は、ニール河上流アブーシンベルの岩上に刻まれ、ヒタとの和約は、世界最古の國際條約文の一として現存してゐる。ヒタとは、當時シリヤ・小アジヤにかけて西アジヤに優勢であつた民族で、その出身は不詳であるが、或は今のアルメニヤ人に近き、東方民族であつたであらうか。その最盛時には、北は黑海岸よりシリヤ・小アジヤの全部、東は都カルメシユをエウフラテス河上に置き、西はエーゲ海上の島々、南はカデス(今スペインのカディス)に及んだ。ラメス二世と、ヒタの

王ヒタシルとが、オロンテス河畔に戰つたことは、時のエヂプトの詩人ペンタウルの歌ふところとなつた。

世界最古の條約文は、テルエルアマルナ文書（一八八七・八年の交カイロの南のアメンホテプ四世の墟址で發見せられたバビロン語の三百の粘土板）のうちにある、トトメス四世とバビロニヤとの約文で、紀元前一四五〇頃のものとせられる。

（三）大建造物　この絶對權を有する君主の威力を表象する爲めに、エヂプトの美術は、精緻よりも粗大を以て誇るのが特色であつた。かの（イ）ピラミッドをはじめとして（ロ）スフィンクス（ハ）オベリスクの如き、現存する建造物の壯大なのは、昔から人の驚嘆するところである。

（イ）ピラミッド　は、エヂプト國王の陵墓で、巨大なる石を方錐形に積みあげてつくつてある。前にのべたフフ王のピラミッドは、今ギゼーの附近に現存するもののうち最も大なるもので、その高さ百四十四メートル、底邊の長さ二百三十三メートル、これに用ゐた石灰岩の數、實に二百餘萬個に及び、これが築造には、毎年三箇月間（洪水で耕作の出來ない所謂農閑の七・八・九の三箇月）づゝ、十萬人を使役して、二十年を要し、その石材は、ニール河の右岸から運んだといふ。その大工事たることが知られる。

ピラミッドは、いづれもニール河の左岸に在つて、その底邊は正しく東西南北の方角に合せることを特色とする。フフ王のピラミッドにつきて、その構造を述べると、北面の中央に入口あり、中に通ずる道を上れば、中央部の少しく南に王の納棺室あり、室から斜上に北及び南面に向つて、二個の通路があるのは、空氣流通の爲めである。斜に道を下れば、地下室に通ずる、こは后妃の室と稱せらるゝものである。國都テーベに移つてからは、ニール河左岸の丘陵を掘つて、横穴をつくり、これに王棺及び副葬品を收め、これを蔽ふに土砂を以てしたから、王の谷の名があるに至つた。近日發掘せられたトウト、アン、カメン（第十八王朝最後即ち前一四〇〇の頃の王）の陵は、その一である。

（ロ）スフィンクス　大ピラミッドの附近に、大スフィンクスがある。人首獅身の石像で、旭日神（ハルマヒス）にかたどつたと云はれる。高さ十九メートル、耳の長さ一メートルあり、リビヤ沙漠に面して立つ。小さいスフィンクスは、我邦の祠前に見る狗犬の如く列んでゐる。

スフィンクスと申すものはエヂプトの到る處に在ります。又エヂプトのみならずアッシリヤ・バビロニヤ・ギリシヤ等でも後には作りました。此ギゼーに在りますスフィ

ンクスは、リビヤ砂漠の生え拔きの岩を刻んで作つたもので、高さが頭頂から足の爪先きまで約二十米即ち我が十一間許りあります。顏は大分破損して、其の原形を認むることが難い位になつて居ります。背の方は度々掘り出しても、やがてリビヤの砂漠の砂に埋まります。……寫眞や繪にはよく頭だけ出て居りますが、やはり體もついて居るのです。これは前申す通りエヂプト許りではなく、他の諸國にもあるのですけれども、やはり起源はエヂプトに在るので、それが段々他の諸國に傳はつた。……御承知の通りギゼーのスフィンクスは人面で獅身である。それでスフィンクスを人面獅身像と譯するのですが、それは當りませぬ。スフィンクスは何も人面には限りませぬ……カルナックのアモン殿堂の前に在るスフィンクスの例は其一例で、これは下に向つて曲つた角を有する牝羊の頭を有して居ります。これはエヂプトの宗教で此牝羊がアモンの神に神聖なものとなつて居るからである。……

キゼーのスフィンクスの出來た年代は、ハツキリ分りませぬが、エヂプト學者の研究によれば、多分十二王朝頃のものであらうかと申すことで、兎に角ピラミッドよりも、遙か後のものと認められて居ります。何の爲に作つたかといふことも的確には分りませぬが、蓋し王の權威を示す一の標章シムボルであらうと思はれる。獅子に獸類の王と稱せらるゝから、其獅身の體に王の顏をつけて其威力の大なることを示したのでありませう。又神の場合に於ても同樣で、例へばアモンの神の力の大なることを示す爲に獅身に羊頭をつけたものと思へます（村川堅固氏エヂプト旅行談）

（ハ）オベリスク　一本石の柱で、基は方形で、頂上に至るに從つて細くなり、各邊約六十度の角度で尖つて終る。シエネ（今のアスアン）附近の石山より切り出した淡紅色の石材でつくり、底邊の幅は高さの十分の一なるを原則とする。神殿の前に相對立して存するのが常であるが、時には單獨なることもある。太陽崇拜の意を寓するといふ。第十二王朝即ち紀元前一九五〇以前に遡るものはない。現にエヂプトに存せるものでは、ヘリオポリスにある第十二王朝のセンウォスリ一世のもの（二〇メートル）ルクゾルに在るラメス二世のもの（二三及二一メートル）カルナクにあるトトメス一世のもの（三二メートル）が大なるもので、ローマ、パリー、ロンドン、ニューヨーク等にも搬び去られてある。

（四）宗教及學術の發達　エヂプト人は（イ）多神教を奉じ、靈魂の不滅を信ずるので、屍體を（ロ）ミイラとして保存する風習であつた。その天體崇拜からは天文曆學、ミイラ製作からは醫藥學ピラミッド等の大建造物からは機械學、ナイル河洪水後の土地の處分からは測量術の發達が促がされ、數學科學方面に於て著るしき進歩を遂

げて、後人に敎ゆるところ尠くない。その他はやく(ハ)書寫の法を知り、繪畫・彫刻・染色等美術工藝上にも見るべきものが多かつた。

(イ)多神敎　エヂプト人の最も尊んだのは、日神で、その他の天體これにつぎ、牛・猫の如きに至るまで、悉く神として崇められた。かのオシリス神話は、エヂプト人の天地創造說を見るべきものである。

(ロ)ミイラ　エヂプト人は靈魂の不滅を信じた。その考へでは、人が死ぬと、精靈は一旦その肉體を離れるけれども、いづれの日にかは、歸つて來る。そのためには、肉體をその儘に保存して置く必要があるといふのである。これがミイラを製造することになつた最初の理由である。ミイラの傍には死者の書なるものを置いて、死後審判をうくるときの心得を示す。ウシャブチ等の副葬品もある。

(ハ)書寫の法　エヂプト人は、象形の表音文字を使用し、その宗敎上に用ゐらるるものは、ヒエログリフで全く畫で、最も古く、後にこれを略して、書き易くしたヒエラティク(僧用)が起り、更に後代には一層簡にしてデモティク(俗用)が出來た。ヒエログリフは、その形繪畫に類するので、諸處に現存する碑銘の類も、久しく文樣とばかり思はれたが、一七九八に、ナポレオンが、エヂプト遠征の際、部下の一將校ブーサルといふもの、ニール河口のロセッタに於て一個の石板を得、その面にエヂプト文字とギリシャ文字とで記るした銘文のあつたのに基づき、諸國の學者苦心研究の結果、一八二一に至り、フランスのシャンポーリオン始めてこれを讀む方法を發見した。(イギリスの科學者ヤングもその功の一半を分つべきである)。爾來ピラミッド・オベリスク等の碑銘をはじめ、古代エヂプト文化發達の跡を徵するの資料を利用することが出來て、エヂプト學なるものが起るに至つた。ロセッタ石は、玄武岩の板で、長三呎九吋、幅二呎四吋半、ヒエログリフ十四行、デモティク三十二行、ギリシャ文字三十四行の銘がある。プトレマイオス五世エピファネスが紀元前一九八に、その第一回卽位記念祝典の際に發した詔書で、そのギリシャ文字を用ゐたのは、當時の國際語だからである。今は大英博物館に藏せられてある。

書寫の料としてはパピルス紙を用ゐた。パピルスとは、ニール河中に繁茂せるカミカヤツリ草の髓をとつて、これを展べて製つたもので、今歐洲各國で「紙」と稱する語の語源となつた。筆は芦で製り、墨は礦物質又は植物質で、水とゴムで調

合した。

エヂプトの醫術は、バビルスエベルス（一八七二――三の間ルクゾールで發見せられ、アレクサンドリヤのクレメンスの書き入れあるもの百十葉もあつて、牧王時代のものとせられる）數學は、バビルスリンド（アイゼンロールの發見したもので大英博物館に藏する）でよく世に知らるゝに至つた。

エヂプト人は、今普通に用ゐらるゝ七値の順位を定めた。先づ土星・木星・火星・日・金星・水星・月と、各の軌道を一週するに要する時間の長さの順に配列して、これを一日二十四時の各時にあて、一日最初の時に配當した星を以て、その日に名づけろ。されば第一日の第一時は土星であるから、その日は土曜日、その日の最終即ち第二十四時間は火星で、翌日の第一時は日であるから日曜日といふが如くにして、第三日は月、第四日は火、第五日は水、第六日は木、第七日は金となるのである。而してその軌道一周に要する時間の長さの順位が今日の進歩した學問で研究したところと違はないとは驚くべき事實ではあるまいか。

△古代エヂプト人の生活

○衣　古代エヂプト人の衣服も時代によつて變遷がある。尤も古いところでは、男は腰部に帶を以て膝掛をまとひ、女は、肩より胸と腰部とを被へるシャツ樣のものをまとうた。後に至つては、男女ともに、二重の衣があつて、男は膝掛の外に短いシャツ樣のものをつけ、女はシャツの上に上衣をつけ、いづれも美はしい透きとほる樣な麻布製のものであつた。男は髮を短く刈り、僧は剃つたが、高位のものは假髮をつけ、女子は特に大きな假髮を用ゐた。髯は普通人にはなく、王公のみは存した。履物は植物纖維製または革製の鞋で紐をもつて結んだ。冠ものは普通には用ゐられなかつたが、香油を髮に塗ることは、男女ともに盛であつた。

○食　穫製のパンとたまねぎ、きうり等の植物類を主食物とし、牛乳・獸肉・鳥肉も用ゐられたが、豚のみは不潔とせられた。麥酒蜜酒・葡萄酒の類もあつた。指をもつて食べるのが常であつた。併し食事上の攝生はよく重んじられた。

○住　古代エヂプトの公共建築物は堅牢に出來たが、住居は王宮とともに永久的でなく、ニール河の泥を用ゐて壁と爲し、用材は木であつたため、現に存するものがない。併しいろ〳〵な材料から想像して見ると、上流社會の住宅は、繞ぐらすに林苑を以てし、應接室・食堂・居間の別があり、西むきの部屋は、冬季に、居間とも應接室ともすべく、北むきの部屋は、夏季のそれに適せしめる。その他、廚房・浴室・婦人室なども設けられた。下流社會のものは、樹枝などを骨として、泥をもつてかためた小屋にすぎなかつた。

第二節　バビロニヤ（カルデヤ）

(一)メソポタミヤ　ティグリス・エウフラテス兩河の間の地を、メソポタミヤと稱する。この地方も、エヂプトと同じく、上流アルメニヤ地方の融雪によつて、洪水を來し、氣候の炎熱なるが爲めに、農業に適し、人口早くから蕃殖し、文化亦從つて古くから發達した。南方の(イ)カルデヤから先づ開け初めたのである。

(イ)カルデヤ　この地方で、最古の開明國は、アッカドである。アッカドとは「山の民」といふ意味で、もと東乃至東北の山地から下りて來たもので、その言語・風貌・技藝・宗教に徵して、ツラン種に屬することが知られる。彼等は、北方の高地には、シッバル（ヘブライ人のセファルハイム）を首府として、アッカド王國南方の低地にはスメロ（ヘブライ人のシナル）王國を建てた。南方の最初の首府はウルキ（ヘブライ人のエレク）第二のはウル（ティグリス・エウフラテス兩河は今から四千年前には別々に海に注ぎ、ウルはアブラハム時代にも重要の港であつた）第三のはバビル（即ちバビロン）であつた。後に述ぶるハムラビ王は、バビルの出身で、遂に此兩王國を併合して、バビロンを都とするに至つたのである。

(二)ハムラビ王　紀元前二二〇〇頃に出でゝエラム・スメロ・アッカド等の諸國を併合し(イ)バビロンに都して、バビロニヤ王國を建てたのは(ロ)ハムラビ王であつた。王の制定した(ハ)法典は現存せる、世界最古の法典で、これによると當時の社會が、早く既に、複雜なる組織を爲すほどに進歩してゐたことが知られる。

(イ)バビロン　は、バベルのギリシヤ訛で「バール神の門」の義である。ネブカドネザル王の時、大に修築せられたることは、後に述べる。その遺址は、今バグダードの南方に存する。

(ロ)ハムラビ王　王は創世紀に所謂アムラフェルに相當する。紀元前二三七〇頃の王で、その在位三十年の間に、東方から侵入して來たエラム人（スーサを中心として國を建てゝ居た）を攘ひ、諸國を併せ、一大王國を建て、マルドック即ちバール教の崇拜を勵まし、運河をつくつて灌漑を便にし、大に文運を興した。

(ハ)ハムラビ法典　は制定當時、石に刻んで、處々に建てたもので、一九〇二佛國

のド・モルガン一行の探檢隊、スサの舊都址を發掘するに際して、その法碑の一を得て以來、歐洲の考古學者、法學者の研究するところとなつた。

石柱法の內容

此石柱法の內容は、主として私法刑法及び官吏法に關するものであつて、直接に訴訟法裁判所法等に關するものは極めて少いのは他の原始的法律と異なつて居る。原始的法律は、概れ賠償刑罰訴訟等に關するものが多く、私法に關するものは、慣習法となつて居るものであるが、此成文法の內容中、私法の規定の多いのは、古代法中の異例であつて、研究に値すべきものである。

其他此法律は、他の原始法に見ること無き種々の變態を有して居つて、學者が說明に苦しむ點も少く無い。例へば、婦人の法律上の地位は、非常に高く、他の原始法に於ては、婦人には獨立の身位無きのみならず通常物として男子の所有に屬するものであるが、此法律では母を「家の神」と稱し、酒類の販賣は婦人の專權とする等を始めとし、婦人の權利に關するものが多いこと、又商工農業運河造船醫師獸醫契約代理等に關する規定の多いこと等である。

是等の規定に依つて見ると、ハムラビ王時代のバビロンは、非常に高度の文明を有して居つたらしいが、又た一方より見れば、其前文後文等には、此法律の淵源を神意に歸し、其制裁を神罰と爲し、又た其刑罰規定に反坐法禱審法等の有るのを見れば、文化低級の人民中に行はれる法律の特質をも有して居ることが知られる。

又た此法律の規定は、概れ皆な因果法の規定と爲つて居りて、命令法の體裁を爲して居るものは殆んど無い。例へば「何々を爲すべし」又は「何々を爲すべからず」と云ふ如き規定ではなくて「何々を爲し又は爲さゞれば何々の結果あるべし」と云ふが如きもの……概して原始法は、因果法の體裁を爲して居るものである。（穗積陳重氏法窓夜話）

(三)楔形文字

バビロニヤ人によつて發明使用せられた文字を楔形文字と云ふ。楔形を爲せる記號を、種々に結合して、音を表はしたものである。書寫の材料は泥板で、先づこれに文字を彫りつけ、然る後に燒いたものである。

此文字も久しくこれを讀むことが出來なかつたが、一八三五イギリスのローリンソンが、彼のベヒストウンの石碑を研究するに及び、さきにシヤンポリオンの爲したる如く、ペルシヤ文中の固有名詞を鍵としてこれを讀む方法を發見した。從つて、それ以來この地方文化發展の跡は、著るしく闡明せられるに至つた。

(四)宗教及文明

この地方の民族は(イ)天體を崇拜するが上に、天氣概ね淸朗で、その觀察に便なるが爲め(ロ)天文の事に精通し、兼ねて數學の發達も著るしかつた。

(イ)宗教　は、所謂バール教で、バールは、またベルとも云ひ、「主」の義であり、主マルドゥクを主神とする。日神で、星宿の君主、また軍神としても崇められる。神官をマヂといふ。

(ロ)天文數學　精しく天體の觀察をする爲め、天體の運動に關する知識、極めて精確で、一年を十二月に分ち、一月を二十九又は三十日と爲し、六年毎に閏月を置き、一日を二十四時に、一時を六十分に、一分を六十秒に分つことなどを知つた。また圓を三百六十度に、一度を六十分に、一分を六十秒に分ち、度には°、分には′、秒には″の記號を用ゆることは、この民族に始まり、その他度量衡の制も整備した。

建築には煉瓦樣のものを用ゐ、エヂプトと同じく雄大なるを主としたこと、彫刻に於て見るべきもののあることなどは、後にアッシリヤの條に云ふ。

バビロンの東北のボルシッパにあるビルスニムロドの七層塔は、その原形に於て、黑・橙・紅・金・黃・青・銀の色彩を施され、第一層はニシップ(土星)、第二層はマルドゥク(木星)、第三層はネルゴル(火星)、第四層はサマス(太陽)、第五層はイスタル(金星)、第六層はネボ(水星)、第七層はシン(太陰)にあてられ、各層の面積は、軌道一週の期の長さに應じて、次第せゝれてあつたとの事で、如何に天體の觀測に精はしかつたかゞ判る。

第三節　ヘブライ・フェニキヤ

(一)シリヤ　世界最古の文化たるエヂプト・カルデヤ兩文化の接觸すべき地は地中海とアラビヤ沙漠との間なるシリヤである。前に述べた、ヒクソスも、ヒタも、皆曾てはこの地に據つた。而してこの地方に於て、最も著はれたものは、南に於けるヘブライと、北に於けるフェニキヤとである。

(二)ヘブライ　ヘブライ民族は(イ)國祖アブラハムに率ゐられて、カルデヤより移つて、カナーンの地に住み(ロ)曾孫ヤコブの時、エヂプトに仕へて、ナイル河三角洲の東、ゴーセンの地に居つたが、エヂプト人の虐遇に堪へずして(ハ)モーゼに導かれて、復びカナーンに歸住した。カナーンは即ち**パレスティナ**である。

(イ)アブラハム　は、エウフラテスとシリヤとの間に遊牧した部落の族長の一である。七十五歳の時、神慮に從つて、國を去り、一族を率ゐて、カナーンに移つたといはれる。

(ロ)ヤコブ　は、アブラハムの子、イサークの次子である。ヤコブの子をヂョゼフといふ。同胞の爲めに賣られて、エヂプトに赴き、擧げられて國宰と爲つた。後その同胞が飢へて、穀物を求めてエヂプトに入り、遂にヂョゼフの下に、一族は、ゴーセンに移り住むに至つた。紀元前約一五三〇乃至一三二〇の事であるといふ。

(ハ)モーゼ　ヘブライ人の蕃殖盛なるを見て、エヂプト王は、これを怖るゝのあまり、虐遇して、その絶滅を計らんとした。是に於て、モーゼは、紀元前一三二〇、一族を率ゐて、エヂプトを逃れ、紅海を渡つて、シナイの山に着し、こゝに神慮をうけて、十誡をその民に示し、約束の地カナーンを指して進むだ。

以上の説話は舊約聖書を讀んで、その詳細を知るがよい。

(三)ユダヤ教　古代諸國民は、概ね多神教徒なるに、その間に介在して、ヘブライ人のみは獨り(イ)一神教を奉じた。これをユダヤ教と稱する。モーゼ以來(ロ)師士といふものがあつて、神意を奉じて政を行ひ、神教政體を爲したが(ハ)サウルの王と爲つてからは、政教の別を生じ(ニ)ダヴィデの時國力盛で(ホ)ソロモンの時、その榮華を極

めた。

(イ)一神　は、イェホヴァで、これを唯一の眞神と信ずる。イェホヴァは、正しくはイャーヴェーといふべきで、「主」の義である。

(ロ)師士　は、ショーフェティム卽ち英語に所謂チャッヂなるものである。モーゼ以來、歷代の族長は、この職に居つて、神意を伺つて、政を執つた。

(ハ)サウル　は、紀元前十一世紀の中葉に、擧げられて、王と爲つた。是より先、地中海沿岸のフィリスティン族屢々ヘブライを襲ひ、師士サムソンの奮鬪、サムエルの苦戰も功を奏すること能はず、國民は有力なる王を戴いて、この强敵に對するの必要を感じて、サウルを擧げて、專ら政治にあたらしむるに至つたのである。

(ニ)ダヴィデ　は、サウルに仕へた勇士で、フィリスティンの巨人ゴリヤテとの鬪以來、その勇猛を以て知られた。サウルについで王に擧げられ、四方を征服し、都をイェルサレム(平和の市の義である)に奠めて、國力最も振つた。紀元前十一世紀中葉以後の在位である。

(ホ)ソロモン　は、ダヴィデの子である。賢明で、フェニキヤその他の諸國と交を締し、イェホヴァ殿堂、其他王宮の造營に於て、榮華を極めた。しかし死後內訌起り、南部はユダ、北部はイスラエルと稱して、國二分し、國力の衰へたのに乘じて、近傍諸國の爲め、代はる代はる併呑せられた。所謂豫言者なるものは、この國步艱難の時にあらはれて、或は國人を警め、或は國人を勵ましたのである。

(四)フェニキヤ　パレスティナの北、リバノン山脈の西、地中海に沿へる一帶の狹小なる地方がある。これをフェニキヤといふ。(い)土地瘠せて農作に適せず、(ろ)海に近くして山には船材多く、(は)國人怜悧で冒險心に富み、加ふるに(に)古代開明諸國の間に國せるを以て、早く(イ)商業航海を以て著はれ、沿岸には數多の都市起り、各一小國家を爲し、未だ曾て統一せられたことがないから、國力大に興るには至らないが(ロ)シドン先づ覇を唱へ(ハ)ティル次いでこれに代はつて、古代文化に貢獻するところ尠からず。

(イ)フェニキヤ　は、西にアッシリヤを控へたるため、これ等開明諸國の商賈は、こゝに來集した。南方からは、アラビヤの香料・インドの寶石・胡椒・象牙、

エティオピヤの黑檀・駝鳥の羽毛、エヂプトの棉布等東方からは、シリヤの毛織物、バビロンの織物・穀物の類、北方からはアルメニヤの馬、カウカスの銅器、黑海沿岸の奴隷等がフェニキヤの市場にあらはれた。これ等は陸路貿易に關するものであるが、海路に至つては、フェニキヤ人の獨占するところであつて、その航海術に長じて居たことは、早く北斗星を標準として、航路を定むることを知り、ギリシヤ人もこれに學んで、北斗星をフェニキヤ星と呼んだことでも知られる。而して、彼等は、航海術に長じたのみでなく、これを利用して、遠く異域に、珍らしき産物を求めて、これを諸國に賣りひろめた。しかし競爭者のあらはるゝことを恐れて、深くその行先を祕したことは有名な話である。

エホバの言また我に臨みて言ふ人の子よ汝ツロ（テイル）のために哀の詞を宣へ、ツロに言べし、汝海の國に居りて諸の國人の商人となり多衆の島々に通ふ者よ主エホバかく言たまふ、ツロよ汝言ふ我の美は極れりと汝の國は海の中にあり汝を建る者汝の美を盡せり、人セニルの樅をもて船板を作りレバノンより香柏を取て汝のために檣を作り、バシヤン（ヨルダン河東方の沃地）の樫をもて汝の槳を作り、キツテム（キプロス）の島より至れる黃楊に象牙を嵌て汝の坐板を作れり、汝の帆はエヂプトより至れる文布にして旗に用ふべし汝の天遮はエリシヤ（多島海中の一島）の島より至れる藍と紫の布なり、汝の水手はシドンとアルワデ（今のルアド島シドン附近）の人なり、ツロよ汝の中にある賢き者汝の舵師となる、ゲバル（今ヂエベイル）の老人等およびその賢き者汝の中にありて汝の漏を繕ひ海の諸の船およびその舟子汝の中にありて汝の貨物を交易す、ペルシヤ人ルテ（リディヤ）人フテ（リビヤ）人汝の軍にありて汝の戰士となる彼等汝の中に干と兜を懸け汝に光輝を與ふ、アルワデの人々およびその軍勢汝の四周の石垣の上にあり勇士等汝の四周の石垣にその楯をかけ汝の美を盡せり、その諸の貨物に富るがためにタルシシ（イスパニヤのタルテソス今のセビーヤ）汝と商をなし銀鐵錫および船をもて汝と交易を爲せり、ヤワン（イオニヤ人）トバルおよびメセク（ともに今のヂオルヂヤ人）は汝の商賈にして人の身と銅の器をもて汝と貿易を行ふ、トガルマ（アルメニヤ）の族馬と騎馬および騾をもて汝と交易し、デダン（アラビヤ）の人々汝と商をなせり、衆の島々汝の手にありて交易し象牙と黑檀をもて汝と貿易せり、汝の製造品の多きがためにスリヤ汝と商をなし赤玉紫貨繡貨細布珊瑚および瑪瑙をもて汝と交易す、ユダとイスラエルの地汝と商をなしミンニデ（ヨルダン河東方の地）の麥と菓子と蜜と油と乳香をもて汝と交易す、汝の製造物の多きがため諸の貨物の多きがためダマスコ、ヘルボン（ダマスコ附近今ハルブン）の酒と曝毛をもて汝と交易せり、ウザル（イエーメン）のベダン（今ヱッダン、メッカとメディナの間）とヤワン熟鐵をもて汝と交易す肉桂と菖蒲汝の市にあり、デダン車の毛氈を汝に商へり、アラビヤとケダル（ア

交易すラピヤ、デゼルタ)の君等とは汝の手に在て商をなし、羔羊と牡羊と牡山羊をもて汝とシバ(南方アラビヤ)とラアマ(南西アラビヤ)の商人汝と商をなし諸の貴き香料と諸の寶石と金をもて汝と交易せり、ハラン(エウフラテス河の一支流に沿へる今のハルラン)とカンネとエデンとシバの商賈とアスリヤとキルマデ(メディヤの一都市)汝と商をなし華美なる物と紫色なる繡の衣服と香柏の箱の綾を盛て紐にて結たる者とをもて汝の市にあり、タルシシの船汝のために往來して商賣をなす汝は海の中にありて豐滿にして榮あり(舊約聖書エゼキエル書)

(ロ)シドン　は、今のベイルート港の南方に位し、紀元前十五世紀頃に有力なる商業市としてきこえ、エーゲ海黑海沿岸及島嶼に出入して、銅(キプロス島鐵(黑海岸)金(タソス島)木材・魚類・奴隷の利を占め、キプロス・クレタ・ギリシヤ沿岸に植民した。硝子製造を以ても名がある。

(ハ)ティル　は、シドンの南方に在つて、今のアッカの北に位する。紀元前十世紀頃に至り、シドンに代つて覇を稱した。ティルは、主として西方に發展し、シチリヤ島(穀物)北アフリカよりイベリヤ半島(銀と羊毛)更に進んでは、大西洋にも出で、北はイギリス諸島(錫)南はアフリカのカボヴェルデ諸島及黃金海岸にも達した(カルタゴの提督ハンノが紀元前五〇〇に行つた)と云ふ。イスパニヤのカディズ(ガテス即ち要塞といふ義)アフリカのカルタダ(カルタゴ即ち新市といふ義)は、その植民地として有名なるものである。紫色染料を以て最もきこえた。

(五)アルファベット　フェニキヤ人は、古代東方諸國の間に往來したので、自らその文化の良果を採用したのみならず、各國民の間に、これを傳播するの任を盡した。而して後世西洋人の最も利便を感ずるのは、彼等が簡單なる(イ)音符文字を發明して、所謂アルファベットの基を開いたことである。

(イ)フェニキヤ人の音符文字　は、その商賣上の習慣と實務上の必要から、時間を節約せんとて、エヂプト或はアッシリヤの文字を簡單なる形に爲したものゝやうで、決して彼等の獨創に出たのではないけれども後世ギリシヤ人を經て、歐洲人の傳ふるところは、フェニキヤ人の省略した形にもとづいたことは、アルファベットといふ名稱でも知れる。フェニキヤ文字の第一字は、アレフ即ち牛で、ギリシヤではアルファ、第二字はベート即ち家でギリシヤではベータ、第三字はギメル即ち駱駝でギリシヤではガンマ、第四字はダレト即ち戸でギリシヤでは、デルタといふが

如き關係を有する。フェニキヤでは文字を右に起つて左に終はる横書きをしたので、ヘブライでもこれを眞似たが、ギリシヤに至つては、左に起りて右に終る風に改めた。前者はアラビヤ・ペルシヤの文字のかき方に殘り、後者は今の西歐諸國の文字の書き方となつて居る。

第四節　アッシリヤ

(一)アッシリヤ　ティグリス河上流地方に在つて、もとバビロニヤの一植民地であつた(イ)アッシリヤは、次第にその勢力を伸張して、バビロニヤから獨立し、終には一時(ロ)古代東方諸國を盡くその版圖に收むることを得た。諸王中(ハ)ティグラトピレサル一世(ニ)サルゴン二世(ホ)アスルバニバル最も著はれた。

(イ)アッシリヤは、もとアッスルに起る。その古史は、ニヌスとセミラミスとの傳說を以て語られる。ニヌスは、ニネヴェの創建者、セミラミスは、バビロンの創建者である。

(ロ)古代東方諸國統一　紀元前八世紀には、バビロニヤとフェニキヤとを、紀元前七三二には、イスラエルを、紀元前六七〇には、エヂプトを征服した。

(ハ)ティグラトピレサル一世　は、紀元前一一二五に卽位したアッシリヤの王で、頻りに近傍諸國を征して、遂に北は黑海から南はエウフラテスの下流に及び、東はイラン高原から、西は地中海に到る一大帝國を建設した。王は勇敢を以て聽ゆ

るとゝもに、殘忍を以てもよく知られた。

(ニ)サルゴン二世　は、紀元前七二一乃至七〇五の在位で、前代諸王の如く征戰を續けたが、單に武將たるに止まらずして、政治家の器量をも備へたから、妄りに師を興さず、自ら統治し得る限度を知り、征服した地方に、或は國人を遣はして知事たらしめ、或は土人を封じて朝貢せしめ、以て整理を圖つた。

(ホ)アスルバニバル　は、紀元前六六八乃至六二六に君臨したアッシリヤ最後の王である。歷代諸王征戰の結果この王の時に至つては、アッシリヤの版圖、西はニール河の上流から、東はイラン高原の境邊に達し、北はアルメニヤの高原から、南は、ペルシヤ灣頭に及んだ。しかし、王の時國力漸く盡き、エヂプト(紀元前六四五)メディヤ(紀元前六二六)相ついで獨立し、北方からは、スキタ族侵入し、南方ではバビロニヤ亦叛かむとするに至つた。王はこの間に在つて國都ニヌアに大圖書館を建て、學藝を勵まして、商業貿易を奬めた。

ニヌア　は、ティグリス河上流に在り、紀元前七世紀の初め頃、王センナケリブの修築するところ、堅固なる城壁を以て繞らし、古代の偉觀の一として數へられた。十九世紀中葉に至るまで、ニヌアは、バビロンとともにその遺址を知るものさへなかつたが、一八四二フランスのモッスル領事ボッタが、赴任するとともに、ホルサバド丘陵に埋もれたるドウールサリユーキン即ちサルゴンの都を發掘し、一八四六レーヤールがコユンヂク丘陵に埋もれたるアスルバニバルの宮殿を發掘するに及びて、前者はルーヴル博物館に、後者は大英博物館に、その發掘品を陳列して、學者の研究に便するに至つた。而してその宮城の結構の雄大なるはいふまでもなく、その彫刻物には、ルーヴル博物館所藏の王頭有翼牛身の像、大英博物館所藏の傷つける女獅子像の如き、傑出せるものがある。

(二)新バビロニヤ

アッシリヤの國威漸く傾けるに乘じ、起つてこれに代はつたものが、新バビロニヤである。王(イ)ナボポラサル　は、もとアッシリヤのバビロン知事であつたが、メディヤのキャクサレスと相呼應して叛き(紀元前六二六)遂に相與にニヌアを攻めてこれを陷れ、(紀元前六〇六)國の南半を收めて新バビロニヤ王と爲つた(メディヤは國の東半を取つた)。

(ロ)ネブカドネサル　は、ナボポラサルの子で、紀元前六〇四—五六二の在位で

ある。エヂプトの東侵を擊退し、イェルサレムを陷れ(紀元前五八六)その民をバビロンに幽囚し、ティルを服し(紀元前五七三)國都バビロン城を修築した。

バビロン城　は、エウフラテス河に跨つて建てられ、二重の壁を以て圍まる。大なるは城の全部を繞ぐりて方形を爲し、各邊の長一五キロメートルである。城壁の外に、廣くして深い壕があつて、外敵の近よるを、防ぐ。壕を作るために掘り上げた土を以て、煉瓦をつくり、瀝青を以てこれをかためて城壘とした。城壘の高は九五メートル、幅は二五メートルあつて、その上に馬車を驅るを得、壘上には相對立した二五〇の塔があつて、壘壁は百箇の門を以て穿たれ、その扉は、重い眞鍮製である。古代世界七不思議の一と稱せらるゝに値する。

第五節　ペルシヤ

(一)ペルシヤ　アッシリヤについで、古代東方諸國を統一したものは、ペルシヤである。もとメディヤの屬領であつたが人民勇武で、戰を善くするので、紀元前第六世紀の中頃終にメディヤを滅ぼして、國を建てた。王(イ)キロス(ロ)カンビセス(ハ)ダリオスは最も著はる。これをアケメネス朝と云ふ。

(イ)キヤクサレス　は、もとメディヤの一知事として、ペルシヤを領したが、メディヤの衰運に乘じ、紀元前五五八起ちてこれに代はり、ペルシヤ國を建て、西には紀元前五四五頃小アジヤの、イリディヤ國を亡ぼし、次いでその沿岸のギリシヤ植民地を併せ、南には紀元前五三九新バビロニヤ國を滅ぼしてユダヤ人を放ち、東にはイラン高原諸國を服し、又フェニキヤをも屬せしめ、エヂプト以外の古代東方諸國を悉くその版圖に入れた。更に北方のスキタ族を伐たんとして紀元前五二九陣中に死んだ。

イリディヤ　は、小アジヤ西岸に國を建て、王ギゲスの時(紀元前六七〇頃)アッシリヤ

に屬し、アリヤテスの時、メディヤ王キャクサレスと、所謂日蝕戰爭（紀元前五八五）を爲し、ハリス河を以て兩國の境と爲し、國都サルデスは富を以て鳴つた。王クロイソスの時（紀元五五五）沿岸のギリシヤ諸市を收めたが、紀元前五四五ペルシヤ王キロスの爲めに亡ぼされた。この國は、商業を以て國を立てたから、早く貨幣の用を知り「クロイソスの富」は、後世に至るまで語り傳へられた。

最初の貨幣は、リディヤにメルムナデス王朝を第七世紀にたてたギゲス王の時に出來たもので、重さ十四グラム半長みのある菱形で、獅子頭と牛頭とを印した金銀貨であつた。クロイソス（ギゲスから三代アリヤテス王の子）の時純金十グラム八九のものと、同じ重さの純銀のものとが出來た。

2 スキタ族　は、黑海の北岸から東北岸にかけて、住んでゐた蠻族で、遊牧の生活を營み、車上に居り、騎戰に長ずるので名があり、常に南下して、ペルシヤ・ギリシヤに寇するので知られてゐた。

（ロ）カンビセス　は、キロスの子、父に嗣ぎて立ち、その志をついで、エヂプトを征した（紀元前五二五）。然るに、王の不在に乘じ、ガウマタと稱するもの叛を謀り、王は歸國の途に死し、死後國大に亂れた。

カンビセス出征に際し、弟スメルデスを殺ろして、後顧の虞を絶つた。ガウマタこれを探知し、自らスメルデスと稱して、衆を集めて勢あり、遂に位に卽いたのである。

これをガウマタの亂又は僞スメルデスの亂と稱する。

2（ハ）ダリオス　は、王族に出で、カンビセス死後の亂を鎭めて、紀元前五二一位に卽いた。王英邁にして器略あり、內治外征ともに傳ふべきものがある。內治に於ては、國內を二十餘の行政區に分ち、これに長官（ショイトラバイチ）を置き、一定の租稅を徵收し、貨幣の制を定め、サルデスからスーサに至る軍用道路を敷き、驛傳を設け、要所には城塞を築いて將軍を置き、又臨時に按察使を派して行政を監督せしめた。都をスーサに奠めて、王宮を莊麗にし、舊都ペルセポリス・メディヤの故都エクバタナの離宮をも修めた。外征に於ては、インドス河流域の地を收めて、ペルシヤ灣と海上の交通を開き、紀元前五一四、ボスポロス海峽に渡つて、ドナウ河下流の地に侵入し、別に將を遣はして、トラキヤ・マケドニヤを征服し、エーゲ海に於けるギリシヤ所屬の諸島嶼をも屬せしめた。實に古代未だ曾てあらざる大帝國である。是に於て、ギリシヤとの衝突起る。王の事蹟は、ベヒストゥンの摩崖の碑を以て、傳へられてゐる。

王の時小アジヤのギリシヤ人スキラクスを遣はして、インド河畔に至らしめそれ

より船に搭じて海に出で、西に向つて沿岸を航するもの三十箇月にして、紅海に臨めるエヂプトの一港に歸着したことがある。その紀行は、今傳はらないが、後の書に引用せられて、インドと西洋と交通の最古の記錄とせらる。

抑もビストゥム巖上の大碑文は、斯る古代の作業としては、奇蹟とも思はるゝ程の一大事業であつて、當時の文化の一端を察するに餘りあるものである。その碑文が彫刻された岩山は、ペルシヤの西部カールマンシヤー平原の一方を圍む丘陵の末端に位し、殆ど三千七八百呎の高さに聳ゆる凹凸極まりなき山である。其の麓には、清く澄み渡つた泉が湧き出でて、有史以前より幾多の旅人の渴を癒した好地がある。而して此清泉とビストゥム岩山との間には、バビロンよりエクバタナ（今のハマダーン）に通ずる道路があつて、路傍には旅隊宿（キヤラヴアンサール）が設けられてあるのである。而して過去數千年來、吾人にアカメニアン朝の歷史を語つて居る大碑文は、此岩山の一面、地上より五百呎の高さにある、斷崖絕壁に彫刻されてあるのである。

此巖上の彫刻は、碑文と彫像の二種より成立つて居る。彫像は、ダリアス王が二人の侍者を從へ、彼の左足の下に踏み倒されたる一人の捕虜と、兩手は背後に縛せられ頸は繩を以て珠數繋ぎにされて牽き出されて居る九人の他の反逆者とが、彼の目前に並んで居る有樣である。又王は右手を擧げて反逆者の並んで居る上部に彫刻されたるゾロアスタール教の神アウラマズダを招願し、捕虜一人々々の名を呼び彼等嘘言せる由を上告して居るのである。碑文はその彫像の直下に古代ペルシヤ語の楔形文字を以て五欄、その碑文に引續いて左側にネオエラミティックの楔形文字の碑文三欄が、彫刻されてある。その外バビロニアン楔形文字の碑文が後者の直上に位する少しく不規則な岩の二面を蓋ふて居るのである。此等三語の碑文には、ダリアス王の偉業が殆ど同樣に記されてあるのである。彫像の右側には四欄に亘る平面があるが或は何かの碑文が銘刻されてあつたのかも知れないが既に磨滅して殆どその跡を遺して居らないのである。（荒木茂氏ペルシヤ文學史考）

（二）ザラトゥストラ教

ペルシヤ人は（イ）ザラトゥストラ教を奉じた。唐代に支那に傳はつて、祆教と稱せられたものである。

（イ）ザラトゥストラは紀元前約一〇〇〇頃の人と傳へられ、アヴェスタ經（ゼンド語にて書かる）は、その教義を宣べたもの。紀元前五二五頃ダリオス王の時、ペルシヤの國教と定められた。善神アフラマズダと惡神アングラマイニユスとを對立せしめ、惡人は惡神の爲めに禍せられたるものと爲し、その罪を惡めども、その人をば憐み、善神の加護によらしめむことを圖る。暗處と黑色とは惡神の據る處、明處と白色とは善神の居る處と爲し、日月星辰を崇び、火を拜する。故に拜

火教の名がある。ペルシヤ人が寛容で永く大國を保つことを得たのは、この宗教の力與りて大なるものがある。

アフラマズダと並べ尊ばるゝ神にミトラといふがある。光の神で、日神と崇められる。ミトラの崇拜は、數世紀間盛行し、有名なるポントゥス王が、ミトラダテス即ちミトラ神の加護と稱してから、東方君主のその名を稱するもの多く、後にはローマの東方遠征將士の間にその風浸潤して、歐洲各地にもミトラ崇拜の行はるゝに至り、ローマ諸帝は常にこれが禁壓につとめた程であつた。

アヴェスタ經は、牛皮紙に書かれて二十一卷あり、もとボンベイのパルシー族の間に秘藏せられてゐたのを、アンケティユ＝デゥペロンといふ篤學者が、深くパルシー族のうちに入りこんで、ゼンド語を學び、一七六二にフランスに還つて、はじめて世に紹介せらるゝに至つたのである。邦譯としては、世界聖典全集のうちに收められたのがある。

古代東方諸國のうちでは、ニール河畔エヂプトの文明、エウフラテス・ティグリス兩河間メソポタミヤの文明の發達が最も著るしいものである。その美術學問は、或は戰爭により、或は通商により、或は單に交通によつて、古代東方諸國間に廣まり、その共通の文明となつた。この文明は、次第に西遷した。フェニキヤ人は、海を渡つて、これを西方ヨーロッパに、ヒタ人は小アジヤ半島のリディヤ人に、而して、リディヤ人は、その沿岸のギリシヤ人にこれを傳へたのである。而して、ヘブライ人の信仰のみは、暫らくその發生地にとゞまつた。

第二章　ギリシヤ

第一節　ギリシヤ人の發展

(一)國土と住民　ギリシヤ半島は、山脈重疊して、國内平野少く、農牧ともに人民を養ふに足らないが、港灣には富み、近海特に東方のエーゲ海中には、島嶼碁布して、先進の東方諸國との交通を便にするものがあるから、沿海の住民は、早くより航海商業に從事してゐた。住民は、自らヘレネスと稱し、アールヤ種に屬し、太古に北方から遷徙したもので(イ)先住民族に代はつて、各處に割據定住した。住民中(ロ)ドーリヤ族(ハ)イオニヤ族最も著はれた。

(イ)先住民の文化　は今日發掘せられたクレタ島のクノッスス、ペロポネソス半島のティリンス・ミケーネの遺蹟によつて窺へば、大に進歩してゐたものゝやうである。

クノッスは、一八八七以來オクスフォルド大學のイーヴンス教授が發掘して、ギリシヤ最古の文化の蹟を世に紹介したのである。その宮殿最初の建築は、紀元前二〇〇〇頃とせられ、その壁畫・彫刻・土器などの遺物によつて、當時一種の文明が發達して居たことが明になり、ギリシヤ文明は、クレタ島のミノスまで遡ることになつた。

ティリンスは一八七六に、共にドイツのシュリーマンが發掘したところで、何れもホメロス時代(紀元前第十五——十二世紀)の遺蹟とせられ、ホメロス叙事の、全く架空のものではないことが、彼の小アジヤのトロヤの遺址を發掘して得たる智識と同じいことを示した。

アルゴス市からまたやがて一時間ばかりでティリンスの舊址は路の左方一丁ばかりのところに望まるゝがたゞ一寸小高き丘でホーマーの詩に難攻不落とあるそれとは思はれなかつた。が、番人に伴はれてその丘上に至り、登臨の快を試みれば、ナウポリヤの灣は深くアルゴス平原に入つてその眼下にあり、プールズィーの小島その中央に横はつて居る。右にはラリッサの古城寨あり左にはイッチカレのアクロポリスからパラシディの高塔と連續して、その下に千八百三十年の頃希獨獨立後暫く國都でまつた所謂ローマニヤのナポリと稱せられたナウポリヤを控へて居る。ホーマーがこの地を天下の要害といつたことが必ずしも誇張にあらざる所以を知ることが出來るのみならず、トロヤ征伐の軍がアルゴス平原を發して、このナウポリヤ灣を船出した盛觀を、もしこのアクロポリスの上から望んだのであつたならばなど、身は何時しか英雄傳中の人となつた感がした。丘の高さは平原から三十呎と六十呎くらゐ

の間に高低して居る、そして大きなしかも砍り取られた天然石で積み疊んだ城壁によつて取り圍まれ、その石塊は大なるは十呎、小なるも六呎で幅がまづ三呎ぐらゐもあるであらう、規則正しく積み重れたその隙間〳〵は小さい石で塞がれて居る專門家の計算によればこの城壁のもとの高さは殆んど六十五呎で平均二十六呎の厚さを有したであらう、そして全長九百八十五呎に及んで居つたといふことである。この城壁はサイクロプ城壁の最古の好標本で、ホーマー時代に於ける最も完全した城塞である。この點に於て小亞細亞に於けるトロヤと地勢その他類似の點が多いといはればならぬ。そしてその天然の巨石を用ゐた具合から、如何に太古に於ける人民が、この大工事に苦辛したかを想像することが出來るが、このティリンスは恐らくエヂプトの遺跡若しくはクリートに於ける有史前の遺蹟を除いたら世界史最古のものでミケーネよりも早く興つたものであることは爭はれぬ。

ミケーネはペロポンネサスの東北部ともいふべきところでアルゴス平原一帶の地はそのアクロポリスの下に展開し、遠く連なつて居る。……このミケーネの名の不朽なるは實にホーマー詩篇中に英雄の名を留めたアガメンノンの本城であつたためである。トロヤ遠征の軍はこのミケーネの英雄によつて統率されたのであつた。この地の形勢から見ても、上部アルゴスの平原一帶がその制御に服從した當時を想像することが出來る。鷲の巣のやうに高く懸れるこの間寂な小い境も一時は希臘の中心たりしこともあつたのである。のち波斯戰爭の折はテルモピレーで八十人のミケーネ人が戰沒した。プラチーヤの戰には二百人のミケーネ兵が參加して居る、しかし紀元前四百六十八年といふのにアルゴス人に滅ぼされてから市街も多く廢址となり紀元前二世紀ごろからこゝに住するものもないやうになつて仕舞つた。

當時の市街はアクロポリスばかりでなく下の方まで包含されて居るので、古代の城壁がズツトスザラ山の麓を走つて居る。アクロポリスの周圍に三角形を成せる城壁は多少廢滅に歸したところもあるが、所謂サイクロピヤン城壁で大きな四角の切り石を用ゐて之を積み上げてある。ナウポリヤ市の附近なるチリンスの遺址にも天然石を積み重れたものに比ぶれば幾分進歩したもので、これがホーマー時代のものである。傳によればミケーネをはじめて興した王はペルセウスといふ人で、リシヤからシクロペスなるものの助を得てこの城壁が出來たといふことから、この類のものをサイクロピヤン城壁と稱する術語が出來たのである。

正門は即ち有名な獅子門で冠の上に相對せる獅子の浮彫りがある。希臘美術の出發點ともいふべき重要なものである。無論この門も城壁と同時代のもので、アガメンノンなどこの門を出入したのである。粗朴武骨ではあるが、崇嚴で生氣の滿てるところ既に希臘の國民性が現はれて居る感がする。まづ門の高さは一丈餘もあるであらうか見上げたところ如何にも心地がよい。余はこの前に立つて三千年前の人となつたやうに思ふた。（黑板勝美氏南歐探古記）

（ロ）ドーリヤ族は、紀元前一一〇四頃南下してペロポネソス半島の南部に據

り、スパルタを中心とした。その海外に發展したもの、東方には黑海の入口ビザンティウム(紀元前六五九建設今のコンスタンティノープル)西方にはシチリヤ島東岸のシラクサ(紀元前七三四建設)南イタリヤのタレントゥム(紀元前七〇八建設今のタラント)南方にはアフリカ北岸のキレーネ(紀元前六三〇建設)最も著はる。

(ハ)イオニヤ族　は中部ギリシヤのアティカに據り、アテネを中心とした。その海外に發展したもの東方には小アジヤ西岸のミレトス(建設年次不詳メヤンデル河口に近い)西方にはイタリヤ西岸のクメ(紀元前一〇五〇建設今ナポリ附近)フランス南岸のマサリヤ(紀元前六〇〇建設今マルセーユ)北方にはクリミヤ半島のバンティカパイオン(建設年次不詳今アゾフ海の入口)南方にはニール河三角洲のナウクラティス(建設年次不詳)最も著はる。

(二)國民の團結　前述の如く、ギリシヤは、國內山脈連亘して數多の小地方に分たれ(イ)諸都市各獨立の國家を爲し、全體としての統一なく、但その言語信仰を同じくし、等しくヘレン神の子孫であると信ずる點より、同一國民なりとの觀念を强くし植民地と本國との母子關係も厚く、苟くもヘレネスの住するところは、皆ヘラスと觀じた。而して彼等を結合せしむるものは(ロ)神事同盟と(ハ)國民的祝祭とであつた。

(イ)ギリシヤ人　の市府國家は、小高き丘陵を中心として、起つた。これをアクロポリスと稱して、外難のある時に楯籠る場所で、城塞である。山腹に市人の居をつくり、次第に發展して、附近の地域を包有するに至るが、あまり廣範圍に亘ることを好まなかつた。從つて市府の住民は、團結すること强く、共同の祖先、共通の保護神を以て結合せられた。されば市民權は、各人のその出生して得るところで、一度他市に移つれば、之を喪ひ、他でこれを得ることは出來ない。かくてその都市を愛するの情は極めて厚く、決して、他の都市と併合するなどの考を有たない。自由獨立個人主義といふやうなものが、發達するのは、當然である。

(ロ)神事同盟　は、北部ギリシヤのコリント灣に沿へるデルフォイのアポロ神殿を中心とせる隣保同盟(アンフィクティオニヤ)が最も著はれた。アポロは、ギリシヤの神話で、日神、智慧、藝術の神として知られ、そのデルフォイの神殿は、古來神託を以

て有名であつた。傍近諸市人民尊崇の個處なるが爲め、この神殿を中心として早くから隣保同盟の結ばるゝものがあつた。最初は、十二市相集つたが、その後加はるものが次第に多く、春秋二期の會議を爲し、公事を議し、神殿の保護を爲し、その神寶を護るなどの事を爲した。

旅館を出でゝ大道を東すること、數十歩にして道は左折して、我等の前に忽ち山骨あらはに峨々たる崔嵬とオリヴの森を溪から押し流した樣な深い峽谷とが擴がつてゐる。そのデルフイの神域には唯だ雅典人の寶庫が修復されて巋然と立つてゐるのが目立つばかり。

大道から折れて山の斜面にある神域の跡に入る。今もなほ敗石が殘つてゐる古への參道を進んで登つて行く。兩側にはシキオン・クニドス・テーベスなど希臘各市の寶庫の基礎が狹い間に連續して、其の外奉納の像や記念柱の臺座もある。此のうち雅典人の寶庫丈けは佛蘭西人の手によつて近年復原されたのである。是は小さいドリヤ式の（前面壁間二柱式）建築で、マラトン戰爭の分捕品から造られたと傳へられてゐる。アポロの神殿は神域の中段に東面して立つてゐたのであるが、今はたゞ宏大なる石の床と破斷した石柱とが殘つてゐる。「汝自身を知れ」等の格言を刻してあつた玄關は何の邊であつたらうか。世界の中心を示したといふ半卵形の石「オムファーロス」の在つた所も神託の罅隙（チヤムス）も、非常に深く發掘を試みたが見ることが出來なかつたと云ふ。神殿の上方にも多くの奉獻品の臺座や劇場やクニドス人の倶樂部（レスヘ）室（內部に元とポリグノートスの壁畫あり、パウサニアス頗る精密に之を記す）などの遺跡があり、更に劇場の西北神域の外には、大きな競走場があつて、北側の石の座席はなほ儼として殘つてゐる。（濱田耕作氏希臘紀行）

（六）國民的祝祭

では、オリンピヤ祭が最も著はれた。オリンピヤの原は、ペロポネソス半島の西岸に在つて、ギリシヤ神話の天神ゼウスを祀れる神殿を中心として、四年に一回づゝの祭事を行ふ。時期は、六月の末から七月の初めに亘り、五日間で終はる。苟くもヘレネスと稱するものは、海の內外を問はず來り集つて諸般の競技に與ることが出來る。競走あり、角力あり、競車あり、或は詩歌を以て、或は音樂を以て、或は彫刻、或は繪畫を以て相競ふのである。然れば、この祭は、國民的祝祭たるとゝもに、諸藝の競爭、奬勵の具ともなつたのである。かくの如く、國民全般の最も注目するところであるから、この祭を基として、年紀をたつることが行はるゝに至つた。これをオリンピヤ紀元と云ふ。最初のオリンピヤ祭は、紀元前七七六に行はれたといふから、第一オリンピヤドは、紀元前七七六から、七七三までゞ、これを第一オリンピヤドの第一年・第二年といふ風に數へたの

である。

我等は去つてクロノスの緑深い小丘の近くをクラデオス川の横を渡つて、オリムピヤの遺跡に出る。荒草離々として生ひ茂り、草葵の花などの淋しく咲いてゐる間にヘレイオン祠さてはゼウスの社の跡などが斷礎遺柱相接してゐる哀れさ。ヘレイオンには、二三の柱が完全に立つてゐるが、かのヘルメスの像が發見せられた場處は何處と案内記を照して床上を探し廻はる。これが丁度パウサニアスが記してあつた所と一致するからして愈プラキシテレースの作に疑ひ無いとせられるのである。夫からゼウスの祠二ケの臺座など見て、各市の寶庫の跡を訪ねる。……この寶庫が新しく軒を接して並んでゐた當時は、聊か隅田川の艇庫の行列と同一般、少し酷かは知らぬがオリムピヤは、或點に於いて成田の不動、穴守の稻荷的の感があつたに違ひない。アルフェイオスの流、クロノスの丘は、以て此の地を聖化するに足らず雜然として色々の建築や彫刻の狹苦しい地區に立ち並んでゐた具合は、固よりパッセー山上の祠殿や、スニオン角頭の建築とは、其の趣を異にしてゐる。畢竟オリムピヤは當年の回向院である、淺草の觀音である。（濱田耕作氏希臘紀行）

第二節　スパルタとアテネ

(一)リコルゴスの立法　ドーリヤ族のスパルタに據るや、先住民の數は、遙かに彼等よりも多かつたので、自衞の必要上、極端なる國家主義を行つた。これをリコルゴスの立法と稱する。スパルタが、尙武國として、ギリシヤを代表するのは、此に基づく。その(イ)社會は階級制度(ロ)教育は尙武的(ハ)政治は貴族政體であつた。

(イ)社會　は三階級に分たれ、最上級スパルティヤテーは、ドーリヤ族で、エウロタス平原を占有し、政權と兵權とは、彼等の掌握するところである。第二級ペリエキーは、原住者アカイヤ族で、周圍の山地に住み、納稅兵役の義務以外は、自由を許るされ、商工業を營み、第三級ヘロトは、奴隷で國家に屬する。

(ロ)教育　は尙武的で、スパルタ人は、生れて虛弱なる者は、國家の命によりて、これをタイゲトゥス山に棄て、强健なるものは、七歲まで、父母に長育せしめ、その後は國家に於てこれを教育する。主として身體を鍛へ、飢渴に慣れ己れを犧牲として、國家に奉ずるの精神を養ふことにつとめた。かくて剛健尙武の國風を成し

た。

(ハ)政體　は貴族政體で、上に二人の王あり、昔は勢力あつたが、エフォルスの設けらるゝに及んで、實權大に殺がれ、戰時に兵を率ゐるのみとなつた。エフォルスは五人あり、年々選擧せられ國政を執る。その他にゲルーシヤ及びアゴラの二集會ありて、諮詢に應じた。ゲルーシヤは、元老の集會で、六十歳以上の者二十八人より成り、行政の監督法律の制定を掌り、アゴラは、一般スパルタ人の三十歳以上のものより成り、和戰の事を決し、庶政の方針を定む。兩集會ともに議論を用ゐず、唯可否を表するのみなることは、スパルタ式の特色である。

(二)ペロポネソス同盟　スパルタは、リコルゴスの立法によつて、國大に興り、紀元前第八世紀の末には、西隣のメセニヤを服したるを始めとして、次第に半島の覇權を握り、紀元前五五〇頃ペロポネソス同盟をつくり、アルゴスとアカイヤとを除いて、半島諸國悉くその麾下に集まつた。

(三)アテネの民政　アテネの初めには、王を戴いたが、次第にその權を削小し、紀元前六五〇頃には、遂にこれを廢し、貴族中より(イ)アルコンを選びて、政を執らしめた。而かも、貴族跋扈して、一般人民は、參政の權なかつたので(ロ)ドラコ(ハ)ソロン出でゝ、これが救濟を圖つたが、未だ完からず(ニ)クリステネスの時に至つて、民政の基礎確立した。

(イ)アルコン　アテネでは、王を廢して、これに神事のみを掌らしめ、その軍事と政事とを掌るために、アルコン(執政官)を設けた。アルコンは九人あつて、首席アルコンエポニムス(名祖執政官)次席アルコンバジレウス(國王)三席アルコンポレマルクス(元帥)は各一人で、内政・祭祀・軍事・外交を掌り、他の六人アルコンテスモテーテー(司法官)は裁判の事に當つた。任期、最初には終身、次いで十年、後には一年となつた。

(ロ)ドラコ　アテネでは、商業に從事せる人民の發達とゝもに、貴族政治を懌ばざること甚しく、遂に内亂をも釀すに至つた。司法執政官ドラコが、紀元前六二四、貴族中から選ばれて、法律を整理したのは、かやうな時の事であつた。爲めに、

平民中の富めるものは、參政の權を得るに至つた。

ドラコーの血法

ドラコーの法は實に驚くべき酷法であつて「血法」とは名づけ得て妙と云はざるを得ない。而して其最も慘酷極まる點は實に死刑の濫用にあるのである。叛逆殺人等の重罪を罰するに死刑を以てするさへ現今では兎角の論もあるのにドラコーの法では野に林檎の一二顆を盗み畑に野菜の二三株を抜いた者までも死刑に處する。否これなどは血法中ではまた寛大な箇條と云ふべきであつて怠惰なる者を罰するに死刑を以てするに至つては實に思ひ切つた酷法と謂はなければならぬ。尚ほ其上に刑罰を科せられるものは人類のみに止まらずして無生物にまでも及び石に打たれ木に壓されて死んだ者があつた時には其木石に刑を加へるのであつた。蓋し是れは民をして殺人の重罪たる事を知らしめる主意であつたのであらう。

ドラコーの法は實に酷烈斯くの如きものであつて一時滿天下を戰慄せしめたが苛酷が其度を過ぎて居た爲に却つて永くは行はれなかつたと云ふことである。

或人ドラコーに向つて「何故に犯罪は殆んど皆死を以て罰するのであるか」と尋ねた。ドラコーは答へて「輕罪が恰も死刑に相當するのである。重罪に對しては余は適當の刑罰なきに苦しむのである」と云つたとか。（穗積陳重氏法窓夜話）

(八)ソロン

かくて商人は、その權を伸ばすことを得たけれども、農業に從事せるものは、日々窮狀に陷つて、アテネの經濟狀態は、憂ふべきものがあつた。貴族出身のソロンと云ふ人あり、紀元前五九四に出で、この事情に鑑み、土地を擔保とせる負債をば、一切取消し、負債の爲めに、人を奴隸とすることを禁じ、一人所有の土地の最大限を規定し、貨幣を改鑄し、以て社會上・經濟上の一大改革を遂げたのである。次いで、政治上の改革にうつり、財産に應じて、人民を四級に別ち、その權利義務の差等を立て、エクレジヤと稱する集會には、第四級のものに至るまで參加して、官吏を公選するを得しめ、ヘリエヤと稱する法庭には、一般人民の判決に與るを許るした。

(九)クリステネス

ソロン改革の後も、不平の徒多く、紀元前五六〇、ピシストラトゥスは、彼等の助を以て起つた。彼はティランノス（專政者）たりしも、善政を布き、內治外交ともに振興し、後年アテネ文化の基は、此時に萠した。然るに、その子ヒピヤスの時、民心を失ひ、ピシストラトゥス家は、紀元前五一〇アテネを逐はれ、クリステネス民黨の援によつて、政權を得た。紀元前五〇九彼の選ばれてアルコンと爲るや、先づ黨爭の源を絶ち、門地によつて階級を立つることを止め、住地によつ

て、十個の族を別ち、各族より五十人づゝ、總計五百人より成る會を組織し、これをボウレと稱し、一般人民をしてこれに與らしめ、官吏たるものゝ制限をも撤した。猶ティランノスの出現を防がんとして、オストラキスモスと稱する方法をも設けた。オストラコンと稱する牡蠣に類する貝の殼に、國家の爲めに危險有害なりと思はるゝ人の名を書して、一定の場處に投じ、その一定數に達するや、彈劾せられたるものは、十年間アテネより放逐せらるゝ規定であつた。（必らずしも貝殼とのみは、限らなかつた陶片を用ゐたのもある）。

オストラキズムス

「オストラキズムス」は一種の彈劾投票である。毎年第一回の民會に於て先づ之を行ふの必要ありや否やの議決を求め若し積極に決したならば次回の民會に於て執政官及び五百人會議員立會の上各市民をして彈劾に當るべき人を投票せしめるのである。投票は牡蠣の一種の貝殼に記すのを例とした。其貝をオストラコン（Ostracon）と稱する所から「オストラキズムス」の名が生じたのである。扨て開票の結果六千票以上を得たものがあつたときには其者は十年間（後には五年となつた）國外に追放せられる。併しながらこれは刑罰ではなく一種の所謂保安條例に過ぎないのであるから名譽權・市民權・財產權には何等の影響もなく期限滿ちて歸國の上は再び以前の身分を回復することが出來る。又た滿期前であつても民會の決議によつて召還せられることもある。（穗積陳重氏法窓夜話）

第三節　ペルシヤ戰役

(一)東西最初の衝突　ペルシヤとギリシヤとの戰爭は、史上東西最初の衝突で、紀元前五〇〇より約六十年間に亘り、その初期三十年間は、ペルシヤ人攻勢を取り、後期三十年間は、ギリシヤ人攻勢を取つた。その原因は、東方の專制主義と、西方の民主々義と相容れざるに淵源すれども、直接には(イ)イオニヤの亂に發し(ロ)マラトン・ミス海戰の一敗は、支ふるに由なく更に(ホ)プラテーエーの敗衂によつて、全く攻勢を取る能はざるに至つた。

(イ)イオニヤの亂　イオニヤは、小アジヤの西岸の一地方で、イオニヤ族ギリシヤ人の植民地であつた。初めリディヤの勢力盛であつた時代には、自由を許るされてゐたのに、ペルシヤの治にうつるに及んで、專制の下に困んだ。植民地中最も盛大なりし都市ミレトスにアリスタゴラスといふものが長となるや、サルティス駐在のペルシヤの地方長官と隙を生じ、紀元前四九九兵を擧げて叛き、本國アテネ・エレトリヤ兩市は、兵を送つてこれを扶けた。亂は忽ちに平いだが、ペルシヤ王ダリオスは、ギリシヤ膺懲の必要を感じて師を起した。

(ロ)第一回の征討軍　は、紀元前四九三マルドニオス引率の下に、海陸兩道より進み、陸軍はヘレスポントを渡り、トラキヤの南部に入りて土人に襲はれ、海軍も亦陸兵と相呼應して進むだ。然るに、カルキティケ半島のアトス岬附近に於て、暴風の難に遭ひて引き還へした。是に於て、ダティス・アルタフェルネス兩將は、第二回の遠征軍十萬を率ゐ、紀元前四九〇直ちにエーゲ海を横ぎりて、エウボエア島のエレトリヤに渡り、遂に進んで對岸のアティカに上陸した。アテネは、急をスパルタに報じて、援を求めたが得ず、卽ち名將ミルティヤデスの下に、一萬の兵を以て、獨力でこれを防ぎ、マラトンの野に邀へ戰ひ大に捷つた。

今日マラトン(マラゾン)競走と稱するは、此戰の時、フィディッピデスなるもの、疾驅して急をスパルタに報じたるの故事(二日弱で二百四十キロメートルを走る)に因みて、一八九六オリンピック競技復興以來行はるゝものである。

(ハ)第三回の征討軍　ダリオス王報復の準備に怠らなかつたが、その完成を見

るに及ばずして死し、子クセルクセス立ち、父の志をつぎ、紀元前四八一親ら第三回の遠征軍を率ゐて、サルディスを發した。兵凡そ二百萬、征路は第一回の時と同じく、海陸並び進んで將さにギリシヤに迫らんとした。ギリシヤ震駭し、コリント會議を開き、スパルタの陸軍、アテネの海軍、協同して擧國一致、以て國難に當らんと決した。スパルタ王レオニダスは、自國兵三百、聯合軍七千を以て、ギリシヤ北方の要地、テルモピレの隘路の險を扼して、敵を防ぐこと三日に亘つた。然るにエフィヤルテスなるもの、欵をペルシヤ軍に通じて、間道を敎へたので、聯合軍は、腹背敵をうけ、レオニダス以下三百人のスパルタ兵は、一人殘らず此に死んだ。時に紀元前四八〇年七月であつた。

後テルモピレー(溫泉門)に、碑を建て、レオニダス等の英魂を弔つた。ギリシヤ最古の金石文である。曰く旅人よ、行きてラコニヤ人に言傳してよ、國命に順ひて我等は此處に仆れぬと(濱田靑陵氏の譯)。今は無い。

(ニ)アテネ　では、第二回の役以後アリスティデスの陸軍充實說と、テミストクレスの海軍擴張說とあつたが、前者排斥せられ後者採用せられて、以て準備するところあつた。今やテルモピレーの敗報至るに及び、テミストクレスは、アテネ市民をサラミス島に避難せしめ、自ら全艦隊を率ゐて、サラミス灣に潛んだ。ペルシヤの陸兵は、アテネを燒いて進み、海軍は艨艟海を蔽うてサラミス灣に入つた。テミストクレスよく戰ひ、ペルシヤ艦隊は瞬く間に全滅し、クセルクセスは倉皇として遁れ去つた。實に紀元前四八〇年九月末の事である。

(ホ)クセルクセス　師を班へすに臨み、マルドニオスを留めて後事を處せしめ、マルドニオスは、戰後なほ降をギリシヤ人に勸めたが、これに應ずるものなきのみならず、紀元前四七九年九月プラテーエーに於て、ペルシヤ軍を破つて國外に逐ひ、別に海軍は、その月の末、小アジヤのミカーレ岬附近に於て、大にペルシヤ軍を破つた。ペルシヤは、爾來ギリシヤを窺はなくなつた。

(二)アテネの全盛　ペルシヤ軍擊退の功は、全くアテネに歸すべきであるから、戰後アテネの國運大に隆昌なるに至つたのは、當然のことである。卽ち(イ)デロス同盟を結んで、內外に勢力を揮ひ、(ロ)エーゲ海の海上權を、ペルシヤから奪ふに至つた

のである。

(イ)デロス島　は、エーゲ海の南方にあり、そのアポロ殿堂を中心として、アテネのアリスティデス・キモンがデロス同盟をつくり、ギリシヤ沿岸諸市に覇を唱へたのは、紀元前四七七の事である。この同盟の目的は、ペルシヤその他の外國の侵入に備ふるにあつた。同盟加入の諸市は、その力に應じて、年々一定數の戰鬪準備完成せる軍艦若くはそれに相等せる金額を醵出し、同盟からの脱退は許るされず、醵資を怠る時は强制して徴發し、同盟の金庫はデロス島に在り、毎年此に會議を開き、アテネは、その決議實行の責に任ずる、規定であつた。

(ロ)キモン　は、この同盟の艦隊を率ゐて、紀元前四六五ユウリメトン川口(キプロス島對岸)にて、ペルシヤ艦隊を全滅させたが、その死後、部下のものが、キプロス島東岸のサラミスで、ペルシヤ陸海軍を破り、小アジヤ地方から、全くペルシヤの勢力を驅逐した。ペルシヤ戰役茲に終る。

第四節　ギリシヤの學藝

(一)ペリクレス時代　ペルシヤ戰役に國運を賭したアテネは、戰捷の後自信大に强くなり、國民の元氣大に振興し、ギリシヤ文化全盛の時代を現じた。これをペリクレス時代と云ふ。紀元前四四四より四二九年に至るまで、大政治家ペリクレスは執政の期間にあたるからである。ペリクレスは(イ)民主政治を完成し(ロ)アテネを修飾し(ハ)ピレウス港を築いて海軍を奬め(ニ)學藝を勵ましたのである。

(イ)國事　は、總べて一般公民の集會によつて決し、裁判も人民中より選出した判事の法庭で決し、一般公民は誰れでも、國家最高の官職に至るまでの職に就くことを許るされ、民主政治は此に完成せられた。

(ロ)ペリクレス　は、その保管せるデロス同盟の共有資金を用ゐて、アテネなるアクロポリス丘上に、パルテノン神殿の造營を爲すなど、アテネの美觀を增すことにつとめたのであつた。

雅典のアクロポリスか、アクロポリスの雅典か。雅典の市街の南に巍然として立

つてゐる城山は、羅馬のパラチノ丘の如き低い者では無い。全山大理石の塊で高さは海拔五百十二呎、遠くピレウスの海上からも際立つて聳えてゐるのが見える位である。プロピレアの玄關然たる建築は、目下足場があつて修繕中である。其の下に番人の小屋があつて入場料一ドラヒマ(約一法)を徴集せられる。

我輩は此の世界的に有名なるアクロポリスの歴史や、その建築の一々の緣起を此處に繰り返す程の老婆心はない。プロピレアの壯麗なドリヤ式イオニヤ式混合の門を這入つて、右側の出張りの臺には、ニケ・アプテロスの小祠がある。元と土耳古の砲臺がこの上にあつて建築は全く壞されてゐたのを、舊材料で元の通り建て上げられたイオニヤ式の建築である。その軒廻りの浮彫は雨露にさらされて、今は其の形像も模糊になつてゐる。

プロピレアから東に進むと大理石の露出した山上の道は靴も滑りさうになつてゐるが、此の兩側には古へ幾多の記念的の小建築物が並んでゐたので、今日の如くパルテノン西面の全景を認めることが出來なかつたに違いない。但しパルテノン正面の東向きであることは云ふ迄もない。此のペンテリコンの大理石の建築は、今は金色の錆がついて、其の中央部は無殘にも一六八七年の戰爭の爲めに破壞せられてしまつたが、其の柱の美しいエンタシス、破風の正しい形階段(スチロベード)の線などには一々視官の幻覺を訂正する工夫まで凝してあつたことは、ペンローズ氏の研究によつて愈明かになつた。パルテノンは實に希臘建築發達の最頂點を飾る完美の記念物として歴史上の一大遺物であることは言ふ迄もないが、一方から云ふと伊太利のベストム、シチヤリヤのザルザエンチ等の古いドリヤ式の壯重嚴肅な趣は已に失はれて聊か優美に流れつゝあると云はればならぬ。破風や軒廻りなどの彫刻物の大部分は、已に大英博物館に移されてエルギンマーブルの名を以て呼ばれてゐるのは、生みの子を母親から引き割いてしまつたやうな哀感を催さしめる。

パルテノンの北方に少しく離れてエレヒテイオンの建築が殘つてゐる。是は大體イオニヤ式であるが其のポーチにある女像の柱は今は一體丈け大英博物館に移されて模造で以て入れ易へてあるけれども、昔ながらの面影を傳へてゐる。此の建築の南に當つて昔はヘカトンペドンの建築がつた。東方にはミケーネ時代の古い宮殿の立つてゐたことは、考古學者の發掘によつて分つて來た。此の外プロピリエの南方などにも所謂ペラスギの石壁と云ふのがあるが、皆なミケーネ時代のものであつて、早く此の頃からアクロポリスが有力者の居城となつてゐた事が知られる。

(濱田耕作氏希臘紀行)

(八)ペリクレス　は、又同じ共有資金を用ゐて、アテネの防備を完くし、繁榮を圖らんと欲し、ピレウス港を修築し、この港と市とを長城で連絡せしめ、特に意を海事に注ぎ、海軍の擴充、通商貿易の盛大を企圖した。

(二)ペリクレス　は、アナクサゴラスと稱する哲學者に師事したため、その感化

によつて、好學の心篤く、學藝の奬勵につとめ、ギリシヤ學藝の黃金時代を生じた。

(二)學藝の黃金時代　アテネが、ギリシヤ人の右文の方面を代表して、學藝の黃金時代を現じたのは、國運を賭したる戰爭に勝ちての自信、ペリクレスの保護奬勵によることは前項に述べたる如くであるが、ギリシヤ固有の總原因が四つある。(い)風土の秀麗(ろ)外國の影響(は)競技の奬勵(に)生活の餘裕これである。風土秀麗なれば、國民自然に美感に富み、加ふるにペンテリコンの大理石の如き良材を產出したのは、彫刻の發達に効があり、古代東方諸國に發達成熟した文化は、ギリシヤ人の植民を通じて取り入れたことは、碩學巨匠に、植民地出身者の多いので知られ、競技は大なるものには、オリンピヤ祭の如き、全國的なのより、小なるは各地方の祝祭にも行はれて、その技倆を研くに便で、一般市民は、日常生活上、勞働を卑みて、一切の事は、擧げてこれを奴隸に任かし、悠々として、美術文藝の鑑賞に耽ける餘裕を有つたのである。かくて他に類例を見ざる發達を遂げたのである。

(三)神話と傳說　ギリシヤ人の思想と藝術の發達を知るためには、その神話と傳說に通ずることを要する。蓋しギリシヤ人は、その神話と傳說とは、彼等の古史を忠實に語るものと信じ、これに基いて考へ、行ひ、藝術の感興を享け、德操の泉を酌むだのであるから、その大體に通せずしては、彼等の歷史を解すること難きのみならず、彼等の豐富なる想像力は、後世西洋人の思想の淵源ともなつたのであるから、その(イ)神話と(ロ)英雄傳說とを概說しておく。

(イ)神話においては、オリンピヤの峯にあつまる諸神が主である。ゼウスは、神と人との祖で、天神である。雷霆はその信號で、虹と鷲とはその召使である。アポロは、光明の神、美術詩歌醫療の守護神である。アレスは軍神。ヘフェーストスは火神で、金工機械工の保護者。ヘルメスは使神で、發明商業の保護者。ポサイドンは海及水の神。ヘラは天妃、婦人を護り、婚姻を掌る。アテナは婦人の知と德とを守る。アルテミスは、月光の神で、森林と野獸の女神であるから狩獵の神。アフロディテは愛と美との女神。デメーテルは穀物及收穫の女神。ヘスティヤは火の女神で竈の神。以上十二神のうち、ヘラはゼウスの妃、ポサイドンはゼウス

の弟で、デメーテルとヘスティヤの他は何れもゼウスの子である。

以上主神の外に、ゼウスがデメーテルによつて生んだペルゼフォネ（植物發生の女神）ゼウスがセメレによつて生んだディオニソス（發芽の神で葡萄を護り後終に酒の神となる）ゼウスがムネモシネによつて生んだ女で九柱のムーザイ（クリオは歴史、オイテルペは叙情詩、ダーリヤは喜劇、メルポメネは悲劇、テルプシヒオーレは舞踏と歌、エラトは戀愛詩、ポリヒムニヤは頌歌、ウラニヤは天文、カリオペは叙事詩を保護するものとせらる）などがあつた。これ等の神々はその思想感情に於て、敢て人類と異ならず、唯人類よりは優れたる力倆と、不死の特點とを有するのみなることは、ギリシヤ神話の興味ある部分である。

（ロ）英雄傳說　のうちには、外國から來て、ギリシヤの諸市の基を置いたとせられるものがある。ダナオスは、エヂプトから來てアルゴスを建て、その子孫の一女がゼウスとの間にペルゼウスを擧げ、ペルゼウスはメドゥーサを殺して、かへりて後ミケーネを建てた。ケクロプスは、エヂプトから來て、アクロポリスの丘に居を定めたが、アテナ・ポサイドンの兩神が來て、此新市を爭ひ、人類に最も必要な贈物を爲したものゝ有とすることに定め、ポサイドンは馬を、アテナはオリーブを供給して、アテナの勝となつて、アテネ市が興つた。ペロプスは、リディヤからエリスに來て、その王に克ち、ペロポネソス半島の名を與へ、子アトレウスの時、ミケーネを取り、孫アガメンノンの時國榮え、その弟メネラオスは、妃ヘレナの父から讓られて、スパルタを領した。カドモスは、シドンから來て、ゼウスに偷まれたその妹を探がし歩るいて、遂にボイオティヤの原に至り、こゝにテーベの市を建て、ギリシヤ人に、はじめて文字を敎へた。その他テゼウスは、イオニヤ人の英雄で、アテネを統一して、クレタ王ミノスの勢を屈し、ヘラクレスはペルゼウス統に出で、テーベに生れ、ドーリヤ人の祖として仰がれて、十二の業を遂げ、トロヤ征伐に從つた。アルゴナウト遠征のヤーソン、トロヤ征伐のヘクトル・オディセウスなど、英雄の數は、限なくある。ギリシヤ人が、互に結合するのも、同一の祖先から出て居るとの信仰からであり、植民地を設けるときにも、本國の祖神を分祀するので、その連絡が堅くなる。而してギリシヤ人全體の祖としては、前に述べた如く、ヘレン神を仰ぎ、その三兒エオルス・ドールス・クストゥスが、それ〳〵に、エオリヤ人・ドーリヤ人・イオニヤ人の祖とせられてある。

（四）哲學　ギリシヤ哲學は（イ）ミレトス派に始まり、最初は天地萬物の本源如何を研究したが（ロ）ソフィスト派出づるに及びて、心理學的考究行はれ（ハ）大聖ソクラテスは、全く面目を改め（ニ）プラトン（ホ）アリストテレスを經て完成せられた。

（イ）ミレトス派は、タレス（前六四〇―五六二頃）に始まる。小アジアのミレトスに出たから、かく名づける。彼は宇宙の根源を以て水に歸した。ギリシヤ哲學の鼻祖と仰がれる。彼等は、今日の意味の哲學よりも、寧ろ科學の方面の研究に入つて居た。タレスは、彼の日蝕戰爭（前五八五）を豫言したと云はれ、またマグナグレーキヤのピタゴラス（前五八〇―五〇〇）は、有名なる幾何學の原理を發見したのである。

（ロ）ソフィスト派　の出たのは紀元前第五世紀の事で、當時タレス以來の宇宙論の諸說に倦める社會は、學問を以て公共生活に活用するの傾向を生じ、この派の發生を促がしたのである。ソフィストの先達はプロタゴラスで、紀元前四八〇トラキヤのアブデラに生れた。彼は普遍不易の眞理なるものは、決してあり得べからざるものとした。是の如き論を以て、公共生活に活用せば、社會の秩序は、壞亂せらるゝの外なく、害毒流れて、當時アテネの青年を墮落せしめた。彼等の論理を弄するところから、これを詭辯派と稱すれども、本義は物知りといふに過ぎない。

（ハ）ソクラテス　は、アテネの人で、紀元前四七〇に生れた。彼はソフィストの迷妄を破らんとして、デルフォイの神殿に掲げられたる「汝自身を知れ」の語を以て自も敎へた。思へらく、僞知を去り、無知を曉らざれば、以て眞知に入ることは出來ないと。即ち對者を論破して、その無知を曉らしめ、然る後に、彼の知德合一說を以て、訓へんとした。この方法は、大に敵をつくり、終には、ソクラテスはアテネの青年を害するものであると訴へられ、紀元前三九九、獄中に毒を仰いで死んだ。東洋の聖人孔子と時代を同うしたことは、奇なる暗合である。

（ニ）プラトン　は、ソクラテスに師事したアテネ人で、紀元前四二七に生れた。彼の哲學は、イデヤ說を中心とする。彼は世に眞に實在するものは、非物質的で、形體のない、イデヤであるとした。その理想國家說は、世に最も注意せられる。その敎授したギムナジウムの名に因みて、彼の學派をアカデミーと稱した。

(ホ)アリストテレス　は、紀元前三八五トラキヤのスタギラに生れ、プラトンに就いて學んだ。科學・文學・政治學一として秀でざるはなく、諸學の父と稱せられたが、寧ろ科學者である。その爲學の法は、實驗と演繹法とに依るもので、歐洲の中古を通じて尙ばれ、ベーコンの歸納法を唱ふるまで、學者の奉ずるところであつた。彼は紀元前三四二、マケドニヤに聘せられて、アレクサンドル大王の太子時代の師傅であつた。大王が多能で、學を好んだのは、この良師に負ふところ多いのである。彼はリケウム(アポロリケイヤ附近のギムナシウム)で講說した。彼の學派を逍遙派といふのは、恐らく「逍遙」と稱する場所で、その弟子と相會したからであらう。

(五)文學　ギリシヤ文學の祖は(イ)ホメロスである。後(ロ)ヘシオドス出で、文藝の黃金時代に至つて(ハ)エースキロス(ニ)ソフォークレス(ホ)エウリピデスの三大悲劇作家あられ、末期に(ヘ)アリストファネスの喜劇行はれた。史家(ト)ヘロドトス(チ)トゥキデデス亦後世史家の尊ぶところである。

(イ)ホメロスの在世時は、確定し難いが、約紀元前八〇〇頃ならんと推せらる。その著イリヤドは、トロヤ征伐の事を述べ、オディッセイは、ユリセス漂歷の事を述べ、ともに久しく口碑に存したのを、ペリクレスの時訛誤を正して、筆にして傳へた。兩詩ともに、全く架空の事とのみ思はれたのであつたが、近時小アジアに於けるトロヤ(又イリオスとも云ふ)の遺蹟の發掘は、ティリンス・ミケーネのそれと相待ちて、その事實に近いことを明かにし、ギリシヤ古代史研究上、有力なる史料と目さるゝに至つた(兩詩ともに邦譯がある)。

元來トロヤといふのは、肥大豐饒といふ意味を持つて居るのであるが、ホーマーも諸處に之を譽めたゞへて廣大なる街衢を有すといひ、よく建てられた、そしてよく住居が出來て居るといひ、繁華な、愉快な、莊麗な立派な城壁で圍まれた、高く聳えた、風曝された、そしてまた神聖なとまで激賞して居るので、その如何に繁昌を極めたところであつたかを想像すべきであらう。そのアクロポリスは、ペルガモスと稱せられて居つた、これが即ち今のトロヤの廢墟でその後出來た市の跡は、その東南に廣がつて居つた、現今のヒッサリックの村はそれに當るのである。

このアクロポリスに、ホーマーに歌はれたプリヤムの王宮があつた、その王子の住んで居つた五十の室々輪奐たる美を極めた宏莊な建物の向ひ側には一段高くまた

十二の室が連つて居つた、此王宮の前が即ちアゴラで、こゝにトロヤの勇將ヘクトルは住んで居つた。そしてスパルタから美人ヘレネを奪つて歸り、トロヤ戰爭を惹き起したパリスの莊麗な宮殿もまたこゝであつた。その他パルラスアテーネの神殿や、アポロ、ゼウス等の神殿等に至るまで、希臘の本土なるミケーネなど、尙ほ企及することが出來なかつたほど立派なものであつた。

これははじめたゞホーマーの詩的記述として、また太古の傳說として歷史上の疑問とせられて居たのであつたが、シュリーマン博士が發掘の結果は、たゞにこの時代に於けるトロヤの狀態を闡明したのみならず、また實に有史以前からこゝに勢力ある住民を有して居つたのが、希臘羅馬時代に至るまで、順次其の遺跡を存せることが分明となつて、各時代に於ける文明の跡を觀ることによつて研究すれば凡そ紀元前三千年に遡ることが出來る。第六紀が紀元前一千五百年から一千年ごろまでのもので、トロヤの全盛期ともいふべきホーマー時代である。第七紀の層が古希臘時代で、凡そ紀元前七百年頃までに亘り、第八紀が所謂希臘の盛んな時代で、第九紀が羅馬時となつて居る。（黑板勝美氏南歐探古記）

（ロ）ヘシオドス　は、紀元前七〇〇頃に出で、道德的の詩を作つて名があつた。

（ハ）エースキロス　は、ペリクレス時代に先だつて出で、マラトン・サラミス・プラテーエーの役に從ひ、哲學的宗教的の作品を出す。「縛されたるプロメトイス」ペルシヤ人」等著はる（ともに邦譯がある）。

（ニ）ソフォークレス　は、ペリクレス時代に出で、少時にはエースキロスと競ひ、後にはエウリピデスと競ひて、常に優れたと云はれる。その「僭者エーディプス」最も名がある（邦譯がある）。

（ホ）エウリピデス　は、ソフォークレスに後れて出で（サラミス海戰の日にその島に生れたと云はれる）世話物に長ずる。「メデヤ」最も著はる（邦譯がある）。

（ヘ）アリストファネス　は、更に後れて世に出でた。その「雲」はソクラテスを嘲れるもの、「鳥」はシチリヤ遠征を諷し「蛙」はエウリピデスを罵つたものである。

ギリシヤの劇は、神事にはじまり、神殿の附近には、屋外の劇場があつた。

（ト）ヘロドトス　は、ソフォークレスと時を同うし、ペルシヤ戰役を記るさむとして、關係諸地方を歷訪し、九卷の歷史を作つた。土人の物語をその儘信ずるなど、材料精撰といふ點では、缺けたところもあるが、當時の記錄として、後の歷史地理に益するところが尠くない（邦譯がある）。

（チ）トゥキディデス　は、「ペロポネソス戰役史」を編した。材料の取捨といふ點に於

て、ヘロドトゥスに優つてゐた。

紀元前六世紀の後半頃、もとフリギヤ出身の奴隷であつたエソップが居て、アリストファーネスを知り、ソクラテスを知つて居り、有名な「寓話」をのこした。

地理學者には、紀元前五〇〇頃のミレトスのヘカテーオスを推さねばならぬ。その地圖は、ギリシヤ最古のものである。

(六)美術

ギリシヤの美術は、哲學とゝもに、後世歐洲の模範とするところで(イ)建築(ロ)彫刻ともに優れてゐたが、繪畫に至つては十分でなかつた。

(イ)建築　には、三樣式が傳はつた。ドーリヤ式が最も古く、イオニヤ式これにつぎ、コリント式最も後れた。ドーリヤ式は、柱頭無飾で、引き締つた感を與へ、イオニヤ式は、柱頭に渦狀の飾があつて、やさしみを覺えしめ、コリント式はアカントゥス葉を以て柱頭を飾り、華美の感があるといふ點を以て、普通に區別する。現存せる代表的なるものは、紀元前第六世紀頃に建造せられた、南イタリヤなる、ペストゥムの海神殿と、アテネのパルテノンである。ともにドーリヤ式の柱を用ふ。名匠イクティノスは、ペリクレス時代に在つて、パルテノン建築の事にあたつたのである。

(ロ)彫刻　に於ては、フィディヤス最も著はれた。紀元前五世紀の中葉、アテネに出で、パルテノンのアテナ女神像を作つた。

驛を出で、窰窰あるシレーナの門を入りて城壁の内に入る。我は今まポセイドン(ネツツーノ)の祠の前に立てるなり。こは希臘建築中にも、最も好く殘れる古祠にして、内陣の柱さへなほ見ることを得るは珍らし。凡そペスツムの建築は皆な「トラヴェルチノ」の類の石灰岩にて作られたれば、年を經て黄金色に錆つけり。此の祠は所謂六柱式(ヘキサステル)にして、紀元前五世紀の中葉のものなりと云ふ。ポセイドン祠の南に接して「バジリカ」と稱する一祠あり。こはペスツム中にて最も古き建築にして、六世紀に遡る可く、其の太き柱は短くして、上部に至る縮減頗る急なるのみならず、柱頭の形もいたく他に異なり。前面に九柱あるも多く其の例を見ず。

ペスツムは古へのポセイドニヤにして(今はペストと訛れり)希臘人の植民なる南伊シュバーリスの民來りて、此處に海神の名負ひたる一市を樹てしは、紀元前六世紀なりと云へばかの「バシリカ」は其の頃の建築なる可し。後ちルカーニヤ人の手に歸し、やがて羅馬の足下に移りしが、回教徒此地を襲ひ、住民遁れ去りてよりペスツム遂に世に捨られぬ。世に捨てられて、今は空しく三箇の古祠の茫々たる草叢に立ちそぼてるのみとなりぬ。紫苑、錦葵の花は階段に延び上りて、石柱の間隙には蚪蝎と船虫

の去來する外には、此の古へのポセイドニヤは幾何の住人やある。ヴィルギリウスの詩に稱へたるペスツムの二度咲きの薔薇は今ま何處にか殘れる。（濱田耕作氏南歐遊記）

第五節　ギリシヤの内訂

（一）ペロポネソス戰役　ペロポネソス戰役は、紀元前四三一より四〇四に亘る間、ギリシヤ諸國が、二分して相爭つた戰爭で、（イ）その遠因は、アテネ・スパルタ間の反目に在る。（ロ）戰役の第一期は、アテネ・コリントの衝突に始まり、ニキヤスの和議に終はり（ハ）第二期は、シチリヤ遠征に始まり、アテネの屈服に終つた。

（イ）アテネは、イオニヤ族で文に長じ、民主政治を行ひ、海軍を以て覇を稱し、スパルタは、ドーリヤ族で、武を尚び、貴族政治を行ひ、陸軍を以て雄を稱した。此の如く、兩者の特色相反せるが上に、ペルシヤ戰役以後、アテネの隆昌は、スパルタの嫉視反感を增し、恰かもアテネが、デロス同盟の勢力を私用せるにつき、同盟諸國に不平の聲あるに乘じて、スパルタは、アテネと雌雄を決せんとして起つたのである。

（ロ）戰役の第一期は、紀元前四三一アテネが、コリントと衝突したるに始まる。コリントは、ドーリヤ族の市で、通商航海を以て國を立つるもの久しく、アテネの

海上に跋扈せるを忌んでゐたが、紀元前四三五、イリリヤ沿岸のエピダムノス市（エピダムルス）の内亂あるに當つて衝突した。エピダムスは、コリントの植民コルキラの、更に植民したものであるが、内亂に際して、一黨は援をコルキラに、他黨は援をコリントに求め、アテネはペリクレスの勸めによつて、コルキラを援けた。之に於て、コリントは、援をペロポネソス同盟に求め、終に盟主スパルタを動かして、大戰爭と爲つた。勝敗未だ定まらざるうちに、アテネに疫病が起り、その勢猖獗で、紀元前四二九ペリクレスも、之が爲めに斃れ、黨爭相ついで生じたので、紀元前四二一、五十年間の休戰を約した。之れをニキヤスの和議と云ふ。當時アテネの統率者の名にもとづいて名づけたのである。（名醫ヒポクラテスの出たのは此頃）。

ペロポネソス戰役第一年戰死者追弔會に於けるペリクレスの演說は、全盛時代アテネ人の心がけを見るべき好資料で、坪内雄藏氏の「倫理と文學」のうちに譯載されてある、一讀をすゝめる。

（八）戰役の第二期　は、紀元前四一五アテネ人がシチリヤ遠征を企てたのに始まる。當時シチリヤ島のギリシヤ諸市は、互に相鬩ぎ、援を本國に求むるを常とした。紀元前四一五、セゲスタは、シラクサと爭ひ、援をアテネに求めた。老政治家ニキヤスの如きは、これに關係するの不利なることを說いたが、少壯で野心に富めるアルキビヤデスは、功名の念に驅られ、終にアテネ人に勸めて、遠征の師を起さしめた。アルキビヤデス征路に就くや、その曾て犯したる罪發覺して、捕へられんとして逃げ、軍はシラクサを攻めて克てず、アテネの國威は地に墮ちた。是に於て、スパルタは、アテネの罪を鳴らして復た起ち、紀元前四〇五、その海將リサンドルは、アテネの艦隊を大にエゴスポタミ川（ガリポリ半島を流る）に破り、黑海地方の富源を、その手中に收めたから、アテネ大に衰へ、翌年スパルタに降つた。スパルタ卽ちアテネの民政を廢し、三十人の貴族をして、政を執らしめ（所謂三十テイランノスの政治）軍艦の數を制限して、十二隻と爲し、長城を壞ち、デロス同盟を解くべきことを命じた。

（二）スパルタの專横　戰後スパルタは（イ）一萬人退却の事によりて、ペルシヤの窮狀を知り、ギリシヤの狀勢に鑑みて（ロ）アンタルキダス條約を結びて、ギリシヤ諸市

を歴し、大に權勢を恣にした。

(イ)一萬人退却　ペロポネソス戰役の終はつた年、ペルシヤ王ダリオス三世死し、二子位を爭ひ、紀元前四〇一、クナクサに決戰した。ギリシヤの傭兵は、この戰に敗者に與したので、艱苦を冒して河を渡り、山を踰え、荒原を漂ひ、三千六百四十五哩といふ長旅程を、二百十五日間に亘つてペルシヤ國内を遍歴し、纔かに逃れ歸へることを得た。當時これを引率したギリシヤの史家クセノフォンは、その記事をつくりて「一萬人の退却」と稱したのである。

(ロ)アンタルキダス條約　この退却の途上、ペルシヤ國内疲弊の實狀確められたので、スパルタ王アゲシラオスは、ペルシヤ侵入を企て、イオニヤ地方に勝ち、更に深くペルシヤ内部に進入せんとした。然るに、ペロポネソス戰役後、スパルタの爲めに貴族政體を强ゐられたる諸市は、今や再びアテネを盟主として、スパルタに叛き、ペルシヤは軍資を送つて、これを扶くるに至つた。是に於て、スパルタはペルシヤ王を介して、諸國とアンタルキダス條約を結んだ(紀元前三八七)。アンタルキダスは、この約に與つたスパルタの說客の名である。この約によると小アジヤ・ペルシヤ領内のギリシヤ諸市は獨立なるべく、ギリシヤ諸市の同盟は一切解散すべく、スパルタはこの條約の保護者たるべしと定められた。かくてスパルタは、表面勢力無きものゝ如くであつて、その實はギリシヤ諸市をして、孤立せしめて、己れのみ强大なることを得、益專横を極めた。

(三)テーベの覇業　アテネ既に亡び、スパルタ獨り勢を逞うせるにあたり(イ)テーベに(ロ)エパミノンダス・ペロピダスが出でゝ(ハ)先づレウクトラに、スパルタ軍を破つて覇を唱へたが(ニ)マンティネーヤに、エパミノンダスの斃れてからは、ギリシヤ諸市、雄を稱するに足るものなくなつた。

(イ)テーベ　は、中部ギリシヤのボエオティヤに在る。紀元前三八三スパルタの一將、その市城カドメヤを占領し、抗議に會ひて、その將は罰せられたが、その兵は依然として駐まつた。

(ロ)かくてスパルタの勢力、テーベに盛なるの時に當り、かねてアテネに亡命したペロピダスは、その友エパミノンダスと謀つてテーベの政府を顚覆し、新に共

和政を布き、スパルタの勢力を逐うた。是に於て、ギリシヤは民主主義なるテーベと、貴族主義なるスパルタとの二派に別れて、對立するに至つた。

(ハ)紀元前三七一、レウクトラの戰は、實にテーベが、スパルタと雌雄を決した大戰爭であつた。レウクトラは、テーベの西南に在り、エパミノンダスは、斜線陣法と稱する新戰法を案出して、此にスパルタ軍を邀擊して大に勝つた。斜線陣法とは、從來優勢を右翼に置きて、稍劣勢なる敵の左翼に對したのを改めて、左翼を優勢にし(レウクトラの戰にては五十列)て、敵に突擊し、また自ら衞る陣法である。

(ニ)テーベの勢今や隆昌で、スパルタの爲めに困めるもの、多く來つて援を請うた。ペロポネソス半島諸市を赴援せんとして、エパミノンダスは、紀元前三六二、マンティネーヤ(半島北部)に、スパルタと戰つた。テーベ軍は、最後の打擊をスパルタ軍に與へて、大勝利を得たけれども、惜むべし、エパミノンダスは傷いて死んだ。而してこれに先だつこと二年、ペロピダス亦戰死し、テーベを統御すべき偉人なく、テーベの覇業も永續することが出來なくなつた。

エパミノンダスは、重傷を負うても、屈せず、己が軍克つたと聞いてはじめて瞑目した。その時「自分は、テーベに遺すに、二女を以てする。一はレウクトラの勝利で、他はマンティネーヤの勝利である」と云つたのは、國人によくこの遺兒を長育せしむことを托したのであらう。

斜線陣法
B.C 371 レウクトラの戰

△古代ギリシヤ人の生活

男子はヒートンとヒマチオンを用ゐる。ヒートンとは、セミティク語であるから、その東方傳來のものであるのは明かである。毛製または麻製の下着で、今の海水浴着の如く、頸と腕の部分とを開けて、その他は縫ひ合せる。ヒマチオンは、もとペプロスと稱したもので、外出の際などに、ヒートンの上に着るもの、長方形の毛織の反物で、左肩から背をめぐつて、右腕下に至り、殘つた部分は、更に左肩に投げかける。普通は腰部に帶をして、ヒマチンをとめる。女子もまたヒートンを用ゐるが、男子のよりはやゝ長く、袖などをつけて飾り、外出にはヒマチオンに似たエピブレマをまとふ。男子の衣類は、通常白色で、慶事には色もの、凶事には、黑色を用ゐる。女子は色もの特にサフラン色にて、模樣のあるものを喜び、髮・耳・頸・腕に、黃金の飾をつける。冠り物は、平常は用ゐないが、旅行などの時には、ペタソスと稱する、緣廣の帽を被ぶる。履物は、靴を普通とし、狩獵旅行には、長靴を用ゐ、短靴は貧民に限つた。

食。夕餐が重なる食事で、パン・オリーブ・果實・肉類・酒類を用ゐる。オリーブは、パタの代用で、砂糖の代はりに蜜を用ゐた。食後には、談話・音樂または讀書などして時を過ごし、夜は早く寢た。照明の方法がまだ進歩しなかつたためで

ある。

住。古代ギリシヤ人の家は街路に沿ひて建ちながら、街路に面しては、入口の外は、窓さへも設げない。採光は、内部にある二個の庭園からして、外部とは壁で全く隔離する。先づヴェスティブルム（玄關）を入ると、アトリウム（應接室）があり、兩側には、家人の事務室があつて、中央には、コンプルヴィウムがある。その奥にタブリヌム（主人の居間）があつて、それから家の第二部ともいふべき、家族の居るところに進む。こゝはペリスティルと云つて、中央に大泉水があり、周圍には、家族の寢室・浴室・食堂・廚房などがある。それから廣間を通ると、後苑に出る。二階は、大抵奴隷などを置き、普通家人には好まれなかつた。屋根は大抵平かで、粘土製の瓦で葺いた。（主としてポンペイ遺蹟パンサの家に基づいて述べたから、純粹ギリシヤのものでないかも知れないが、先づ大體は、昔から變りなかつたものと思はれる。）

ギリシヤは、その位置からして、古代東方諸國に發達した文明を受けいれるに、最も適當してゐた。かくてヨーロッパ文明の母國となつた。而してその山河の形勢は、彼等を驅つて外に向はしめ、その氣候の配置は、肉體に於て强健、精神に於て敏捷なる國民を生せしめ、古代東方諸國から受けて、よく咀嚼して、自家のものとした文明を、古代西方諸國に傳ふるの任務を果したのである。

第三章　東西文明の融合

第一節　アレクサンドル大王

(一)マケドニヤの興隆　マケドニヤは、テサリヤの北方に在り、久しく文明の域に入らなかつたが、沿岸地方は、早くギリシヤ人との接觸によつて稍〻開けた。而してその大に興つたのは(イ)王フィリップ二世の力により、次第にギリシヤに勢力を扶植したのに始まる。(ロ)アテネの辯士デモステネスその奸策を看破して、國人を警戒するところあつたが、(ハ)ケーロネーヤの一敗は、かへりてギリシヤ全土を擧げて、マケドニヤの配下に置くに至らしめた。

(イ)紀元前第四世紀の中葉、マケドニヤに内亂あり、テーベの力を藉りたから、王弟をとゞめて質たらしめた。王弟は即ちフィリップである。當時テーベには、ペロピダス・エパミノンダス盛に經綸を行ひつゝあり、採つて模範とすべきものが多かつたのである。烱眼なるフィリップは、その長所に學びて、ファランクス戰法を創めて兵を强うし、またギリシヤ人の一致を缺き、尊大なる傾あるの弱點を看破して、

巧にギリシャ諸市の内訌に容喙し、次第にギリシャの内事に干渉し、漸く勢力を得るに至つた。

ファランクス　フィリップは、斜線陣法の原理に基づき、別に新意を加へ、長槍を有せる方陣隊を組織せしめた。この方陣隊は即ちファランクスで、十六人十六列の一團、前五列の槍は、悉く最前列に突出するもので、人馬ともにこれに當る能はざるものであつた。密聚長槍方陣隊と稱すべきものである。

(ロ)フィリップ　の奸策を摘發して、大にこれを攻撃し、且つギリシャ人を警戒したのは、デモステネスである。彼はアテネの人、少時には口訥にして物がいへなかつたが、修養の結果、遂に雄辯家と爲り、その得意の辯舌を以て、盛にフィリップを攻撃し、後世人身攻撃演説を稱して、フィリピックと名づくるに至らしめた。

(ハ)ギリシャ人は、デモステネスの熱心なる忠告に動かされて、マケドニヤの勢力を驅逐せんとし、紀元前三三八ケーロネーヤに於て戰つたが、ギリシャ軍には、フィリップに敵すべき將も卒もともに無く、遂に大敗し、ギリシャは全くフィリップの下に屈した。

(二)大王の遠征　紀元前三三六フィリップの死するや、その子アレクサンドルは、僅に二十歳の青年に過ぎなかつた。ギリシャ人此機に於て、マケドニヤの羈絆を脱せんとしたが、父にも優れる偉材であつたアレクサンドルは、忽ちにして此等の叛亂を定め、徐ろに(イ)父の遺圖をつぎて、ペルシャ遠征の途に上つた。(ロ)征路は、小アジヤからエヂプトに出で、ペルシャを過ぎ、中央アジヤを經てインドにも及び(ハ)此に東西文化を融合せる一大帝國を建設せんとしたが、不幸にして早世し(ニ)死後の天下は再び四分五裂した。

(イ)先きにフィリップの、ギリシャを定めた時、人心の服せざるを知り、ギリシャ人のペルシャ戰役を憶ふの心を利用して、心を他に轉じて、滿足せしめんとし、ペルシャ遠征を企て、將に發せんとするに臨み、家人の害するところとなつて斃れたのである。アレクサンドル今やその遺圖を奉じて起つた。

(ロ)紀元前三三四、大王は四萬の兵を率ゐて、ヘレスポントを渡り、先づ小アジヤのグラニコス河畔に、はじめて敵を敗り、途を轉じてゴルディウム(今のアンゴラ附近)を過ぎ更に南して、イソスにペルシャ王ダリウス三世の軍を破り(紀元前三

三三)ティルを陷れ、エヂプトに入りアモニウムに至り、引きかへしてニール河口にアレクサンドリヤ市を建て(紀元前三三三)再び北にかへりて、ダマスクスより東に轉じ、紀元前三三一、ティグリス河上流アルベラとガウガメラ(今のモスル附近)の間に於て、ペルシヤ軍と最後の決戰を爲し、ダリウスはメディヤ地方に遁れ、その下に殺され、アレクサンドルはティグリス・エウフラテス河畔を下り、スサよりペルシヤの故都ペルセポリスに入り、エクバタナ(今のハマダン)を過ぎへカトンピロス(今のダムガン)に出で、途を東南にとりて、中央アジヤに進み、サマルカンドを陷れ、復び南下して、カイバル峠を踰えて、インド河上流に出で(紀元前三二六)ヒダスペス河畔に、タクシャシラ王ポールスに勝ち、更に東してヒファシス河畔に達したが、將士還へるを想ふもの多いので、自らはインド河を下つて、河口から沿岸を陸路、別軍はネヤルコス引率のもとに海路、西に凱旋した。

(ハ)大王は東西文化を融合したる大帝國を建てんとの大理想を抱き、自ら先づペルシヤ王女を娶り、諸將にも各これに倣はしめ、又諸處にアレクサンドリヤ市を設けて、ギリシヤ人を移住せしめ、以て此大理想遂行に便せんとした。然るに凱旋の後幾許もなく、紀元前三二三、壽三十三を以て死んだ。

(ニ)大王死せる時、皇后ロクサネ(東方の眞珠と稱へられたバクトリヤの王女に遺腹の子があり、諸將互に爭つた。この時代をディヤドク時代と云ふ。諸將中最も有力であつたのは(い)セレウコス(ろ)プトレマイオス(は)カサンドルであつたから、紀元前三〇一、(に)イプソスの戰以來、各分立して、帝國は分裂した。

(い)セレウコスは、シリヤを領し、東はインド河から、西は小アジヤに亘れる大領土に君臨し、都をアンティオキヤに奠め、紀元前三一二から紀元前六六までつゞきて後、ローマに併はされた。

セレウコスのシリヤの勢力漸く衰ふるや、紀元前二五〇頃ディオドトスは、バクトリヤ(大夏)を、アルサケスはパルティヤ(安息)を立てた。前者は、ギリシヤ文明を尊び、後者はペルシヤ古來の文明を尊んで、屢々西方の國々と爭つた。紀元前一五〇ミトラダテス王出づるに及び、パルティヤは、バクトリヤを併せ、西方にローマと戰つて勝つた。

(ろ)プトレマイオスは、エヂプトを領し、アレクサンドリヤに都し、紀元前三二三——三〇まで傳へて、ローマに亡ぼされた。

(は)カサンドルは、マケドニヤを領し、ペラに都し、紀元前二八〇——一六八に傳へて、ローマに亡ぼされた。

（に）イプソスは、プリギヤにあつた。アレクサンドルの遺將中小アジヤを領したアンティゴーノスが、紀元前三〇六に王號を取つたために、他の諸將も、何れもこれに倣ひたる結果、終に此に戰ふに至つたので、アンティゴーノス戰敗以後、天下分裂の形勢は、促進されたのである。

從來貨幣の面には、神像を彫刻するのが例であつたのが、此時以後、王の肖像を表はすことになつた。

（三）アレクサンドリヤの文化

プトレマイオス家の時代、エヂプトのアレクサンドリヤは、東西文明の融合點であつて、後期ギリシヤ文化（ヘレニスティク）の中心と目された。特にその（イ）哲學と（ロ）科學とは、後世に影響し（ハ）美術も亦發達した。

（イ）哲學　に於ては、ストア派を創めて、禁欲を說いたゼーノン（紀元前三世紀の中葉）耽美を說いて快樂派を立てたエピクロス（前三四二―二七〇）が、尤も優れてゐた。ともにアテネに居た。

（ロ）幾何學　のエウクリド（紀元前三四〇年頃）物理學のアルキメデス（前二八七―二一二）地理學のエラトステネス（前二七六―一九六）ストラボ（前六三―後二四）天文學のプトレマイオス（紀元二世紀の前半）も、この時代に出でた。アルキメデスが、シチリヤ島のシラクサに居りて、その王ヒエロの爲めに、王冠の黃金の純否を測定せんとして、入浴中比重の法を發見し、狂喜してエウレカ、エウレカ（我は發見した）と云つて飛び出したこと、ストラボが始めて地球の球狀たることを說き、プトレマイオスが始めて地球の大きさを測定し、地球不動說を唱へたことは有名である。

（ハ）美術　に於ては、繪畫にアペルレス、彫刻にリシップス（アレクサンドルに侍す）あれども、特に注意すべきは、ロードス派・ペルガモン派（兩地ともに美術學校があつた）である。前者に屬する美術家の作品たるラオコーン（ワティカン博物館藏）は美術家の珍重するところで、後者に屬する瀕死のガリヤ人（カピトル博物館所藏）とともに傳ふべきものである。前代と異り、題材を人間にとれるが多く、神體でもアフロディテ（ヴェヌス）ヘルメス（メルクリウス）の如き、人間に近いものを擇んだことは、注意すべき點である。プラクシテレスのヘルメス（オリンピヤ博物館所藏）ミーロ島發見のヴェヌス（ルーヴル博物館所藏）は、その著名なるものである。

小アジヤのハリカルナスの王マウゾルスの死後（紀元前三五〇）その妃アルテミシヤが建てたる墳墓はマウゾレウムと稱して、墳墓藝術の代表的のものとせられ、その彫刻はスコーパスの手に成つたといはれ、棺槨即ちサルコファージュの彫刻も亦盛に行はれた。

プトレマイオス家は學者を優遇し、學術を奬勵した。その圖書館は特に學藝を保護したソテル王の時（紀元前三二三——二八五）に、アテネの辯士・哲學者・政治家で且つ詩人であつたデメトリオス＝ファレルスの建議によつて、王の晩年に出來たもので、フィラデルフォス王の時（紀元前三〇九——二四六）には藏書十萬卷と稱した。後アリストテレスの書庫を買ひ、歷代諸王何れも學藝を好んだので、遂には七十萬卷にも達するに至つた。ケーザルのエヂプト征伐に、殆んど灰燼に歸したのを、アントニウスの時、ペルガモンから蒐集して恢復し、次第に增大して、よく四世紀の間聲名をたもち紀元三九〇の兵亂に再び散亂した。圖書館に附屬してムゼウムと稱するものがあつて、今日の大學の如く、學者の研究し、講說するところで、諸方から學者が來住した。

アレクサンドル大王の征戰によつて、古代ギリシヤの文明は、東洋諸國に普及せられ、古代東洋文明と接觸し融合した。アレクサンドルの大帝國の範圍、西はニール河畔から東はインド河畔、北は黑海・裏海の沿岸から、南はインド洋・ペルシヤ灣の沿岸に至るまで、ギリシヤ文明の影響を蒙むらざるものなく、ギリシヤ語は、今や世界語となり、孤立的ギリシヤ人の精神の產物たる政治哲學の原理は、その美術・科學・文學とともに、當時の世界共通のものとなつた。かくて東西文化は融合せられて、世界精神は生れたのである。

第四章　ローマ

第一節　ローマの興起

(一)ローマ都

ローマは(イ)ラティウムの中心都會で、紀元前七五三の建都と稱し、ラティニ族の創めたものである。後次第に發達して(ロ)ティーベル河畔の七丘陵上に居るに至つた。(ハ)社會に貴族・平民の別があり、最初は(ニ)王政であつたが、紀元前五〇九これを廢して(ホ)共和政と爲した。

(イ)ラティウム　は、平地といふ意味で、ティーベル河の南に、後ろはアペニンの山脈を負ひ、前はティレニヤ海に臨める平野である。そのアルバノ山上にアルバロンガ(長白市)といふがあつて、ラティニ族の主要なる植民地であつた。ラティニは、太古に半島に入り來つたアールヤ人の一種で、西方イタリヤの低地に住み、ティーベル河上流の同族サビニ、異種族エトルスキに對して衞るために、その地方の三十市をあつめて、ラティニ聯盟をつくり、アルバロンガをその要塞としたのであつた。而して、年々彼等の最高神とするユピテルの祭禮を行つて、團結を固うして居た。

その三十市中の一つであるローマは、エトルスキと境を接するの地點にあるので、サビニの加盟以來、次第にその勢力を增し、イタリヤ族のもの、漸く來り加はるに至つた。

ローマとは、モムトの考證によると、流に沿へる市といふ意味で(ティーベル河を一にルーモと云つた)そのティーベル河に臨むところから出た名で、ロムルスやレームスの傳說は、後世の地名傳說で採るに足らぬ。紀元前七五三を以て、建都紀元とすることも、明かな根據はないが、古來エーシー(アンノウルビスコンディテー又はアブウルベコンディタの略)として採用せられたものである。

(ロ)七丘市(セプティモンティウム)　とは、もとパラティヌスの三箇所、エスクィリヌスの三箇所とケーリウスの一箇所とを數へたのであつた。ローマ都のはじめは、ティーベル河口から二十キロメートルのパラティヌスの丘であつたが、それに對してサビニの植民せるクィリナーリスと、ウィミナーリスとがあつたのを、終に併合し、更にその西方の要害カピトリヌスに築いて、いよ〳〵その强さを增し、八百年の後アヴェンティヌスを併せて、今の所謂七丘となつたのである。そのカピトリヌスは、政府・神殿・要塞の所在地で、パラティヌスは、貴族の住地、アヴェンティヌスは平民の住地

とせられた。

(ハ)社會　ローマ都建設者の子孫を貴族(パトリキ)と稱する。彼等は、完全な市民權を有し、政治は彼等の專有するところである。ローマ建都の後に入り來つたものゝ子孫を平民(プレーブス)と稱する。彼等は完全なる市民權を有せず、參政の權もなかつた。

(ニ)王　は選擧せられ、絶對の權を有し、獨り政事・兵事の長たるのみならず、宗教に於ても長(ポンティフェクスマクシムス)であつた。王の下にセナトゥスあり、元老院で、王の諮詢に應ずる。別に人民の集會あり、コミティヤ＝クリアタ及コミティヤ＝ケントゥリアタがこれである。前者は貴族會で、王を始めとし官吏を選擧し、後者は兵員會で、軍事に關して決議する、平民も參加するが、事を決するのは貴族である。

(ホ)王政　を廢したのは、最後の王即ち第七代のタルキニウス＝スペルブスの暴行に基づくと稱するが、選擧毎に、1エトルスキー族のみ雄勢であつたことも、亦有力な原因である。共和政に於ては、毎年二人の、2コンスルを選び、政を執らしめ、從來の王に代り、宗教の長は別にその人を定めた。而して國家危急の際には、ディクタートルを置き、任期六月として、國家の事を獨裁せしめた。元老院及兩集會はもとの通り。

1エトルスキは、如何なる種族に屬するか判明しないが、その遺した墓碑銘などには、東方の文明、ギリシヤの文明を採用して居たことが知られ、その遺物によると鐵・眞鍮・金の精巧なる加工品もあり、建築術にも長じたらしい。されば、ローマ人がその文明の影響を被つたことは、その服飾に、その住居に、その戲遊に、その他信仰軍事諸般の事に亘つて大なるものがあつた。即ち他の二族は、智力に於て到底、エトルスキの敵でなかつたものと見える。

2コンスルは、もとプレートルと稱し、二人あつて、人民によりて選ばれ、任期は一年であつた。インペリウム即ち兵馬の權を有し、その權力の標識として、ファスケス(斧を中心とした棒の一束)を有せる、リクトルなるものを從者とした。

(二)貴族平民の爭　共和政既に建つたが、平民は依然として、權を與へられず、而も國勢漸く張るに從つて、平民の數次第に加はり、その勢亦盛となつた。此に於て兩者の爭は絶えず、爭ふごとに平民は、その權を伸張して(イ)護民官を設け(ロ)十二表法を定め(ハ)リキニウス法を通過せしめたから、紀元前第三世紀の初に至つては、國家

の公職、一として平民に許されざるもの無く、兩者の別は事實上存せざるに至つた。

（イ）平民は、常に軍事に從ひ、國勢發展に功あるにも係はらず、貴族が依然として權を擁するので、紀元前四九四ローマ東方の聖山に退却し、分離を計つた。此に於て貴族も大に悟つて、稍々讓歩するところあり、護民官（トリブーニ・プレービス）なるものを設け、平民の權利を保護することゝした。護民官は、裁判上・議決上、平民に不利益なるものあれば、ヴェトー（我之を禁ず）と稱して、之を禁止するを得。次いでコミティヤ＝トゥリブータ＝プレービスと稱する平民の集會設けられ、平民の權愈々伸びた。

（ロ）然れども、貴族は、法の解釋を擅にして、專制であつたから、紀元前四五一に至つて、十人の法律編纂委員を設け、從來の法律を、成文にすることゝした。この委員を、デケンビリと稱する。この法律は、紀元前四四九に至つて成つた。これを十二表法と云ひ、ローマ法の基礎である。

ローマの十二表法は、民權發達と法態變化との關係を示す史實中最も顯著なるものである。ローマ法の初期は記憶法であつて、法の知識は貴族級なる「パトリキアーヌス」民級の秘密占有に屬して居つた。然るにローマに於ても、ギリシヤのソロン時代に於ける如く、平民級なるプレビアーヌスは貴族に對しては、常に債務者の位置に立つて居たから、貴族級が法の知識を專有するは平民級に對する一大勢力であつて、貴族は此獨占的知識を濫用して、平民を虐壓し、偏頗の處置、不公平の裁判を爲すことも尠く無かつた。加之、平民は法を知らざるが爲めに、裁判正確の保障を得ることが出來なかつたから、動もすれば猜疑心を起して、法の濫用あるを邪推することもあつた。隨つて平民級の不平は常に絶えず竟に民級分離の爭亂の一原因を爲すに至つたのである。

紀元前四六二年に至りて、平民黨の首領にして護民官となつたテレンティリウスハールサは成文法を制定發布して時弊を救ふが爲めに、十人の委員を設くべき議案を提出したが、貴族は激烈に之に反對し、其爭議數年に亘りて解けず、屢々内亂の危機に瀕することがあつたが、紀元前四五七年に至り元老院は稍々讓歩して平民級より選擧せらるべき護民官の數を五人より十人に增したが平民級は仍ほ成文法制定の請求を棄てず、其後ち三年を經て、互讓に依り、平民級は改革法案を抛棄し、貴族級は之に對して、成文法制定の準備の爲め三人の委員をギリシヤ及南イタリヤのギリシヤ植民地に派遣して其地に行はるゝ成文法を調査せしむることを承認した。此準備委員は實際ギリシヤまでは行かなかつた樣であるが、大ギリシヤの地方なる南部イタリヤに於て法制を調査し二年を經て紀元四五二年にローマに歸つて來た。始めテレンティリウスハールサが改革案を提出してから、此間實に十一年である。是に於て、改革實行の爲め、執政官コンスル其他重要なる保安官の職務を停止して新たに十大

官デセムヴィリを擧げ、之に一切の政權を委任した。謂はゆる十人衆政治なるものは是れである。十大官は政治の首腦機關として行政司法軍事に關する最高權を有したが就中多年の懸案たりし成文法編成は、其最も重要なる任務であつたが、時として、成文法編纂大官とも稱せられた。十大官は當時聲望最も隆盛であつたアッピウスクラウディウスを總裁として鋭意法典編纂の事に從事し、菲年ならずして十表の法を立案し直ちに元老院の承認を經、豫め其草案を公會場に掲げて人民の意見を徵し適當の時期を經過したる後ち、ケンツリアータ會議の議決を經て、之を十枚の高札に記して公會場に掲げた。十大官は執政官等の在職年限の例に倣ひ在職一年にして改選せられ第二の十大官が就職した。第二十大官には第一十大官の總裁アッピウスクラウディウス一人のみ居殘り、他の九人は新任者であつたが、紀元前四五〇年に新たに二表の法を制定して、之を前の十表に追加したのである。是れが謂はゆる十二表法であつて同法の制定公示に依つて無形の記憶法が成形法と爲り法規適用の標準を確定して專擅偏頗の途を塞いで、民級鬪爭の一大原因を除いたのみならず一般公衆にも其爲すべき所と爲すべからざる所とを知ることを得しめたのであるからローマ人が後世に至るまで此法を金科玉條として稱揚措かなかつたのも至極尤もな事である。（穂積陳重氏法律進化編第二編成形法第三章成文法）

十二表法は、誤つて十二銅板法と稱せられたが、今では、その木板法であつたことは、諸學者の一致するところで、銅板法などゝは云はない。此法は、久しく散逸して世に知られなかつたが、第十七世紀に至つてスウィスの學者ヂャック・ゴドフロワ苦心の結果、一六三八に其原文の復舊を企て、その研究の成績を世に公にして以來、各國の學者によつて、近世語に譯されてある。邦譯は帝國學士院の事業として末松謙澄氏のがある。第一表は、法廷召喚に付て（九條）第二表は訴訟進行の手續に付て（四條）第三表は自認又は裁判に依る債務に付て（六條）で訴訟手續に關し、第四表は親權に付て（四條）第五表は遺産相續及び後見に付て（第十一條）で親族法に關し第六表は所有權及び占有に付て（十一條）第七表は家屋及び土地に付て（十條）で財産法に關し第八表は不法行爲に付て（二十七條）第九表は公法に付て（六條）で刑法に關し第十表は神聖法に付て（十一條）で宗教上の儀式に關し第十一表は最初の五表の追補（二條）第十一表は後尾の五表の追補（五條）である。

（八）その後と云へども、平民一權利を得れば、貴族は更に新らしく、己れが階級の特權を作ると云ふが如く、兩者の爭引續いたから、紀元前三六七リキニウス法通過し、一、コンスルの一人は平民なるべきこと、二、一人所有の土地は五百ユゲラを超過するを許さず、一ユゲラは我二段九分三、既に拂込濟の利金は負債元金より除却し、殘餘は三年賦と爲すことに定め、特に貧民に利するところ多くあつた。かくて紀元前三〇〇にはコンスルも、ディクタトールも皆平民に許されて、貴族平

民の別は、事實上消滅した。

(三)イタリヤの征服　ローマは、かくて内紛の跡を絶つとゝもに、更に大に、イタリヤ半島の各種族を征服し、紀元前第三世紀の後半には、殆んど全半島を己が有とした。この征戰中有名なるを(イ)サムニヤ族との戰(ロ)ピロスとの戰とする。

(イ)サムニテは、イタリヤ中部に占據した雄族で、ローマと同じイタリヤ族である。その植民市カプア、本國と爭ひ、援をローマに求めたことから戰端を發し、紀元前三四一より前後三回の戰爭を經て、ローマ屢々苦戰したが、紀元前二九〇には、全くこれを征服した。

(ロ)サムニテ領の南は、ギリシヤ人の植民地マグナグレーキヤ(クメ・シバリス・タレントゥム・ヘラクレア・ネアポリス等諸市があつて、紀元前七、六世紀尤も昌えた)である。そのタレントゥム市(今のタラント)ローマと隙あり、援を本國エピロスの王ピロスに求めた。ピロスは、アレクサンドルの一族で、アレクサンドルの東方に於ける偉業を、西方に於て爲さむとの志あり、紀元前二八〇マケドニヤ式方陣と象軍とを率ゐて、一旦大いにローマ軍を破つたが、紀元前二七二には、ローマ人に破られて、その地は悉くローマに入つた。

(四)半島の經營　ローマ人既にイタリヤ半島を征服して、その武を示したが、今や統治の才を著はして、戰後經營の事に從つた。先づ征服した諸地を(イ)ムニキピヤ(ロ)コロニヤ(ハ)ソキイーに大別して、互に其の權を異にして、利害關係を同一ならしめず(ニ)軍用道路を通じて萬一に備ふるところあつた。

(イ)ムニキピヤとは、ローマの市民權中、選擧權と官吏となる權を缺けるも、商業を營む權と、結婚を爲すの權を有し、裁判權と兵役權とを有する。

(ロ)コロニエーとは、征服せられたる地方から、土地を奪つて、これをローマの市民に與へ、完全なる市民權を有して駐兵し、支配せしむるのである。

(ハ)ソキイーとは、條約によりて、ローマと結び、内政は自治を許されるが、戰時には從軍の義務を負ふのである。

(ニ)ローマ人は、その領土内に良好な軍用道路を通じた。ヴィヤ＝ラティナ・ヴィヤ＝

アピヤが、最も名がある。

ヴィヤ＝アピヤは、紀元前三一二即ち第二回サムニテ戰役の中頃に開かれ、時のコンスル、アピウス＝クラウヂウスの名に因むで名づけた。最初はローマからカプアまで達したのを、第二回サムニテ戰役中に、更にエヌシヤまで延長し、ピロス戰役の結果遂にブリンヂシウム即ち今のブリンヂシまで延ばしたのであつた。この軍用道路は、主として玄武岩の切石を用ゐて、一面に敷きつめてあつて、驚くべく立派なものである。ローマ人の居るところ、常に立派な軍用道路の通じて居たことは、注意を要することである。

第二節　地中海沿岸の覇者

(一)ポエニ戰役　半島を服屬し了つたローマは、勢の自然として、更に半島以外に發展して、覇を地中海に唱へんとした。その最初に衝突したのは(イ)カルタゴで(ロ)前後三回のポエニ戰役は、常にローマの勝利に歸し、紀元前一四六カルタゴの亡びるとゝもに、西地中海は、ローマの手に收められた。

(イ)カルタゴは、今のチュニス附近に在つて、アフリカ北岸の巨邑として、一時地中海を制した。もとフェニキヤのテルが紀元前八六〇に建てた植民市で、本國衰へた後愈々發展し、その商船は、特に地中海沿岸のみならずアフリカ南岸にも達したと稱せられる(南アフリカのジンバブエはその遺蹟であるとも云はれる)そのアジヤ人たると貴族政體を奉ぜると、海軍に於て強きを以て、エウロッパ人にして、共和政體を奉じ、強い陸軍を以て名あるローマとは、正に反對の地位に在り、相容れざること明である。

(ロ)ポエニとは、ローマ人が、フェニキヤ人即ちカルタゴ人を詬稱せるもので、戰役

の行はれたのは三回であつた。

(い)第一回は紀元前二六四―二四一で、兩國の中間に横はるシチリヤ島に於て、事端を發した。初めシチリヤ島のメッサナ(今のメッシナ)に楯籠れるマメルティニーと稱する傭兵等は、シラクサ王ヒエロに迫られ、救をローマとカルタゴとに求めた。預ねて反目せる兩國兵は、此に相會して、衝突した。最初は、艦船の用を知らざるローマ人、稍不利であつたが、偶然の事から、急に軍艦を作り、コルヴィと稱する撥橋樣のものを用ゐて、盛に敵艦に近づいて之を破り、紀元前二四一に、島西のエーガテス群島の戰に捷を得た。その結果、カルタゴは、シチリヤ島をローマに讓つた。次いで、ローマはカルタゴ領のコルシカ・サルディニヤを占領し、シチリヤ島とゝもに、縣(プロヴィンキヤ)として、領有することゝした。縣は全く隷屬の土地として治められるものである。この戰に於て名のあつたのは、ローマの海將ドゥイリウスと陸將レグルスとであつた。ドゥイリウスの爲に帆柱の戰勝記念碑を立てたのは、後世の傚ふところである。

(ろ)第二回は、紀元前二一八―二〇一で、第一回の敗戰後、カルタゴの將ハミルカルは、復讐の念强く、イスパニヤの銀山を採掘して、拓殖するとゝもに、兵を練り、機の到るのを待つた。その子ハンニバル嗣ぐに及び、父の志を繼ぎ、ローマの同盟市サグントゥムを攻めて戰を開いた。ハンニバル即ち兵を率ゐて、ピレネーを越え、アルプを小サンベルナール峠によりて越えて、イタリヤに入つた。ローマの諸將克く防ぐ能はず、トゥラシメノ湖畔に敗れ、ファビウス政策用ゐられず、紀元前二一六カンネーの戰は、包圍戰術によつて、ローマ軍の全敗と爲り、同盟市の降るもの相踵ぐに至り、要害植民(コロニエー)を以て辛うじて支へた。然るに、ハンニバルは、爾來本國の援助は、國人嫉妬のために得る能はず、東、マケドニヤの援兵は、ローマ兵に支へられ、西、弟ハスドルバルの兵も亦、ローマ兵に殺されて、孤立無援の狀に在るに際し、ローマの雄將スキピオは、その本國を衝き、本國危急を告げて召喚せらるゝにあひ、急遽かへつてスキピオをザマに迎へ戰つて敗績し、(紀元前二〇二)翌年和を議した。償金の支拂、軍艦數の制限と、ローマの承諾無くしては、武器を採らざることを約した。

(は)第三回は、紀元前一四九―一四六で、第二回戰勝の後、ローマの人心漸く弛

緩せるに反して、カルタゴは、次第にその力を恢復せるを見て、ローマの志士カトーは大に慨嘆し、常にデレンダ・エスト・カルターゴ（カルタゴ亡ぼさずんばあるべからず。）と唱へて止まなかつたが、ローマの盟邦で、カルタゴに隣接せるヌミディヤ（今アルジェリヤ）は、カルタゴが、容易に武器を採り得ざるに乘じて、屢々カルタゴの境を侵し、カルタゴは、その都度兵を用ふるの許しを、ローマに請うたが、ローマは、これを許るさぬので、終に先づ兵を動かして、然る後許可を求めた。ローマ大に怒り、謝罪の意を表するため、沿岸より數里の内地に移住すべきを命じた。これ海を以て生命とせるカルタゴに自殺を命ずるに異ならず、即ち市人は、最後の努力を爲して、ローマと爭つたが、時利ならずして、遂にローマの雄將スキピオエーミリヤヌスの爲に全滅せられて、市は墟址と化せられた。

（二）その他の地方　ローマは、西地中海に於て、カルタゴと覇を爭へる間に、次第に、其他の地中海沿岸地方に、その勢力を固うした。その第一回ポエニ戰役の後に平定したのは（イ）イリリヤ地方と（ロ）ガリヤ地方で、第二回ポエニ戰役の後に於てしたのは（ハ）シリヤ地方と（ニ）マケドニヤ、第三回ポエニ戰役中及びその後に於てしたのは（ホ）ギリシヤと（ヘ）ペルガモンとであつた。

（イ）イリリヤ地方は、今のダルマチヤ地方の謂で、當時海賊國あり、女王テウタを戴き、その沿岸に來れるギリシヤ・イタリヤの商人を害し、又遠くイタリヤのアドリヤ海岸を侵し、アドリヤ海の安寧を妨げるもの久しかつた。ローマは、第一回ポエニ戰役の後、この地方を平げて、この患を絶つた。時に紀元前二三〇である。

（ロ）ガリヤ地方とは、ポー河流域の謂である。ガリヤ人は、從來屢々ローマを困しめ（最も有名なるはガリヤ王ブレンヌスが紀元前三九〇にローマを攻めたことである）たが、第一ポエニ戰役後、ローマの將フラミニウスは、大にガリヤ人を擊退して、その地にローマ人を移植した。時に紀元前二二三年である。

（ハ）シリヤ地方では、王アンティオコス三世が、カルタゴのハンニバルを、第二回ポエニ戰役に援けることを約したのに原因して、ローマと隙を生じた。ハンニバルは、戰敗の後、逃れてその國に客たり、屢々ローマと戰つて、紀元前一九〇マグネ

シャに敗れ、小アジヤ沿岸を、タウルス連山に至るまで、ローマに割讓するを約し、ローマは此に一縣を置いて治めた。

(ニ)マケドニヤは、ハンニバルを援けることを約したので、ローマと隙あり、紀元前二一五以來、前後三回ローマと爭つたが、紀元前一六八その王ペルゼウス、ローマのエーミリウス＝パウルスに、ピドナの夜戰に破られて、ローマの領となつた。

(ホ)ギリシヤは、當時アカイヤ同盟で結合せられてあつたが、紀元前一四七以來ローマと戰ひ、翌年にはその覇者たるコリント、ローマの將メテルルスの爲に陷れられ、全市を廢墟と化し、國土はローマの一縣とせられた。

(ヘ)ペルガモンは、小アジヤ沿岸に國した。その王アタルスの死に際し、ローマはその地を收めて一縣とした。時に紀元前一三三である。

第三節　ケーザルの業

(一)貧富兩黨の爭　紀元前一四六は、ローマの史上、一轉期を劃する。この歲を以て、カルタゴ亡び、コリント亡び、ローマは、悉くその强敵を倒し得たけれども、その頃からして、次第に東方文化の病所に感染し、やゝ戰勝に醉へるの感があつた。斯くて、社會上には、貧富の懸隔益々甚しく、(イ)グラックス兄弟は起つてこれが改革に着手したが、共に失敗して、相ついで仆れてからは、梟雄並び起り、或は貧者に黨し、或は富者に與して、興望を一身に收めて、その野心を逞うせんとするものを生じた。(ロ)マリウスとスルラ(ハ)ポンペイウスとケーザルの對抗の如きは、その結果である。

(イ)第三回ポエニ戰役以後、ローマには、富者(オプティマテス)と貧者(ポプラレス)との對照で農民は離散し、豪族は土地を兼併する有樣であつた。兄ティベリウス＝センプロニウス＝グラックスは、起つてリキニウス法を回復し、更にその抱負を行はんとして、護民官に再選せられむことを爭つて、紀元前一三三富民黨に殺され、後十年にして、弟カイウス＝センプロニウス＝グラックスは、貧民に無代で穀物を分

興せんと欲し、市民權を擴張せんと欲して、富民黨に害された(紀元前一二一)。

(ロ)グラックス兄弟の改革以來、武力を以て事を爭ふの端を開いたが、マリウスは、貧民黨に勢力を得て起つた。彼が名を成したのは、ユグルタ戰役(紀元前一〇九—一〇五)に因る。ユグルタは、ヌミディヤの僭主で、克くローマの高官に贈賄して、その地位を保つた。ローマの諸將常にこれを伐つ能はず、國人これを憾とした。然るにマリウス擧げられてコンスルとなるや、忽ちにこれを平げた。次に紀元前一一三以來、北狄キンブリ・テウトニの侵寇するに當り、ローマ諸將これを防ぐものなかつたのに、マリウスの出づるや、エース(南フランス)に於てテウトニを(紀元前一〇二)ヴェルチェリ(北イタリヤ)に於てキンブリを(紀元前一〇一)破つてこれを攘つた。かくて勢力を得たマリウスは、貧民黨に推されて、屢々コンスルと爲り、グラックス等の改革案を行はむとしたから、富民黨は、スルラを推して、これに對抗した。當時小アジヤのポントゥス王ミトラダテス六世、小アジヤを統一し、アジヤ縣居住のローマ人を害し、ローマ征討の師を出すに際し、富民黨勝を得て、スルラを以て將軍たらしめた。スルラその兵を擁して、マリウス黨をローマから逐ひ、四年の後、ミトラダテスを降して凱旋した(紀元前八四)。マリウスは、スルラの不在に乘じて、その勢を恢復したが、やがて死んだので、スルラ今やマリウスの殘黨を掃滅し、庶政を改革し、紀元前七八その死に至るまで勢があつた。

(ハ)ポンペイウスは、もとスルラの裨將であつて、マリウスの殘黨をイスパニヤに討つて名を擧げ(紀元前七一)、歸つて後、鬪者スパルタクスの亂(紀元前七三—七一)を平げ、更に海賊を平げ(紀元前七八—六七)次第に盛名を得た。時にミトラダテスの更に叛くあり(紀元前六六—六三)往きてこれを殺し、シリヤを平げ、紀元前六一を以て、ローマに凱旋した。ユリウス＝ケーザルは、彼の盛名を利用せんと欲し、ポンペイウスがその戰功にも拘はらず、當時の政府に用ゐられざるを見て、これと結托した。ケーザルは、名門出身(マリウスの妻の姪)なれども、夙くから貧民に味方し、私財を投じて廣く士人と交りを結び、債を負ふもの數十萬なるに及び、出でゝイスパニヤの理財官となり、悉く己が債務を果し、紀元前六〇を以て、ローマに歸つたものである。

(二)第一回三頭政治　共和政腐敗して梟雄顯はれ、梟雄陶汰せられて、三頭政治と爲つた。第一回三頭政治は、紀元前六〇に結ばれ(イ)三頭相結托して、ローマの天下を分ち領し、(ロ)ガリヤに於けるケーザルの威名獨り貴きを以て(ハ)ポンペイウスこれを嫉みて、ケーザルと爭ひ、天下は巨人ケーザルの手に歸した。

(イ)三頭(トリウムビリ)とは、ケーザル・ポンペイウス・クラッススで、各特色があつた。ケーザルは政治家、ポンペイウスは軍人、クラッススは資本家である。以て其三頭政治に於ける位置も、略々推察し得られる。三頭は、天下を三分して、各々その一を保つの政策に出で、ポンペイウスは首都に留まり、クラッススは東方に、ケーザルはガリヤに向ふことゝした。

(ロ)ケーザルの、ガリヤに總督であつたのは、紀元前五八—五一の八年間で、その間ゲルマニヤ人の酋長アリオヴィストを破つて、ライン河を渡り、またイギリス海峽を踰えて、ブリタニヤの島に、ローマの武威を示し、またヴェルキンゲトリクスを討つて、境をゲルマニヤ方面に拓くなど、武功をあげると同時に、ガリヤ地方に葡萄の栽培を敎へて產業を興し、ローマ文化の餘澤に潤はしめて、功績著るしかつた。

その間前五六に、ルッカに會して、再び天下三分を約したが、ポンペイウスの妻であつたケーザルの女が死んでから、兩者の交漸く疎く、クラッススまたパルティヤ人と戰つて、紀元前五三カレー(メソポタミヤ)に死し、三頭の一角崩るゝなどの變遷あり、ポンペイウス漸くケーザルの盛名を忌み、元老院と結んで、ケーザル三度重任を求むるを拒ましめた。

(ハ)ローマに於ける狀勢は、ガリヤに在るケーザルの夙に探知せるとこでろあつたから、紀元前四九ケーザルは、意を決してルビコン河(ガリヤとローマ領との境を爲す)を渡り、急にローマを襲つて、ポンペイウスを破り、逃ぐるを追つて、テサリヤのファルサリヤ(前四八)に、ポンペイウスを擊破し、ポンペイウスは、逃れてエヂプトに入り、國人に殺された。ケーザル追躡してエヂプトに到り、クレオパトラを以て、エヂプト女王と爲し、その地を平げ、小アジアのゼラ(前四七)に於て、ポントゥスのミトラダテスの子ファルナケスを破つて、一旦ローマに還り、更にポンペイウスの餘黨を、アフリカ、タプススの勝利前四六)イスパニヤ(ムンダの勝利前四五)に討ち、紀元前四五を以て、ローマに凱旋して、獨裁政治を行つた。

ケーザルがルビコン河を渡るとき、アレヤ、エスト、ヤクタ（賽は投げられた）と云つたのは有名な辭として傳へられ、「ルビコンを渡る」といふ詞とともに、意を決して事にあたるの義に用ゐられる。

(三) ケーザルの事蹟

ケーザル(イ)一身に政治兵馬の大權を占め、庶政改革の緒に就かんとするに當り、共和政維持に熱心なるものゝ爲め、中道にして兇手に仆れた。彼は(ロ)數學に長じ(ハ)文學に通じ(ニ)土木に精しく、その征戰の功とゝもに、一世に超越したる大人物であつた。

(イ)ケーザルは、インペラトールとして、兵馬の權を占め、終身のディクタトールとして、政治の大權を統べ、唯王冠を用ゐなかつたのみで、實際は王の如く、元老院も議院も、唯員に備はるに過ぎなかつた。かくの如きは、共和政の熱愛者の、能く忍ぶところに非ず、ブルトゥス・カシウスの如きの徒、相結んで紀元前四四年三月十五日ケーザルを議事堂に刺した。ケーザル壽を享くる五十六であつた。

(ロ)彼が數學に長じたるの一例は、その曆法改正に於て見ることが出來る。彼のエヂプトに至るやその發達せる曆法を得て、ローマ慣行のものを革めた。もとローマは、大陰曆を奉じ、一年を三百五十五日と爲し、二年毎に二十二乃至二十三日の閏日を置いたが、ケーザルの時約九十日の狂ひを生じたので、ケーザルは建都紀元七〇八年即ち紀元前四六年を以て、特に四百四十四日と爲して、これを調節し、爾後は平年を三百六十五日とし、且つ四年毎に一日の閏日を設くるの簡便なるに從つた。これをユリウス曆と稱し、學者ソーシゲネスの盡力によると云ふ。同時に毎月の日數を變更し、月名をも改稱した。

舊曆		新曆	
1 マルティウス	三一日（軍神マールスの月）	III 三一日（同名）	
2 アプリリス	二九日（木の芽月）	IV 三〇日（同名）	
3 マーユス	三一日（春神マイヤの月）	V 三一日（同名）	
4 ユニウス	二九日（女神ユーノーの月）	VI 三〇日（同名）	
5 クインティリス	三一日（第五月）	VII 三一日ユリウス（ケーザルに因む）	
6 セクスティリス	二九日（第六月）	VIII 三一日アウグストゥス（オクダヴィヤヌスに因む）	
7 セプテンベル	二九日（第七月）	IX 三〇日（同名）	
8 オクトーベル	三一日（第八月）	X 三一日（同名）	
9 ノーヴェンベル	二九日（第九月）	XI 三〇日（同名）	

10 デケンベル　二九日(第十月)　VII 三一日(同名)
11 ヤヌアリウス　二九日(門戸の神ヤーヌスの月)I 三一日(同名)
12 フェブルアリウス　二七日(祓ひの神事の月)　II 二八若くは二九日(同名)

そのヤヌアリウス一日を以て年を始めたのは、從來この日を以て、コンスルに就職するの慣例あるを以てである。舊曆の第六月をアウグストゥスの月と爲し、三十一日と爲したのは、オクタヴィヤヌスの意に出で、ケーザル以後の事である。ローマでは、一月を三期に分ち、初をカレンダエ、中をノナエ、終をイデスと稱した。三・五・七・十の四個月に於てはノナエは七日、イデスは十五日其他の月では五日と十三日とに當る。此三區分を基點として、逆に日數を算するが故に、イデス以後の日は翌月のカレンダエ前幾日と呼ばれるのである。ケーザルの刺されたのは三月のイデスである。

(八)ケーザルの文學に通せしことは、前述ゼラの戰捷を報ずるに當り、我來(ヴェニ)我觀(ヴィディ)我勝(ヴィキ)の三語を以てし、四字綴りの、何れもヴィーを以て初まれる精練の句を以てして、簡明に當時の情況を躍如たらしめた手腕にても知るべく、またガリヤ征伐記の文章が、古典として取扱はるゝを以ても、知るべきである。

(二)ケーザルは、首都ローマに壯大なるフォールム＝ユリウムを建設したのをはじめとして、首都附近の沼澤地を埋め立て、ティーベル河口のオスチヤ港を改築し、コリントの地峽を穿たんとの計畫をも立てゝ居た。

(四)ケーザル死後の天下　ケーザルの死後(イ)アントニウスは、オクタヴィヤヌスとともに、レピドゥスを加へて(ロ)第二回三頭政治を作つたが(ハ)兩者の衝突は、アクティウムの決戰と爲り、遂に天下はオクタヴィヤヌスの手に統一せられた。

(イ)マルクス＝アントニウスは、ケーザルの友である。ケーザルの葬儀に臨んで、その遺言狀を利用して、その遺德を頌し、その演說は、(シェークスピーヤのジュリヤスシーザー中に美辭化せられて有名となつてゐる)國人を動かし、ブルトゥス一派の共和政維持黨を逐はしめ、自らディクタトルと爲つた。オクタヴィヤヌスはケーザルの妹の外孫で、遺言狀によつて、ケーザルの養嗣子となつた。當時齡まだ弱冠の青年たるに過ぎなかつたが、初めアントニウスの野心を看破して、元老院と結托して、これをローマの外に逐ひ、アントニウスは、ガリヤ一部の將レピドゥスによつた。既にして、オクタヴィヤヌス亦元老院の容るゝところとならずして離れ、アントニウス・レピドゥスと結托するに至つた。

(ロ)第二回三頭政治は、斯くて此三者間に紀元前四三を以て行はれ、三人協力してブルトゥスの徒をフィリピに破つて死せしめ(紀元前四二)ブリンディシに會して、天下三分の事を定め、オクタヴィヤヌは西を、アントニウスは東を、レピドゥスはアフリカを領することゝした。

(ハ)既にして、レピドゥスはオクタヴィヤヌスに排され、アントニウスはエヂプトの妖女王クレオパトラの色に惑溺して、妻オクタヴィヤ(オクタヴィヤヌスの姉)を離婚して、兩頭和がず。紀元前三一年九月二日オクタヴィヤヌスは、ギリシヤの西岸アクティウム岬附近の海戰に於て、アントニウスとクレオパトラの聯合艦隊を破り、逃ぐるを追うて、エヂプトに至り、アントニウスは害され、クレオパトラは自殺し、エヂプトは、ローマの一縣となつた。

第四節　帝政の盛期

(一)アウグストゥスの治績　紀元前二七オクタヴィヤヌス凱旋してローマに入る。史家此の時以後を以てローマの帝政時代と爲す。既に天下を一統し、政治兵馬の大權を一身に集むると雖も、ケーザルの事に鑑み、つとめて抑遜して名を避け、實を取るの策に出でたから、國民愈々これを慕ひ、尊號を上つて(イ)アウグストゥスと云つた。内治に於ては(ロ)行政組織を定め(ハ)學藝の奬勵(ニ)遊民の救助を行ひ、外政に於ては(ホ)ゲルマニヤに境を拓いたが(ヘ)トイトブルグに敗れて後は、誡めて兵を用ゐしめなかつた。

(イ)アウグストゥスとは莊嚴の義で、何等官職に關係なき稱號である。爾來オクタヴィヤヌスと呼ばずして、アウグストゥスとのみ稱するに至つた。その他にプリンケプス・ポンティフェクス＝マクシムス・インペラトール等の諸要職を兼ねたれば、皇帝といふ號こそなけれ、事實は皇帝であつた。

(ロ)行政組織の改定は、先づ國都より始め、これを十四區(レギオネス)に分ち、市長・

近衛都督警視總監穀物分與官以下の諸官を置いて、行政の事に當らしめ、國都以外のイタリヤを十一行政區(レギオネス)に分つて、各分掌するところを定め、縣を二種に大別して、元老院がその長官を命じ兵力なきもの(十二)と、皇帝が命じ兵力あるもの(十二)とにした。

(ハ)學術の奬勵は、名相メーケナスの翼賛與つて尤も力あつた。メーケナスは、エトルリヤの出身で、その地方は早くギリシヤ文化を移して、半島文化の基礎を置いたところであるから、由來するところがある。かくてアウグストゥス時代の學藝は、ギリシヤのペリクレス時代のそれに比して、ローマ學藝の黄金時代と稱せられる。

(ニ)アウグストゥスは、恩賚を以て市民を撫で、大に土木を起して、業を遊民に授け、橋梁港泊上下水道殿堂浴場興行場圖書館を設けて、主として國都の裝飾をなし、都民を喜ばしむることにつとめた。

(ホ)アウグストゥスは、ティベリウス・ドルスス兩將軍を遣はして、北方の蠻夷ゲルマニを征せしめた。ティベリウスは、ドナウ河方面に向ひ、その南岸の諸種族を平定して、三個の縣を建てた。ノリクム(カリンティヤ・スティリヤ)パンノニヤ(ホンガリヤ)モエシヤ(ブルガリヤ・セルビヤ・ボスニヤ)がそれである。ドルススは、ライン河以東の諸種族と戰つたが、紀元九年に死し、ティベリウス代つてその地を平げ、ライン河よりエルベ河に至るまで、ローマの威を示した。

(ヘ)ティベリウス駐まること長からず、ワルスこれに代るに及びて、ゲルマニヤ族大に叛き、紀元九年その酋ヘルマンなるものトイトブルグの森(ドイツの西部)に於て、ローマ軍を全敗せしめた。爾來アウグストゥスは、北夷を事とするを止め、ライン河よりドナウ河に連亘せる長城(リメス)を以て、これを防ぐの策に出でた。同時に、東方のパルティヤとの爭をも止めて、エウフラテス河を以て境とするを約した。かくてアウグストゥス時代ローマ帝國の版圖は、東小アジヤの東境より、西大西洋に至り、北、北海より南サハラに達した。

(二)帝政の最盛期　アウグストゥスより、マルクス＝アウレリウスに至るまで(前二七―紀元一八〇)を、帝政の最盛期とする。その間帝位に上つたもの十五而して特に

その事蹟の語るべきものは(イ)ネロ(ロ)ヴェスパジヤヌス(ハ)トラヤヌス(ニ)ハドリヤヌス(ホ)マルクス＝アウレリウスである。

(イ)ネロ帝(五四―六八)は第五代の皇帝である。帝は初世に於て愼んだが、既にしてその師セネカを殺してから、暴政を以て民を苦しめた。六四ローマに大火あり、都人以て帝が意の儘にローマ都を再建せんと欲して、火を放つたものと爲した。當時キリスト教徒漸くローマ都に入り來つてゐた。帝即ち罪を彼等に課して、大に殺戮を行つた。これをローマ領内キリスト教徒迫害の初めとする。ネロの暴政漸く甚しいので、卽ち六八ガリヤ・イスパニヤ軍その將ガルバを擁して帝と爲し、ローマに入つてネロを廢し、ネロ逃れて自殺した。ケーザル家こゝに絶え、爾後數年は諸將互に立つを爭つた。

(ロ)ヴェスパジヤヌス帝(六九―七九)は、東方及シリヤ軍隊の擁立するところとなつた。帝の時子ティトゥスを遣はして、イェルサレムを陷れ、ユダヤ人數千を捕へてローマに致した(七〇)、その記念の凱旋門は、ローマに現存する。ユダヤから分捕つた七燈を嵌めてある。帝はまたローマに大演伎場コリセウムを建てた。周圍五二四メートル、高五〇メートル、中に長さ七七メートル、幅七メートルの楕圓狀の演伎壇あり、觀客五萬人を容るゝことが出來る。用材はティボリのトラベルティン大理石である。

(ハ)トラヤヌス帝(九八―一一七)は、五善帝の一である。ヴェスパジヤヌスにつぎティトゥス(七九卽位ヴェスヴィオ噴火ポンペイ・ヘラクレネウム埋沒の事があつた)ドミティヤヌス(暴政を以て聞えフラヴィウス家絶ゆ)つぎ立つたが、九八ネルバ帝立つてから五代、悉く賢帝の名があつた、トラヤヌスはその第二である。帝はイスパニヤ出身である。ローマ人以外で、帝となつたのは彼に始まる。帝卽位以前ゲルマニヤ地方に將軍であつて、卽位の後ドナウ河外にダキヤ人をうち、數年にしてこれを服し、屯田兵を置いた。今のロマーニヤ・トランシルヴニヤ等の地域である。次いでパルティヤ人と戰ひ、境をメソポタミヤ・アルメニヤに擴げた。ローマの領域は、帝の時を以て最大と爲し、北はスコットランドより、南はサハラ沙漠に及び、西は大西洋から、東はティグリス河の彼岸に達した。帝はその全盛の力を以て、首都を飾るにフォールム＝トラヤニーその他の公共建築物を以てした。

(二)ハドリヤヌス帝(一一七—一三八)は、トラヤヌス帝につぎて立つた。帝は東境の守り難きを思つて、エウフラテス以東の地を棄て、國内を巡狩して觀察し、首都に留まること尠かつた。帝の時、ローマは、首都と地方と全く渾融して、世界的國家を爲した。帝また建築術に通じ、その墓は今のサンアンゼロ城として、ティベル河右岸に存する。

(ホ)マルクス＝アウレリウス帝(一六七—一八〇)は、五善帝の最後である。帝また哲學者として名あり、その著冥想錄廣く世に行はれる(邦譯數種あり)。名君なれども、邊境漸く事繁く、東にはパルティヤ、北にはゲルマニヤ人の一派マルコマンニ等あつて、帝の世を終るまで鎭まらなかつた。帝の使節と稱するもの、初めて支那に通商を求めたことは、東西交通史上注意すべきことである。

(三)キリスト教の西傳　(イ)キリスト教の、ローマ帝國に入つて、漸くその勢を得たのは、この帝政最盛期に在つた。ギリシヤ文明とローマ文明と、漸く融合せるに當り、此にキリスト教と云ふ、新要素を混ふるに至つたのは、特に注意を要する。

(イ)イエスは、紀元前四頃、ベテレヘムに生れ、父はナザレの匠人ジョセフにして、母をマリヤと云つた。三十歳の頃、自らキリストと稱し、ユダヤ教を革めて、神の愛なることを說いた。ユダヤ教は、ヘブライ人の宗教で、唯一神イエホヴを奉ずることは、前に述べた。その國、紀元前五八六にバビロニヤに亡ぼされて後は、望をメッシヤに維いだ。謂へらく、神の寵兒たる彼等は、神の使としてのメッシヤの出現を以て、その古昔の盛時にかへることが出來ると。この說の信ぜられてから、國人の風俗頽廢して、自暴自棄に流れて、獨り自ら尊うするの風を生じた。イエスこの有樣を見て、自らメッシヤと稱し、この狀態を救はんと志した。彼の見解によれば、從來ユダヤ人の信ずるが如く、神は恐るべきものに非ずして、愛である、ユダヤ人のみの神に非ずして、世界の神である。その神の王國と稱するは、地上にあるにあらずして、天上に在るものであると云ふ。その說くところ、ユダヤ人の以て治安妨害と爲すところとなり、紀元三三磔刑に處せられたが、その弟子卽ち使徒は熱心にその教を弘めた。當時ローマ帝國漸く廣大で、世界主義行はれ、皇帝の威漸く强く、皇帝崇拜の風を行つて、在來の宗教に代へんとした。イエスの所說

は、この傾向に適合せるものであり、使徒パウロ、巧にギリシャ哲學を以て、その教理の基を作り、使徒ペテロ、熱信を以て、布教するを以て稍々世に行はるゝに至つた。しかしローマ初代の皇帝は、これを忌みて、迫害しきりに行はれた。イエスの事蹟と、その教とは、新約聖書につきて知るべく、ネロの迫害の狀況は、シェンキェヴィチの「何處へ行く」(邦譯數種ある)で、廣く世に傳へられて居る。

第五節　帝國の衰弱

(一)衰弱の原因　アウレリウス帝以後、ローマ帝國は、次第に衰弱し(イ)外には東隣に強國の起るあり(ロ)內には軍隊の跋扈するありて大帝國分崩の端を爲した。

(イ)東隣の強國とは、パルティヤに代つた、サヽン朝のペルシヤである。サヽン朝は、二二六にサヽンの孫アルタフシル(アケメネス朝の子孫と稱す)が、ホルムズの役に勝つて起したもので、子シヤプールの時、昔時のペルシヤ領恢復の志あり、二五八以來、屢ローマと爭ひ、アンティオキヤまで兵を進めた。爾來ローマ東方の患を爲す。

ローマ領とペルシヤ領との間、シリヤの砂漠中に、パルミラなる國があり、東方貿易の衝にあたつて、國榮えた。王ガデナトウス死後妃ゼノビヤ勇悍を以て名あり、ローマ皇帝アウレリヤヌスの征するところとなつた。

(ロ)軍隊の跋扈とはプレトリヤニ兵のことを云ふ。彼等は、常に皇帝を廢立し、帝は兵士の意を迎ふるに非れば、其の位を保つことが出來なかつた。一八〇コ

ンモドゥスの立つてから後、三九五に東西兩帝國に分割せらるゝまでの諸帝は、兵士の擁立によらざるものはなかつた。

(二)ディオクレティヤヌスの分治　二八四ディオクレティヤヌスの立つに及び國家多事、ローマ都に在つて、全帝國を統治するの難きを思ひ、分治の制を立てゝ(イ)アウグストゥスと(ロ)ケーザルとを設けた。

(イ)アウグストゥスとは、ローマ帝國を二分して、その一を治める職名で、一は東方を治め、小アジヤのマルモラ海岸のニコメディヤに都し、帝自らこれに當り、他はアフリカ・イタリヤを治め、ミラノに都し、マクシミヤヌスをして、これに當らしめた。

(ロ)ケーザルとは、アウグストゥス所領の一部を治める職名で、東にはガレリウス、西にはコンスタンティウスあり、共に僻遠の地にあつて事にあたる。斯くて、事實上、ローマの天下は、四分せられたのである。

(三)コンスタンティヌス帝の統一　ディオクレティヤヌス帝の死後(三〇五)この分治も圓滑に行はれず、爲めに内亂を起したが、三二四コンスタンティヌスこれを平定して、天下復た一統した。帝の事蹟は(イ)遷都(ロ)キリスト教公認(ハ)ニケーヤ宗教會議を數ふべきである。

(イ)帝は當時東方多事なるに、國都のローマにあるの不便、商業上ローマの中心たるを失へる、新宗教信奉上の便宜、などよりして、都をビザンティウムに遷した。これを新ローマとも、又帝の名に因んでコンスタンティノポリスとも稱した。時に三三〇である。これよりして、ローマ帝國の東方化盛に行はるゝに至つた。

(ロ)帝の天下を爭ふや三一二ミルヴィウス橋畔(ローマ北方)の戰に、神佑を得て勝つて以來、篤くキリスト教を信じ、以て宮廷の宗教と爲した。キリスト教公認此に初まる。日曜安息日の勵行もこの時からの事とせられる(三一三ミランの勅令)。

(ハ)當時キリスト教行はれて、やゝ年處を經たれば、異説もあらはれ、教會内の紛議絶えず、中にも最も激しかつたのは、アタナシウスとアリウスとの爭論であつた。後者はキリストを以て、父たる神と同一と視ざる説で、前者は三位一體説で

ある。三二五帝はビティニヤのニケーヤに宗教會議を開いて、三位一體説を以て正教とし、アリウス派の説を、異端と決定した。爾來アリウス派は、ローマ領を逐はれ、盛にゲルマニヤ人の間に、其説を以て教を弘めた。ゲルマニヤ人のローマを敵とする、一には此に存せりと云ふべきである。

コンスタンティヌス以後諸帝は、異教と異端とを排斥したがユリヤヌス帝（三六一―三六三）は異教を擇び、ヴレンス帝（三六四――三七八）は異端を容れた。メレヂコフスキーの「背教者ヂウリアノ」イブセンの「皇帝とガラリヤ人」はユリヤヌスの事を書いたものである。共に邦譯がある。

（四）テオドシウス帝の分治　コンスタンティヌス帝の後、天下復亂れて、テオドシウス帝の時に至つて一統せられた。帝は、ローマ帝國の到底一人を以て治むべからざるを覺り、その死に臨んで、二子に授くるに、各々その一半を以てし、かくてローマ帝國は永久に（イ）西帝國と（ロ）東帝國とに二分した。時に三九五である。

（イ）西帝國はホノリウス之をうけ、スティリコこれに相とし、初めはローマに都したが、後ラヴェンナにうつゝた。四七六に亡びた。

（ロ）東帝國はアルカディウス之をうけ、ルフィヌスこれに相とし、コンスタンティノープルに都し、一四五三に亡んだ。一名をギリシヤ帝國と稱するほどにも、東方化、ギリシヤ化した。

東西兩帝國の境界線は、ボッケ＝ディ＝カッタロから發して、ドリナ及サウ兩河を結びつくる線を以てした。

第六節　ローマ文明の特色

(一)國民性　ローマ人は(イ)實際的意志的で、ギリシャ人の空想的感情的であつたのと相反する。故に文藝・哲學は、其長ずるところに非らずして、政治・法律に秀でた。その(ロ)家族制は、推擴められて、その國家を爲したものと見るべきである。

(イ)實際的意志的なりしとは多く說明を要せず、國家あるを知りて、個人あるを知らざりし有樣は、我古武士のそれに似たる例に多く見られる。コリオラヌス・キンキンナトゥス・ムキウスケヴォラ・ホラティウスコクレス・カミルス・レグルスの如き事蹟につきて知るべきである。

ローマの家族制は、家長即ち父及母、子及その妻子並に未婚の女子より成る。家長は、家族に對して絕對權を有し、氏神を祀る等に於ては、宗敎上の最高權を有する。父死しては、子は自由を享け、各別に家長となる。家族の外に、郎黨及び奴隸あつて屬し、郎黨は保護を受ける代りに、忠勤と奉仕との義務があり、奴隸は雜役に服し、財產の一部と看做される。

その氏族を重んずることは、その氏名を名乘るに、自分の名、姓、苗字を以てし、もし他家より養はれたものは、更にその實家の姓を以てしたので分る。例へば、大スキピオの如き、プブリウス(名)コルネリウス(姓)スキピオ(苗字)と稱し、小スキピオは、プブリウス(名)コルネリウス(姓)スキピオ(苗字)エーミリヤヌス(實家の姓)と稱するが如きである。

(二)文物　ローマ人は(イ)宗敎は、萬有神敎であつたのを、後に至つて、ギリシャの神々を輸入して、その神性を變化したものである。その(ロ)哲學(ハ)文藝孰れもギリシヤに模倣したもので、國民性に應じて、多少の改造を施したとは雖ども、終にギリシヤを凌駕することは出來なかつた。

(イ)宗敎に於て、家族の氏神とするところは、その祖先の靈で、祖靈ラーレスと家靈ペナーテスとがある。國家公共の神は、所謂萬有神で、これをギリシャ諸神と對比すれば、下の如し。

1ユピテル	ゼウス	天神
2ユーノー	ヘラ	天妃(女)
3ネプツヌス	ポセイドン	海神

4 アポロ ‖ アポロン　日神
5 マールス ‖ アレス　軍神
6 ヴルカーヌス ‖ ヘフェーストス　火神
7 メルクーリウス ‖ ヘルメス　使神
8 ミネルヴ ‖ アテネ　藝神(女)
9 ディヤナ ‖ アルテミス　獵神
10 ヴェヌス ‖ アフロディテ　愛神(女)
11 ヴェスタ ‖ ヘスティヤ　竈神(女)
12 ケレス ‖ デメーテル　穀神(女)

その他ローマ固有の神ヤーヌスあり、萠芽發端の神とせられ、後世ギリシヤ人を經て、東方の酒神バックス即ちディオニススの輸入せらるゝもあつた。

哲學も亦、ギリシヤの輸入で、彼のストア哲學、尤も國民性に適應し、前にはセネカ・エピクテトゥスあり、後にはマルクス＝アウレリウスがあつた。何れもその著書の邦譯がある。

文藝も亦、ギリシヤの模倣に過ぎないけれども(い)キケロ時代から漸く文運興り、アウグストゥス時代には(ろ)ホラティウス(は)ヴィルギリウス(に)オヴィディウスの如き詩人(ほ)リヴィウスの如き歴史家出で、ラテン文學の黄金時代を爲し、次いで、銀時代に至つては(へ)タキトゥスの如き歴史家(と)プリニウスの如き博物學者を出した。

(い)キケロ(前一〇六―四三)は、ローマ一流の辯舌家であつた。ローマの政界に活動し、六三擧げられてコンスルと爲り、ケーザル・ポンペイウスの爭に際して、盛にケーザルを攻擊し、後ケーザルから財政上の保助を得て、之を止め、專ら文學に身を献じて、數種の著があつた。ケーザル死後、共和黨に投じ、オクタヴィヤヌス黨のために殺された。

(ろ)ホラティウス(前六五―八)貧なれども、教育に熱心なる父に監督せられて、教養を積み、メーケナスに識られ、宮廷詩人と爲り、アウグストゥスの天下を謳歌するの作を出した。

(は)ヴィルギリウス(前七〇―一九)メーケナスに勸められて、アクティウム戰後に成つたゲオルギカ、ローマの古史を述べたエネイード、田園を謠つたブコリカ何れも世に稱せられる。

(に)オヴィディウス(前四三―後一七)紀元八アウグストゥスの怒に觸れ、ドナウ河畔

のトミに流され、此に終る。その作品中古人の尤も稱したメデヤは今傳はらず、メタモルホーゼスはその傑作として知られる。

(ほ)リヴィウス(前五九―後一七)は、そのローマ史を以て知らる。全部一四二卷のうち今殘れるは、三五卷のみ、ローマ建國の傳說時代から、前九年ドルススの死に至る。

(へ)タキトゥス(五五―一二〇)ゲルマニヤ誌、年代記(アウグストゥスよりネロに至るを以て知らる。

(と)プリニウス(二三―七九)は、その自然誌を以て知らる。ヴェスヴィオ火山噴火に際し、蟄息して死んだ。養子プリニー(六二―一一四)亦その書翰を以て著はる。

プルタルクス(四六――一二〇)は、ギリシヤ出身で、ドミティヤヌス帝に重ぜられ、後鄕里ケーロネーヤに退いて、ローマ・ギリシヤ偉人の比較評傳四十六を書いて、後世に廣く愛讀せられた。

(三)土木

ローマの土木に於て特に云ふべきは、その(イ)軍用道路で(ロ)上下水道の布設(ハ)市場の設置よりして(ニ)公共建築物の如き、その遺址の存するもの亦尠からず。

(イ)ローマ人は、早く道路修築に於て長じた。その最も古きものは、前述のヴィヤ＝アピヤ及ヴィヤ＝ラティナで、紀元前三世紀に成つて、ローマより南方に通じた。次いでヴィヤ＝フラミニヤのガリヤに通ずるをはじめ、多くの道路をその領內に通じ、その構造亦見るべきものがあつた。

(ロ)上水道は、ローマ都の如き沼澤地方に於ては、最も必要とするところで、そのクラウディウスの水道の如きは、最も有名なるもの、全長四十五マイル內十マイルは高架である。その他トラヤヌス水道、ヴィゴ水道を初め、十數種を數へる。各地方にも亦これを設備した。南佛ニームスのポン＝ドゥ＝ガールの如き、尤も有名なものである。下水道に在つては、ローマのクロアカマクシマ尤も著名である。

(ハ)市場は、ローマ都をはじめ、ローマ人の都會には、到るところに設けられた。蓋しローマは都市道路狹隘で人口多きを以て、街頭諸處に市場即ち廣場を設け、

此處に相會して、商業其他の事を行ふの習慣であつた。フォールム＝ロマーヌム・フォール・ム＝トラヤーニー等尤も有名である。

（三）公共建築物の中にては

（い）コリシウム（即ちフラヴィウス家の圓戲場）を擧ぐ可きである。楕圓形、軸は二〇六メートルと一七四メートル、深九メートル、高五〇メートル、周圍五二四メートル、四階建、最上壁コリント式の壁柱には八〇の窓あり、第三階はコリント式、第二階はイオニヤ式、第一階はドーリヤ式で、各八〇の窓を有する。諸種の演技を行ひ、見物席は三部に別たれ、五萬人を收容することが出來る（七八頃の建造）。

（ろ）キルクスマクシスムは、アグリッパの時三三頃に出來、長六〇〇メートル幅一一〇メートル、長き兩側と短き圓き方とには見物席、短き他端は出發點、中央の臺をスピナと稱し、之を七回四頭立の馬車にて競走する。出發の合圖としては、官人スピナより手巾を投下する。スピナの角で衝突することが往々ある。見物席は三段十萬人を容る、。この競技はローマ都その他の大都に非ざれば見るを得ない、蟲負によつて青黨綠黨を生じ、公生活にも及ぼすことがあつた。

（は）浴場はローマのみでも九五二あつたと云ふ。その内有名なのはカラカラ帝（二七六）ので、ディオクレティヤヌス帝のの如きは、一時に三千人を收容出來た。その設備から云へば、浴場と云はんよりも、倶樂部の如きもので、ローマ人の入浴癖から出發して、英雄が人心を收攬するの具に供したのである。

（に）凱旋門は、ティトウス帝のは、ユダヤに勝つた記念として、ベンテリクスの大理石でつくり、戰利品たるイエルサレムの七燭臺を中央にはめこんだ。トラヤヌス帝のは白大理石三門である。ともに尤も著はれたものである。

（ほ）記念柱はドゥイリウス、トラヤヌス帝、コンスタンティヌス帝の等有名である。

（へ）パンテオン即ち萬神殿も亦有名である。紀元二世紀に、ハドリヤヌスの建つるところ。

△古代ローマ人の生活

衣　ローマの男子はトウニカとトガとを用ゐた。トウニカは、ギリシヤのヒートンの如きもので、その上にトガを着ける。トガは弓形の毛織反物で、その弦の長さは、身長の約三倍を寸法とする。その一端を左肩に投げかけて前に垂れ殘部は、體にまきつける。平時は、ヒマチオンの如く右腕にまきつけて、左手を自由にするが、戰時には右腕をあらはす。トガ＝プーラは、白色のもので、一般市民の服、トガ＝プレーテキスタは紫の緣取りのもので、十六歳までの男兒の服、十六歳になるとトガ＝ヴイリリスを着る。トガ＝ピクタは、繡あるもので、トウニカ＝パルマタと稱する金繡あるものとゝもに凱旋將軍・王者の服、ケーザルの時以來皇帝の服と定められた。女子もはじめはトウニカ・トガを用ゐたが、後にはトガを

やめて、パルラと稱する全身に纏ふものとストラと稱する裾に緣取りある長いトゥニカを用ゐた。冠り物は、男子に無く婦人は、リキニウム又はリカと稱する頭と肩を被ふショールの如きものを用ゐ、後世には、ギリシヤ人がヒマチオンを用ゐた如くパルラを用ゐるといふ風に次第にギリシヤ風になつた。履物は、ソレアエと稱する鞋、ソッキと稱する短靴を普通とし、祭典など公式には、カルケウスといふ、兩側に割目あり、前部に紐を有するものを用ゐた。

食。古代ローマ人は、その初期には、極めて質素な生活をしたが、後年ギリシヤ風の侵入するに及んで、次第に豪奢となり、特に晩餐は、數時間を要し、アントレー・デザート・デザートコースといふ順序で、六七皿の食事をとり、食器類の美を誇るの風があつた。そのシンポジウムと稱するは、所謂長夜の宴で、頽廢的氣分の漲つたものであつた。

住。はギリシヤのとほゞ同じものであつた。

イタリヤ半島の位置は、古代先進國に背いて、西方の未開國に面した。山川の形勢は、國外の發展に便で無く、國土の豐饒は、商工よりも農牧に適した。さればその發達は後れたが、併しその溫暖なる氣候は、屋外生活に導き、强健なる體軀、健全なる精神は、終に地中海の雄者たらしめた。さきにアレクサンドルによつて融合せられた東西の文明、世界的精神は、ケーザルによつて征服せられたローマの天下に漲つて、ローマの文明は、ローマの軍用道路に沿うて、ローマの植民地のある所に廣まり、ローマの法律は世界を支配するに至つた。

第五章　過渡時代

第一節　種族の大移動

(一)ゲルマン民族　ローマ帝國の北境にはゲルマン民族が、幾多の部落に別れて住んでゐた。これを大別して(イ)北ゲルマン族(ロ)東ゲルマン族(ハ)西ゲルマン族と爲すことが出來る。彼等は(ニ)宗教(ホ)社會組織(ヘ)民族性に於て共通するところがあつた。

(イ)北ゲルマン族　は、後章に述べるノルマンのことで、スカンディナヴィヤ半島に據つて、九世紀頃までは、世に出でなかつた。

(ロ)東ゲルマン族　は、バルト海の南からドイツの東並にロシヤ方面に住ひ、ゴート人と呼ばれ、その東ゴートは、ヴォルガ河以西ドン河の方面に、その西ゴートはドニエプル河畔に居つた。

(ハ)西ゲルマン族　は、北海の南、ライン・エルベ兩河の間に住んだもので、そのブルグンドは、オーデル河下流に、ヴンダルは、その上流に、ランゴバルドは、更にその

上流に、スエビはエルベ河東に、アングルは同河北に、サクスは同河口に、フランクはライン河東に居つた。

(ニ)宗教　天神ウォーダン崇拜で、妃をフリヤと云ひ、その子ドーナル即ちトールは雷神、ヂウは即ちティールで軍神である。天國はワルハラと云つて、アスガルドと稱する金色燦爛たる市に在ると傳へられ、戰死者の殿堂である。此に祀らるべき戰死者を撰擇せんがため、ワルキューレと稱する天女が天を飛びまはつて下界を瞰視する。その數は九つある。

ウォーダンは智の神としてローマのメルクリウスに、ティールは軍神としてそのマールスに、トール(ドンネル)は雷神としてそのユピテル(ヨーヴ)に、フリヤは美の神としてそのヴェーヌスに比べられる。これ等諸神を七値に配當して、その祭日としたのが、今日英佛獨各國の七値名である。

ラテン名	ドイツ名	イギリス名	フランス名	ヴンドルディー	金曜(美神の日)
ディエスヴェネリス	フライターグ	フライデー	ディエスヴェネリス	ヴンドルディー	金曜(美神の日)
ディエスヨーヴィス	ドンネルスターグ	サースデー	ディエスヨーヴィス	ヂウディー	木曜(雷神の日)
ディエスメルクリイイ	ミットウオッホ(ウォーダンスターグ)	ウェンヅデー	ディエスメルクリイイ	メルクルディー	水曜(智神の日)
ディエスマルティス	ディーンスターグ	チウスデー	ディエスマルティス	マールディー	火曜(軍神の日)

ディエスルナエ　ランディー　モンターグ　マンデー　月曜（月神の日）
ディエスソリス　ディマンシウ　ゾンターグ　サンデー　日曜（日神の日）
ディエスサトウルニー　サムディー　ザムスターグ　サターデー　土曜（土神の日）

（ホ）社會組織　自由民と不自由民とに別たれ、前者は貴族と平民とに、後者は奴隷と屬民とに別たれた。生業は農牧を主とした。國會があつて事を決し、自治と自由とを尊ぶ風があつた。

（ヘ）賭博と飲酒とは、彼等の惡癖缺點で、勇氣に富み戰を好むは、彼等の長所である

（二）フンの侵入　ゲルマン諸部の民が、所謂種族の大移動を爲すに至つたのは、三七五に（イ）フンがヴォルガ河を渡つて西したのに始まる。その爲めに、東ゴートは潰走し（ロ）西ゴートはドナウ河南のローマ領内に移り住むに至つた。フン王アティラは、長驅して（ハ）ガリヤに入らんとして成らず（ニ）更に轉じてイタリヤに入つたが、諭されて退き、次いで病を以て歿し、その帝國は瓦解した。

（イ）フンは、漢代にその北境から逐はれた匈奴で、久しくヴォルガ河東にゐたが、水草に缺乏するとゝもに、河を渡つて西したのである。

（ロ）西ゴートは、二十萬の男女相率ゐて、ドナウ河南のモエシヤ地方に移り、ローマの爲めに、蠻族を防ぐことを約して、帝國領内に住むことを許された。然るに、ローマ官吏は、彼等の避難民たるを見て、これに侮辱を加へたから、三七八彼等はアドリヤノプルに於て、ローマ軍を破り、帝ヴレンスは戰死するに至つた。が幸にして、帝テオドシウス嗣立してからは、よく平和を復し得た

（ハ）アティラは、五十萬の大衆を率ゐてガリヤに侵入せんと試みた。ローマの戍將アエティウスは、西ゴート・フランク等の援助を得て、これをカタラウヌム原頭（今フランス東境に近きシャーロン＝シュール＝マルヌ附近）に迎へ討つて、大にこれを擊退した。時に四五一年七月中のことであつた。

（ニ）アティラ一度師を退けたが、更に南してイタリヤを侵し、四五二ローマを屠らんとしたが、キリスト教會の大長老レオは、市民の爲めに諭して、これを退去せしめた。後間もなく、アティラは、ホンガリヤのトカイヤ附近のその本營で死し、部下

は離散して了つた。

トカイヤ附近のアティラの營に使したプリスクスはアティラの風貌を語つて「その胸廓は廣く、その頭は大に、その眼は小さく鋭く、その鼻は低く、その皮膚は日に燒けた無髯の男子で鐵製輪形の王冠をつけてゐた」と傳へてゐる。明かに東方人種たることが窺はれる。

(三)諸部の建國　種族移動の結果、ローマ境上の守備弛むだのに乘じ、ゲルマン諸部の民、入つてローマ領内に建國するものが多かつた。(イ)西ゴート王國は、その最先なるもので(ロ)ヴンダル王國これにつぎ(ハ)遂にオドワケル王國起つて、西ローマ帝國を亡ぼした(四七六)。その他(ニ)アングロサクソンのイングランドに於ける(ホ)フランクのフランスに於ける(ヘ)東ゴートのイタリヤに於けるが如く、王國の建設相ついだが(ト)ランゴバルドの北イタリヤに於ける建國を以て、種族移動は終はつものとせられる。

(イ)西ゴート王國(四一五―七一一)　その王アラーリヒの時、四〇一以來、西ローマを侵したが、賢相スティリコの爲めに擊退せられて、志を果さなかつた。スティリコ死後、四一〇、ローマを屠り、數日間これを荒掠し、更に南してアフリカに渡らんとして、南イタリヤのコゼンツァ附近に死んだ。ブゼントに葬られて、年は四十であつた。義弟アタウルフ嗣立したが、遂にローマに屬し、南ガリヤ及イスパニヤ北部に據つて國を建て、第三代テオドリヒは、カタラウスムにローマ軍に從つて戰死した。七一一國都トレド、サラセンの爲めに陷り、國亡びた。

(ロ)ヴンダル王國(四二九―五三四)　始め原住地を去つて、一時イスパニヤの南部に居つたが(アンダルーシヤといふ地名が殘る)ゴートに迫られてアフリカに移り、此にカルタゴの故地に都を奠めて、勢を地中海に擅にした。その初代の王をガイゼリク(ゲンゼリク)といふ。その四五五にローマ皇后エウドクシヤの招きによつて、ローマを荒掠した爲め、今もヴンダリズムの語が存してゐる。五三四東ローマのベリサリウスに亡ぼされた。

エウドクシヤは、ヴレンティニヤヌス三世の皇后であつたが、ペトロニウス＝マクシムス位を篡ふに及んで强ゐられて、その皇后とせられた。エウドクシヤは、その恨を報ぜんため、ガイゼリクを導いて、ローマに入らしめ、ヴンダル兵は十四日間そこに荒掠

を恣にした。

有名なる聖アウグスティヌスは、四三〇ヴンダル人のヒッポを圍めるうちに死んだのである。

（八）オドウケル王國四七六―四九三）　西ローマ帝國の傭兵長オドワケルの建てたもので、彼はもとゲルマン族のヘルレル部の出身である。蓋しローマでは、ヴンダルの荒掠以來、帝位は軍隊の傀儡と爲り、ゲルマン兵長リキメルなるもの、五年間に四帝を易置したほどであつた。彼の死後、同じくゲルマン兵長なるオレステスは、更に一歩を進めて、その子をケーザルの位に据えた。これが偶然にもローマの創立者とせらるゝロムルスと同名であつたので、アウグストゥルス即ち小アウグストゥスと呼ばれた。傭兵は、彼にイタリヤの土地の三分の一を求めて聽るされなかつた爲めに、オドワケルを推したのである。オドワケルは自らイタリヤ王と稱し、東ローマの制をうけた。かくて西ローマ帝國は亡びた。しかし此王國も、間もなく四九三に、東ゴートに亡ぼされた。

（九）アングロ・サイソン王國　アングル・サクス・ユートの三部の民は、北海の濱に住んでゐたが、後ブリタニヤの島に移つた。ブリタニヤは、ケーザルの時以來、ローマに屬し、その保護の下に繁榮したが、種族移動の事あつて以來、國家多難の故を以て、ローマの戍兵撤退せらるゝや、北境のスコト・ピクト等の苦しむるところとなつた。アングル等往いて、ブリトン人を助けて、スコト等を擊ち攘ひ、遂にその地に據つた（四四九）。彼等は最初七王國に別れ、東アングル（テームス河東）ノルトゥンブリヤ（ハンバー河北）はアングル人の、東・西・南の三セッキス（イングランドの南部及メルキヤ（セバーン河流域）はサクス人の、ケント（イングランドの東南隅）はユート人の據るところであつた。八二七に至り、西セッキス王エグベルト全島を統一して、イングランド王國と爲した。

當時のアングロサクソン人の生活を語るものは、十世紀にあつめられたベオウルフ物語である。

（十）フランク王國（四八六―七五一）　その王フロードウィヒ（クローヴィス）が、四八六に、ローマのガリヤ守將シャグリウスをソワソンに破つて建てたところで、もとサリ・リブアリの諸部に分れたのを、サリ部に統一せられたのであつた。フロード

ウィヒの子孫を、メロヴェス朝と云ひ、七五一にその宮宰カロルス家に代はられた。

(ヘ)東ゴート王國(四九三―五三六)　その王テオドリクの時、フンから獨立し、國民を擧げて、イタリヤに侵入し、オドワケル王國を亡ぼし、一時隆盛を極めたが、五三六東ローマの將ナルセスの爲めに亡ぼされた。

(ト)ランゴバルト王國(五六八―七七四)　その王アルボインの時、衆を率ゐて、イタリヤに侵入して國を建て、パヴィーヤに都し、特に北部イタリヤに勢力があつた。今ポー河の流域をロンバルディヤと呼ぶのは、その故地たるを示す。七七四フランクの爲めに亡ぼされた。

第二節　東ローマの中興

(一)ユスティニヤヌス帝　帝は(五二七)に即位し、東ローマを中興した。帝以前は(イ)政治及び宗教に於て、混亂の狀態であつたのが、漸く治まり帝の事蹟としては(ロ)法典の編纂(ハ)養蠶法の傳來を以て、內治の著るしきものと爲し(ニ)東はペルシヤと和し(ホ)西はヴングル・東ゴートを伐つて、勢を復したるを以て、外政上の著るしきものとする。

(イ)政治上に於ては、綠黨と青黨の爭が激しかつた。この兩黨は、その頃盛に士人の間に行はれたコンスタンティノプルの競馬の競技に發して、遂には互に朋黨を爲して、政權を爭つたのである。帝がその黨弊を矯めようとしたため、彼等は相結んで、五三二所謂ニカの亂を起したが、帝は將軍ベリサリウスをして、これを鎭壓せしめたので、爾來黨爭は止んだ。

宗教上に於ては、アンティオクの僧ネストリウスが唱へ出した、神とキリストとは、その性質を異にするとの說は、四三一のエフェソスの宗教會議で否認せられて、異端として、帝國の外に放逐せられたので

あつたが、帝はなほ一層正派の保護につとめ、ネストリウス派を迫害して、信仰の統一を保つた。

帝がコンスタンティノプルに、大教會堂ハーギヤソフィヤを建てゝ、今日に至るまでビザンツ式建築の標本としてのこれるは、有名なことである。

ネストリウス派は、アラビヤ方面に擴つては、カルディヤ派と云はれ、インドに入つてはトマス派と云はれ、支那に入りては唐代に景教と云はれた。

泰西文化史を達觀して、何人も驚嘆を禁じ能はざる摩訶不思議なる現象は、希臘羅馬の莊重典雅なるクラシック文化が亡びてより、北歐ゲルマン民族の峻峭豪快なるゴシック文化が大成するまで、約七百餘年に亘る不得要領なる中間期の間、特に傑出したる偉大なる建築の現はれざりし時に當り、東歐ビザンチウム帝國の首府コンスタンチノポリスの一角に、建築界の寂寞を破つて奇構妙想古今に絶し、豪華豐麗東西に冠たりと稱せらるゝ一大建築の出現したことである。即ちこの我がアヤソフィヤである。（中略）

ビザンチウム帝國創立以來二百年を經て、國運益隆盛に趣き、帝都の繁榮は、世界の誇であつた。この時の皇帝をユスチニヤヌスと云ふ。西紀五百三十二年都下に火災が起つて、由緒顯著なりしアヤソフィヤの寺院は灰燼となつた。夫はその屋根が、木造であつた爲であつた。皇帝は直ちに莊麗無比の大建築を再建せんとの勅願を發せられ、火災後六年、西紀五百三十七年の十二月二十七日終に之を成就した。この時皇帝は歡喜極まつて天を仰いで

「予は予に斯の偉大なる事業を遂行する光榮を與へられたる天帝に感謝す。あゝサロモよ、予は汝を凌駕せり」

と號呼された。

この光榮ある建築の設計者として任命された建築家はトラレスのアンテミオス及ミレトスのイシドロスの二人であつた。二人は協力して丹誠を挺んで、終に超凡なる考案を大成した。皇帝はその全領土に詔を下して、建築に要する貴重なる各種の材料を提供せしめた。一萬の職工は日夜使役されてよく働いた。皇帝は毎日必ず現場に行幸あり、親しく工事を指揮監督された。

西紀五百五十年既往數回の地震の爲に堂の頂の半球狀の屋蓋が破壞した。これは當初屋蓋の內部にモザイクを塡裝する事を急いで、假枠を餘り早く取り外した爲であつた。皇帝は早速その修繕を命じたが、是より先き二人の建築家は共に病歿したので、イシドロスの弟が兄の業を繼いで、終局まで盡瘁した。その結果建築の全高は初案よりも、更に二十尺を增加し、穹窿も栱も著しく補强された。併しこの改案が全體の威容の上に偉大なる効果を奏したことは洵に幸であつた。

アヤソフィヤが世界最美の建築の一として、名聲を博したのは、勿論建築家の拔群の技倆に由るのであるがこの建築家を起用し、激勵し、鞭韃した皇帝の英明と熱誠との

力が其根本であり、當時のビザンチウム帝國の富力、國民の宗教に對する信仰が其原因であつたのである。（伊東忠太氏「アヤソフィヤ」）

（ロ）ローマは、法律の尤も發達した國家であつた。されば、最初の成文法十二表法典以來、歷代發布したところの法律は、雜然として、これが解釋について、學者の說くところ亦一定せざるものが多かつた。是に於て、帝はトゥリボニヤヌスを委員長として、法典編纂の事にあたらしめ、五三四に至つて成つた。總稱してはローマ法典大成（コルプス＝ユーリス＝キビリス）と稱し、別ちては法律彙纂（コデキス）學說彙纂または會典（パンデクテー又はディゲスタ）法學提要（インスティトゥーティオネス）新勅法彙纂（ノヴェルラエ＝コンスティトゥティオネス）と爲した。然れば、ユスティニヤヌス法典は、所謂法典の外に學生の教科書をも兼ねたものであつたのである。一八〇四ナポレオン法典の出づるまで、歐洲大陸諸國を支配したのは、この法典であつた。

ローマの名高い法學者は、第二世紀中葉のガーイウス、第三世紀初頭のパピニヤーヌス及びパウルス、第三世紀中葉のウルピヤーヌスである。諸所に法律學校もあつた。女辯護士もあつた。ローマ法典は我學士會院發行の邦語譯のものがある。

女子の辯護士

昔ローマでは女子が辯護士業を營むのを公許したことがあつてホルテンシヤアマシヤなどゝ云ふ鏘々たる者もあつたとか。然るにアフラニヤと云ふ女子辯護人に何か醜行があつた爲めに忽ち女性辯護士禁止の說を惹き起し遂にテオドシウス帝をして其法典中に禁令を加へしむるに至つた。（穗積陳重氏法窓夜話）

（ハ）支那の絹は、早くギリシヤ・ローマ人の間に聞えてゐたが養蠶の法を知らないので、絹の價は、同量の黃金に比せられた程であつた。ユスティニヤヌス帝の時、東方から蠶種を齎らしたものがあつた。これから歐洲に養蠶の法が傳へられた。時に五五五であつたといふ。

（ニ）ペルシヤには、シャプール二世三七九死）イズデゲルドなどの明君出てたが、第六世紀にコバド出で、ベリサリウスと、ダラスに戰つてやぶれ、ホスロー一世と稱する君が立つて、國勢盛であつたから、ユスティニヤヌス帝もこれに敵することが出來ず、五五一年金二千六百ポンドと、五年間の休戰を約して、和して東境を靖んじた。（後年金は三萬にまされた）

ホスローは、ペルシヤの名君でアノーシヤルヴンと稱せられ、西にローマを侵したのみでなく、東はエフタルと聯合してトルコを攻め、バクトリヤを征し、南はアラビヤを討つてイエーメンを收めた。王はまた武功あるのみならず、文勳も著るしく、行政に、土木に、信仰に、文學に、傳ふべき事蹟をのこした。

(ホ)帝は、かねて西ローマ帝國領を恢復するの志があつて、先づ名將ベリサリウスを遣はして、ヴンダルのアフリカ王國を平定せしめ(五三四)次いでナルセスを遣はして、東ゴートのイタリヤ王國を征せしめ(五三六)將軍職をラヴェンナに置いて、これを鎮せしめた。

(二)レオ三世帝　ユスティニヤヌス帝の後、國威復び傾いたが、レオ三世帝の時に至り、國力やゝ復したから、國家統一を圖らむとて(イ)偶像破壞令を發したるに(ロ)ローマの大長老は、これに反對し、遂に(ハ)東西兩教會の分離を見るに至つた。

(イ)キリスト教は一神教で、偶像崇拜を禁止して來たが、言語の通じ難い蠻族の間、又は智識の發達しない人民の間に布教するにあたつては、繪畫などを用ゆることの利便を覺え、これを利用することその度を過ぎては、偶像崇拜と違はなくなつた。外部特に回教徒よりは、羊頭を掲げて狗肉を賣るものと誚られ、內部には志あるもの、往々にしてキリスト教を去るあるに至つた。是に於て、帝は七二六を以て偶像破壞を命じたのであつた。

(ロ)時にローマの大長老は、レオがアティラを諭して退去せしめて以來、西方に勢力あり、ローマ附近の民は、仰いで父即ちパッパと稱し來つた。而してその勢力の基づくところは、ゲルマニヤ地方の蠻人間に布教した爲めで、その布教には偶像を使用すること最も有効なるものがあり、且つ久しく皇帝の庇護に預らないので、自然獨立の姿になつて居た。而してレオが唱道したペテロ優越說(第一、キリストは使徒ペテロに天國の鍵を與へて、地上諸他使徒の最上位においたこと、第二、ペテロはローマの最初の監督であつたこと、第三、ペテロに附與せられた優越の地位は、ローマ監督領內のその相續者にうつさるゝこと)は、いよ〳〵ローマの地位を高め、グレゴリー一世即ち大法皇(五九六—六〇四)を經て、その勢力益固く、終に偶像破壞の令を奉ずるを肯ぜざるに至つた。

(ハ)かくて偶像爭論は、八四二まで引きつゞき、東教會は破壞黨、西教會は保存黨として、相對立した。後、女帝イレネは、七八七に令を撤したが、分離を復するに至らなかつた。東西は永久に別れて、東はギリシャ教會として、終にロシヤ方面に、西はローマ教會として、西歐方面にその勢力を維持した。

第三節　サラセンの興起

(一)マホメット以前のアラビヤ　アラビヤは、古來未だ曾て國民として活動したことがなかつた。是れその地理上にも、政治上にも、宗教上にも(イ)統一の缺如したことが、最大原因で、纔かに(ロ)血族的復讐心の旺盛なること(ハ)カーバ崇拜の習俗あることが、國民的に共通なるものあるのみであつた。この兩者を基として、アラビヤの民族的活動を促進したものが(ニ)マホメットであつたのである。

(イ)地理上には、中央に沙漠あるが爲めに、東西南北の各部は互に分離せられて、國内相互の交通よりも、却つて國外との交通が便利とせられる有樣で、宗教上には、キリスト教・ユダヤ教・ゾラトゥストラ教など區々で、統一を缺くこと甚しかつた。

(ロ)血族的復讐心とは、部落間に於ける、鬪爭の念の執拗なるの謂である。

(ハ)カーバは、方形の意、メッカにある神殿、長十二メートル幅十メートル高十五メートルの石室で、その下部北東隅に嵌め込まれたる隕石が、その神體である。國人は信仰の異同、部落の如何に論なく、これを崇拜したのである。

(三)マホメット(マホメット)は、五七〇を以てメッカに生れ、幼にして父母を亡ひ、叔父の養ふところとなり、緣者なるメッカの富豪に、使用人と爲り、屢々隊商とゝもに、沙漠を横つて、シリヤ地方に遊び、諸宗敎の說を聞くことをよろこび、而かも家業には精勵した。二十五歳の時、主家の寡婦ハヂーヂャと云ふと婚し、メッカ屈指の富豪となり、冥想に耽る餘裕を得四十歳で頓悟し、唯一神アラーから、この世におけるプロフェトとせられたと稱して、敎を說きはじめた。イスラーム敎即ち回敎がこれである。

(二)回敎の創唱　マホメットの新敎を創唱するや、メッカ人の忌むところとなり(イ)メディナに逃去するの止むなきに至つた。これを(ロ)ヘヂラと稱し、爾來此の宗敎は、武力を用ゐて布敎せらるゝ方針と爲り、所謂(ハ)コーランを左手にし、劒を右手にして進むといふ、戰鬪的態度をとるに至つた。

(イ)メディナは、メッカの北方にあり、かねて、メッカと商業上の敵手であつたから、メッカを逐はれたマホメットを容れたのであつた。舊名ヤートレブであつたのを、回敎徒は、この時の事を德として、メディナといふ美稱を與へたのである、「よき市」といふ義である。

(ロ)ヘヂラとは、アラビヤ語で「逃去」といふ義である。六二二年七月十五日に行はれた。回敎徒は、この年を以て紀元とする。ヘヂラ曆といふのがそれである。

ヘヂラ曆は、敎主ヂーマルの時六三六に定めた。一日を晝夜十二時に別ち、または二十四時に分ち、七日にて一週とし、一月は二十九日または三十日で、一年は十二ヶ月三十年毎に十一の閏年(三百五十五日)と十九の平年(三百五十四日)とを置き、閏年には末月を三十日とする。三十年期中二・五・七・十・十三・十五・十八・二十一・二十四・二十六・二十九の年に、閏年を置く規定である。されば、ヘヂラ曆の年數を三十にて割り、殘りたる數がこれの何れかにあたるか否かを知れば、平年か閏年かを知ることが出來る。ヘヂラ曆の月の名は

第一月　モハレム(三十日)
第二月　サフアール(二十九日)
第三月　レビ・エル・アッヴェル(三十日)
第四月　レビ・エル・アッケル(二十九日)
第五月　ヂエマディエル・アウヴェル(三十日)
第六月　ヂエマディ・エル・アッケル(二十九日)
第七月　レヂエブ(三十日)